Librarian

午後零時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Librarian

【Nコード】

N1363M

【作者名】

午後零時

【あらすじ】

戦争において、魔術書一冊が数の暴力を圧倒する世界。国々が魔術書を奪い合い、新しく発見された魔道書に大金をかける。

一攫千金を夢見る人間が魔道書の眠る古代遺跡に群がる。そんな世界の人間とそんな世界ならざる世界の人間。交わることなどないはずの交わりは、いったいどこに収束するのか。

歴史という時の暴力に翻弄される人間たちの生き様を見よ。

Prologue (前書き)

処女作となります。至らないところが多々あると思いますが、少しでも皆様が楽しめる作品となるよう努力して行きたいと思えます。

作品は不定期更新になります。

Prologue

それは一冊の本だった。
在る意味では至高で、在る意味では子供の落書きに劣る。
最上級の紙の束。

人はそれに意味を持たせたがった。
ある人間が不可解な線の塊に己の知識を無理やり当てはめた。
ある人間が不可解な図形の集まりに指向性を持たせた。

彼らにとつての落書きが彼らにとつての至高へと昇華するのに時
間はかからなかった。

暗闇に包まれた、時の遺骸を彼らは暴いた。
明るさに目をくらませる、先の恩恵を彼らは奪った。

二人の男が至高の正体に近づいた。

男は高揚し叫んだ。

男は恐れ慄いた。

その日、世界は牙を剥き、

牙は己に突き刺さった。

そして……

何程でもない紙の束。

在る意味では劣悪で、在る意味では神の啓示に勝る。
それは一冊の本だった。

い。原初の罪は、破綻の種を撒き散らす。誰にも止めることは出来な

……死んでいる？ いや、死んでいない。ただ死んだように眠っているだけのようだ。

山裾から太陽が顔を出す早朝、木漏れ日の中を少年が一人、巨大な本を枕に身動きしない。

森の目覚めを運ぶ風が、少年の長くぼさぼさの髪をなでる。緑銀のそれは、大粒の雨を抱え込んで、太陽の光にきらきらと鼓動する、雨上がりの萌え木のようだ。

少年の寝息は小鳥の歌に消え入って、森はいつもどおりの朝を迎えた。

そんな中を、

「うおーい」

野太い声が邪魔をする。

その声は森の営みを容易に掻き消して、木々を掻き分けるたびに発するこすれた金属音は、生き物を追い払うのに十分すぎた。

「ここにいたのか」

大木の幹から顔を出した男は、この場には似つかわしくない、ごつい形をしていた。けれど、それ以上の異様さが、人の集まりの中ですらこの男が浮いてしまうことを容易に想像させる。

全身、武器づくめだった。先ほどから響いていた金属音は、この男が動いたたびに武器の柄が擦れあってうまれるものだった。

普通の人ならば起きていいはずの騒音。けど、少年は起きない。

「おい！ 起きろ。仕事だ」

普通の人ならば起きてくるはずの轟声。でも、少年は起きない。無反応を決め込む少年に、男はため息を一つはいた。

つま先で少年の軽く小突く。男は動きが無いことを確認すると、今度は強く少年を揺すり始めた。

普通の人ならば飛び起きるはずの衝撃。それでも、やっぱり少年は起きなかった。

黒髪を短く刈り上げた頭を搔いて、男はおもむろに腰へと手を伸ばす。そこに括り付けられた筒を手にとると、ふたを開けて。そのまま、中に入っている水を少年の顔へとぶっ掛けた。その下にある本に構いもせずに。

「ぶわ！　なんだ!？」

やっとのことで生き返る少年。その顔は寝たりないというよりは、寝すぎた感じがひしひしと伝わってくるものだった。

「やっと起きたか。仕事だ、いくぞ」

「あゝ……ごめん、ガル」

そういって、寝ぼけ眼をそのままに少年は本を背負う。その本は新品のように綺麗だった。それこそ、ガルと呼ばれた男が掛けた水の跡すらないほどに。

「もう少し普通に起こしてほしかったよ」

「なら、普通に起きる。普通に起こしても起きないからあんな手段をとってるんだっつもの」

うんと頭をかく少年は、そのたびに緑銀の髪から大量の白い粉

を散らしていた。

「……お前、いつから風呂に入ってない？」

「うーん？ さあ？ おぼえてないよそんなこと」

男が二度目のため息を吐く。

「とりあえず、この仕事が終わったら風呂につれてってやる」

先のやり取りで生き物の気配がしなくなった森の中に男の眩きが響いた。その後ろを少年はふらふらと付いていく。

その背にある本には、題字が書かれていなかった。

森の中を進む男と少年、しばらく道なき道を進んでいくと、前方が開けた。

湖だ。春先の澄んだ空を水面に映して風が吹くたびにゆらゆらと水面を揺らす。

水際は百花繚乱、あまりに幻想的な世界がそこにあった、そしてその世界の中ではあまりにも不釣り合いなものも。

色は漆黒。太陽の光を反射して金属特有の光沢を放っている物体が水辺にある木のふもとに立てかけられている。

「あ、もしかして？」

少年が漆黒の物体に近づいていく。

風を裂く刀のような鋭いフォルム、乗り物だろっことはわかるがハンドルがあるのに車輪がない。

「魔道二輪、銘は霄劔よいはや。まだ試運転の段階らしいがな」

「霄劔よいはやか、かつこいいね」

少年が興味深そうに、実際興味深深なのだろう霄劔よいはやを覗き込んでいる。

「そろそろいいか？ 人を待たせてるんでな」

「あ、そうだね。いこう」

ガルが霄劔よいはやに触れる。

「霄劔起動」

ガルの言葉に反応して、霄劔よいはやが淡い光を放つ。と同時にその機体が物理法則を無視して浮かび上がる。

それにあわせて少年から感嘆の声が漏れる。

「ほら、早く乗れ」

「うん」

先に乗り込んだガルの後ろに少年が飛び乗る。

「おっけ」

「よし、振り落とされんなよ」

二人を乗せた霄劔よいはやが周りに生えてる草を揺らすことなくゆっくり垂直に浮かび上がる。

付近にある木よりも高い位置まで到達するや否や、重心を前に傾けアクセルを踏み前方に加速。

「おお！！」

急速に加速しているにもかかわらず、二人は平然としている。まるで慣性を無視しているかのよう。

二人が去った後、身を潜めていた動物たちが活動を再開し、森は普段の喧騒を取り戻した。

右旋回、左旋回。急上昇、急降下。錐揉み飛行、高速飛行。

宵剣よいはやのできるあらゆることを試しながら進む二人は、風に髪を揺らすがそれだけだ。

体を何かで固定しているわけでもなく、強い力で機体にしがみついているわけでもない。

それなのに機体が逆さになっても二人の体が空中に放り出されることなく走行している。

そもそも、音と肩を並べて走行している機体にかかる風が髪を揺らす程度ですんでいること自体がありえないのだが。

眼下の景色が次々と移りかわる。

彼らを通ったところをなぞるように地上の木々が強風に煽られ体を大きく揺らし大量の葉が舞い上がった。

「もつそろそろだ」

山を三つほど超えたころ、眼下に巨大な建造物が姿を現した。険しい山に囲まれた建造物は、風化していた。そのくせ、見るものを圧倒するほどの威容をなお誇っている。

何人を寄せ付けない雰囲気放了つ建物のその入り口、降下していくにつれ建造物の全容が視界から追い出され入り口付近しか見えなくなっていく。

入り口の前には女性が立っていた。

太陽の光が山に遮われ入り口はいまだに暗く、彼女の姿をはつきりと視認できるわけではないが。二つの山と長い桃色の髪がその人物を女性だと証明している。

彼女が二人に気づいたようだ、読んでいた本から目を放し上を見る。二人を視界に収めると本を腰にぶら下げたかばんにしまい淑女じみたしぐさで二人に手を振る。

二人は彼女の前の空間に着地点を定め降下して行った。

「おつかれさまです」

霄劔よいはやから降りた二人に近づいてきたのは妙齡の女性。

男ならまずその豊満な胸に視線を止められ、妖艶な姿にその場に釘付けにされ、常に微笑んでいるかのようなその細目に心を鷲掴みにされ、甘く透き通る声に理性を崩されるだろう。

「すまない、遅れた」

「ごめんね」

「いえいえ、お気になさらず」

彼女の品のある物腰や言葉遣いが一見して妖艶な女性を淑女たらしめている。そう、一見すればだ。

「ただ、今夜私と熱く語り合ってくれただけでよろしくてよ。ガル

下様」

淑女の皮がはがれた。

「却下」

あわてることなく即答するガルド。感情すらこめていない。

「ひどい！ 淑女の誘いを無碍むざにするなんて……ハッ、もしかしてこれは放置プレイ？ 今夜憔悴せいすいしきつた私のところへガルド様が……うふふ、うふふふふえへへへ……」

シヨックを受けて落ち込んだかと思いきや、何事かをつぶやきながらくねくねと体を揺らし、しまいには怪しく笑い出す始末。

「今夜はよろしくね」

「いかなーよ」

淑女の皮の下は盛りのついた野獣だった。

「……さて、冗談はここまでにしておきましょう、霄劔よいはやはどうでしたか？ どこか違和感がありませんでしたか？」

野獣がまたひとつ皮を脱ぐ。なかから出てきたのは淑女ではないなにか、彼女の仕草や視線、声色に含まれていた暖かさが完全に消失した。そこにいたのは一人の探検者だ。

「ブレーキをかけた時に多少違和感があったな」

「なんかこう、ブレーキかけてるのに後ろに引っ張られる感じがしたよ」

淑女、野獣、探究者。

この人格の二段変態を遂げた彼女に相對する二人に動揺は見られない。

「なるほど、緩衝機構アフターバーの魔道制御系が不完全だったか……ほかには何か気付かれた事はございませんか？」

「別に気にならなかったよ」

「ああ、そもそもブレーキの違和感も意識しないと気づかない程度だ。相変わらず丁寧なつくりだ」

「ありがとうございます。しかし、ブレーキの異常というのは命にかかわることですのですぐに改良させてもらいますね。本当はこの後の遺跡探索にも持って行ってもらいたかったのですが……それはまた次回にお願いできますか？」

「了解、それじゃあそろそろ行ってくる。承認を」

「ええ」

そういつて取り出したのは一冊の本、薄いが綺麗な装飾がなされ、表紙と背表紙に書かれている金色の文字が黒い地に映えている。表紙の表側に描かれていたのは手形とそれを囲む円、さらにその周りをなぞるように文字列が埋めている。いわゆる魔法陣のようだ。

「それでは始めますね」

彼女が表紙の手形に手を重ねて言う。

「アルマ・カンパネルダより遺跡管理者にマスターシステム管理者権限の一時使用許可を要求します」

アルマの声に呼応するように文字が淡く発光し、置かれた手の隙

間から青白い光が漏れた。それとともに、三人とはまた違う無機質な声が本から発せられる。

検索開始 アルマ・カンパネルダ 完了

照合開始 生命片一致 本人確定

アルマ・カンパネルダよりクロノパイディア遺跡管理者マルタ・サブナハに管理者権限の一時使用許可を申請 受諾されました

これより権限の使用が可能です。

青白い光が止む。アルマが表紙をめくるとなかには表紙と同じように手形が描かれており、その周りを円、文字と囲まれている。それが両ページにひとつずつ、計2つあった。

「手を置いてください」

二人が手形に触れる。

「アルマ・カンパネルダよりシシー・ノーレッジ及びガルド・クオーツに遺跡を一時開放」

シシー・ノーレッジ ガルド・クオーツ

両者生命片登録 完了

両者にクロノパイディア遺跡を一時開放します

パタンと音をたてて本が閉じられる。

「完了いたしました。すでにほかの方が探索及び魔物の殲滅を完了されているからといって仕掛けや魔物が残っている可能性もゼロではありません。お気をつけて」

「ああ、行ってくる」

「いってきます」

二人が遺跡の扉に触れた。一瞬、魔方陣が扉に浮かび上がりそして消える。扉が二人を拒むことはなかった。

Chapter 1 - 2 - Bound With Joy - (前書き)

今回、話の中に数字パズルが出てきます。

もし時間があるのなら、解いてみてください。

シシーの能力がよりはっきりと認識できるはずです。

くクロノパイディア遺跡 地上

時というものは万物に等しく影響する。この遺跡も例外ではない、風化が進み壁がはがれ柱は何本か崩れて原形をとどめていない。

すでに書物や伝記にすら存在しないほど昔に建てられてからいままでの積もりに積もったほこりが扉を開けたときに入り込んだ風によって舞い上がる。

だが、それでもなお遺跡は荘厳さを失うことはない。

部屋の中央に存在する祭壇。それを左右から挟みこむように天井に開いた二つの円形の窓から垂直に降り注ぐ二本の光線。その祭壇には一体の女性の像、膝をつき両手で抱えた円盤を天にいる神に捧げるかのように天にかざしている。そして彼女の目線の先、入り口と対になる壁には月をモチーフにした紋章が描かれている。

窓から降り注ぐ光が床付近で滞留しているほこりに反射してまるで雲上の聖域に見えるのはひとえにここが神殿だからだろうか。

くクロノパイディア

古代ゲルシア語で「時の子」を意味する。紀元前7622年に建造された巨大神殿。

総面積は25km²、周り全体を険しい山に囲まれている。

魔道書の保管を主の理由として建てられたが、神殿として祭事や政治も担っていた。

「……だつて」

背負っていた本を床に広げ、シシーは簡潔に読み上げる。いくら窓から光が入ってくるとはいえ、ここは遺跡の中。少し光源から離れるだけで薄暗い空間が支配する。シシーがいるのはその空間。本の文字が青白く発光し、覗き込むシシーの顔を照らす。

「時の子つてことは、ここに保管されてる魔道書は時系統つてことだよな？」

目を本から放すことなくガルドにたずねる。

「そうだろうな」

ガルドもシシーを見ることなく答える。その視線は天井にある二つの窓に注がれていた。

「ここで発見された魔道書の中に時系統の魔道書つてあつたっけ？」
「……いや、なかつただろうな。時系統なんて特殊なもんは発見されたらすぐ知れ渡るだろ。実際前に見つかったときは二日で知らない人はほとんどいなかつたじゃねえか」

「……つてことは」

「ああ」

ここにきて始めて二人がお互いを視界におさめた。シシーは笑みを隠さず、ガルドは笑みを隠せず。

「BINGO！」

二人が声をそろえて言う。

「いよっと」

掛け声と同時に立ち上がる。膝と本の表紙についたほこりを払い落とし、本のホックを掛けて背負いなおす。

「それじゃあ、まず謎解きの鍵パスルを探さないかね」
「あれだと思っただが」

そういつてガルドが指差すのは、さっきまで見ていた円形の窓。

「……たしかに」

窓を通って降り注ぐ光が真下の床を照らしている。これだけ見ると別におかしい所はなさそうだが……

「今、朝だもんね」

そう。いくら遺跡に来る途中に霄劍よいはやの飛行テスト（という名の遊び）をしていたからといつても森を出たのは空が白み始める早朝、遺跡についたのは朝だった。そうなると、今見ている光景の異常がハッキリする。

窓から入ってくる光が真下の床を照らしている。今の時間、太陽は大きく東に傾いているはずなのだ。

「ガルはそつちを調べて」

祭壇をはさんで二つある光のうち、入り口から見て右側にある光

に向かいながら左側の光を指差す。

「わかった」

ガルが指差されたほうに向かう。

光柱の下に来たシシーが上を見上げる。窓を越えたそのずっと先にあるはずのない太陽が輝いている。

太陽を確認したシシーは床のほこりを払い始める、手はほこりで真っ白だ。今までの積もりに積もったほこりを払い始めてしばらく、少し青みがかった白色をした正方形の板石で構成された石畳が顔を出す。

光に照らされた床の中央のタイルのそのまた中央、ほこりがこびり付いて見にくくなっているが円形状に溝がはしっている。

シシーがその溝につめを差し込んで持ち上げると、円形の蓋がはずれなから出てきたのは綺麗に掘られた円形の穴、暗くてはつきりと見えないがその底に月の紋章が刻まれている。

ガルドのほうも同じ仕掛けがあったのだろう床の一点を覗き込んでいた。

「ガル、そっちになんか描かれてる？」

「描かれてるぞ、たぶん太陽だろうな」

「太陽……こっちは月が書かれてるんだけど、これだとおかしいね」

「そうか？」

「ここの仕掛けってたぶん月と太陽をペアにすればいいんだと思うんだけど」

「……？ ペアだろこれ」

そういつて指差すのは地面に開いた二つの穴、なかには月と太陽が描かれている。

「あれ」

それに対して、シシーが指し示したのは遺跡の唯一の光源である天井の窓。

「なるほど」

正確にはその窓を越えた先にある太陽を示していた。

「こつちは月と太陽がそろってるからおいとくとして、問題はそっちだね。ねえ、あの女神像持ち上げられる？」

「ちよつと待てな。よつと、ん？ 予想以上に軽い」
「そのまま持つててね」

シシーが女神の足元を見る。

「あつた！ 月の紋章」

女神像の台座の裏側に月が描かれている。

「じゃあこれを太陽の紋の上におけばいいのか？」
「たぶん」

女神像を抱えたガルドが太陽の紋章があつたところまで移動し、紋章同士を重ねるように置く。直後女神像が光りはじめた。足元が淡く光り始めだんだんと上に昇ってくる。光が女神の掲げている円盤までたどり着くと彼女を包み込んでいる光が一段と明るく輝き、

それに伴い円盤が変化する。

「鏡だな」

「うん、鏡だね」

掲げられていたが円盤が鏡へと変化し、その鏡面は太陽からの光を全身で反射している。

「この光をあゝの壁に描かれてる月に合わせればいいのかな」と

シシーが女神像に手を回し回転させる。

鏡によってねじ曲げられた光が壁に描かれた月を照らす。遺跡が鼓動を始めた。

まるで神殿全体が揺れているかのような振動とともに月の紋章が描かれた壁と女神像の間の床が降下している。

今、道は開かれた。

開けた地面のその先は、本能的恐怖を引き起こすような闇と長い階段。既に振動は収まりあたりは静寂に包まれている。

深く深く続くそれは、深淵へと接続され、一度足を踏み入れれば二度と戻ってこれないのではないか。そんな思いが浮かんでくる。

「はやくいこう！」

そんな場所に躊躇なく飛び込んだシシーが振り返ってガルドに言った。瞳にまぶしいばかりに輝く星を浮かべ、”今わくわくどきどきしてます！”を体全体で表現しながら。そんな少年を苦笑気味に見ているガルドも一歩、足を踏み入れた。

「……やっぱり、ディレングルの遺跡洞窟だよね。あそこの謎は難しかったなあ」

「俺はあのときほど生きててよかったと思ったことはないぞ」
「生きてるんだし、気にしない気にしない」

雑談をしながら降りる二人。地上からかなり離れたこともあり、地上の光だけでは足元もおぼつかないところだが、彼らの周りをふよふよと浮かぶ光源から放たれる光が闇をよせつけない。

ふと光の端が階段ではなく平面な床を映した。

「あ！ 下についたみたい！」

「おい、そんな急ぐと」うわ！ うっ、ぐえ、ぬあ、ぐふ、いつ、
がは」……落ちるぞ」

足を踏み外し残り30段ほどを一気に転げ落ちる。ガルドが階段を下り終えた時、シシーは頭を押さえながら床につづくまっていた。

「いたい〜……」

「急ぐからだ。ほら、立てるか？」

差し出された手を握り立ち上がる。

「うっやばいよ、脳細胞が〜……」

「死にやしねーよ」

「知的能力が低下する〜」

「それは由々しき事態だ！ お前から知能をとったらいったい何が残るといふんだ」

ガルドが大げさに嘆いている。

「ひどい！ ひどいよこの人、いつもつれなくされるアルマの気持ち分かる気がするよ」

その言動とは裏腹に彼らは笑顔だった。

「それにしても長い階段だったね、10分くらいかかってなかった？」

今来た道を振り返る、地上の光がはるか遠くに小さく輝いている。

「これは戻るとき苦労するな……」

「気にしない気にしない」

「……そうだな」

地下を進んで行く二人の前にひとつの扉が見えてきた。

くクロノパイディア遺跡 地下保管庫

扉は遺跡の入り口に比べたらあまりに飾り気のないものだった。扉を開ける。それに連動するかのように部屋に明かりが灯り部屋の様子が浮かび上がる。

「うわあ！ ……何にもないや」

横幅10m、奥行き10m、高さ10mほどの大きさの部屋に一人立つだけで占領してしまうほどの間隔で石で作られた本棚が整

列している。もしこの棚すべてに本がびっしりと納められていたら
圧巻だっただろうが、今現在棚の中に本は一冊も存在していない。
なんとも物悲しい雰^か囲気を醸^もし出している。

「ここにある本、全部でいくらくらいになったんだろうね」

「ここを攻略した人数とここにあった本の種類にもよるが、まあか
なりのあいだ遊んで暮らせるほどは手に入っただろうな」

会話をしながらも二人は棚や床、壁を調べている手を止めない。

「見つけた。これは……黒い太陽？」

ガルドが壁の一箇所に描かれた紋を見つめる。あまりに小さく、
一度目を話したら見失ってしまいそうだ。

「みつけたの？」

「ああ、黒い太陽が描かれてる」

「黒い？」

シシーが紋章を見つめて数瞬。

「これ、黒い太陽じゃなくて日食の図だよ。ほら、黒丸の周りにも
ひとつ円があるでしょ」

「たしかにあるな」

「だからこれ太陽の上に月が重なってるんだよ」

「なるほど……それでどういう意味だ？」

「さあ？」

沈黙

「あ、日食だし明かり消したらなんか浮かび上がるかも。コロナみたいな。」

「……………」
「紋章指で押さえといてね、見失っちゃいそうだから」

シシーの童顔が子供が失敗をごまかすような曖昧な笑みを形作る。軽く駆け足で部屋の入り口のほうへ向かっているシシーの後姿を眺めるガルドの右手人差し指は律儀に紋を押さええている。

入り口の前にたたずむシシー。一瞬の思考の後、開け放たれていた扉に手をかけ力いっぱい押す。ずずずと鈍く重厚な音を響かせ閉じて行く扉とうううつと腹のそこから搾り出すような声が長さ10mの立方体に響き渡る。石で作られた扉は少年には重すぎた。

残り数ミリを押し込み終わると、扉から歯車がかみ合うような音が響き。部屋の中から光が消えた。

「はあ……………どう？　なんか変化あった？」

「いや、今のところは……………ん？」

「どうかし、いたあ！」

右も左も分からない暗闇の中、記憶を頼りにガルドのところまで戻っていたシシーは途中にある本棚に盛大に激突した。

「大丈夫か？」

「うん……………だいじょぶ。それよりどうかした」

「シシーの考えであつてたみたいだぞ」

ガルドの目の前に光の線が展開される。視認出来るか出来ないかの光が時がたつにつれその光度を増していく。それが計三箇所、入

り口を除く壁で同じように。

最終的に浮かび上がってきたのは三つの横一列に並んだ数字。シシーの持つ本と同じように空中に数字が浮かんでいる。

「77、21、105、か。シシー、ほかのところも見に行つてくれないか？」

「もういつてるよ。こっちは、385、55、143、だね」

暗闇にも慣れ、三箇所から発生する淡い光だけでも大体のものの位置が分かつてくる。

ガルドのいる壁の反対側に向かったシシーはそこに書かれていた数字を確認したのち、最後の一箇所――扉のある壁の反対の壁へと向かった。

途中でガルドと合流し最後の壁に来た二人。

「210、165だね。ふむう……わかった」

「はいいな」

壁の数字を見てから数秒である。

「これだけが取り柄だしね。どうする？ 解く？」

「いや、今は先に進もう。後で解説してくれ」

「おっけ。それじゃあ」

ガルドに答えが見えないよう、体で隠しながら空白へ何かを書いているシシー。

書き終わると同時に、先ほどと同じように部屋全体が振動する。

重苦しい音を立てながら目の壁が左右に割れる。と同時に閃光。光の奔流が二人を襲う。

暗闇に目が慣れていた二人は否応なしに目を瞑るつむことになる。

くクロノパイディア遺跡 未知エリアく

ここが地下遺跡だということを忘れさせる風景が広がっていた。

上を見上げれば丸く切り取られた空、下を見下ろせば奈落へと続く縦穴。そして目の前では空中で停止した大地が蛇行、分岐し広がって行く。巨大な井戸のような空間に大地が浮かんでいる感じた。

地を覆うように雑草が繁茂し大地を若緑色に染めあげ、自生して間もないと思われる若木とところどころにある分岐した道の先をふさぐように鎮座している巨大岩が唯一ほぼ平坦に続いている大地に高さを演出している。

その光景を眺めているシシーの目の前に赤く輝く光が出現した。体の動きに合わせ常に右手を少し伸ばせば触れる位置に移動している。

「こんなところは報告されてないね」

「大方、前のエリアで攻略をやめたんだろ。金に目がくらんだか、そこで終わりだと思ったかして」

「と！ いうことは……一番乗りだね！」

「ここからは何が起きてもおかしくないからな。気をつけるよ」

「もう起きてるんだけどね。空気が澄んでて気持ちいい」

ほこり臭い淀よどんだ空気で汚れた肺を洗淨するように深呼吸をする。

「くくんつ。いよし、触るか。ガルも周りを警戒してて」

「了解」

シシーの手が伸び、赤い光に……触れた。

一転

ノイズが走ったように景色がゆがみ、次の瞬間世界はがらりと変化していた。

全長30mを軽く越えるような木々が乱立する。空は生い茂る木々に侵食され、太陽の光も地面へ届くころにはその勢いを限りなく殺がれている。大地には木の根が縦横無尽に埋め尽くし、先ほどまで若緑色だった大地は薄暗く無骨なものへと変貌している。

圧倒的存在感を放っていた巨大岩は姿を消し、かわりに周りの木々のなか一際でかい巨木があちこちの道をふさいでいる。

景色だけではない。肌をなぜる風も、鼓膜を揺らす音も、鼻をくすぐる匂いもだ。

この世界の中、蒼い空、暗い縦穴、そして二人の人間だけが変わらない姿をしている。

「さすがは”時の子”を冠する遺跡なだけあるな。仕掛けが壮大だ」

「そうだね」

「未来へ来たのか？」

「ちょっと違うかな。ほら、さっきの本棚とかぜんぜん風化してない」

「劣化防止の術がかけられたりしてたんじゃないか？」

「それもなしよ、だってさっき頭ぶつけたとき本棚欠けたもん」

「……頭大丈夫か？」

「へ〜き、心配してくれてありがと。たぶんぼくたちが未来に来たんじゃなくてこの空間が未来に進んだんだと思うよ。……あんま変わんないか」

シシーが手元に浮かんでいる光を見る。赤色だった光は青色へと変化している。

「また触るから、もっかい周り警戒してね」
「ああ」

青い光に触れる。

またもノイズのようなものが走り、世界が一転する。

二人が始めに見た若緑色の大地が広がっていた。

「未来と過去を行ったり来たり……こんなのはじめてだ〜!!」
「誰だってそうだろうが」

ガルドのつぶやきはシシーの耳には入らなかったようだ。

「進み方もわかったし行こう!」
「……そうだな、行くか」

未来と過去を切り替えて進む。巨大な岩が道をふさいでいれば未来へ進み、生い茂る木々が行く手を妨げれば過去へと戻る。

この繰り返しの中、はじめこそはしゃいでいたシシーだが次第に歩みが遅くなる。

「う、頭クラクラする〜……」

視覚、聴覚、嗅覚、触覚から送られてくる情報があまりにも早くころころと変わるため、シシーは酔っていた。

「少し休憩するか。ちょうどいいから前の部屋の問題の解き方教えてくれ」

「あ、うん。わかった」

森の中、座るのにちょうどいい高さまで飛び出した木の根に腰掛ける二人。シシーは腰にくくりつけられたポーチをゴソゴソとまさぐり、なかからメモ帳と書くものを取り出した。

「それじゃあ教えるね」

「よろしく頼む」

シシーがメモ帳に何かを書き込んでいる。

「これ見て」

シシーが書いていたのは前の部屋にあった数字の羅列。

7 7 , 2 1 , 1 0 5

3 8 5 , 5 5 , 1 4 3

2 1 0 , , 1 6 5

5 , 1 0 , 6

4 3 0 , 4 , 9 0 2

「後に書いた二組は前に書いたやつと同じ法則で書いてあるから。なんか気づかない？」

ガルドがメモ帳を凝視している。何も思い浮かばないのかだんだんと眉間にしわがよってきている。

「……いや、分からないな。真ん中の数字がその組の中で一番小さくなるものと思ってたんだが、5、10、6に矛盾した」

軽くお手上げのポーズをしながらガルドがいう。

「そうだね。でも真ん中の数字に目をつけたのはOKだよ。真ん中の数字だけ共通点があるんだよ」

「21、55、10、4……共通点……ああ、素数が」
「あたり」。全部二つの素数から成り立ってるんだよ。21＝3×7、55＝5×11みたいにね。それを踏まえて三つの数字を見直すとなんか法則が見えてこない？」

またもガルドが眉間にしわを寄せ始めた。シシーは先ほど書いた紙をちぎってガルドに渡し、また新しく何かを書き始める。

「これ最終ヒント……というよりはほぼ答えだけど」

$$77 \parallel 7 \times 11$$

$$105 \parallel 3 \times 5 \times 7$$

$$385 \parallel 5 \times 7 \times 11$$

$$143 \parallel 11 \times 13$$

$$6 \parallel 2 \times 3$$

$$430 \parallel 2 \times 5 \times 43$$

9 0 2 || 2 × 1 1 × 4 1

「なるほど、素因数分解して出てきた数字のなかで最小のもの同士をかけた結果が真ん中の数字なのか」

「だとすると空欄には何が入る？」

「6」

「正解〜！ 真ん中の数字の共通点に気づいて因数分解まで持っていけるかがみそだったね」

メモ帳をしまい立ち上がる。体の筋をほぐすように軽く運動する。シシーからは疲れの色は伺えない。

「もう大丈夫。ごめんねガル、時間とっちゃって」

「いや、俺も気分が悪くなってきたからな。気にすんな」

「そっか。ありがと」

「ほら、早く来い」

ガルドが森の中を進んで行く、少し遅れてシシーが駆け足でガルドの元へ進んで行った。

そのあとも、二転三転、過去と未来を切り替えながら進んで行く。

3時間ほどだろうか、時には行き止まりから引き返し、時には木の根が作った天然の橋を渡りたどり着く。

目の前には、遺跡の入り口の扉とは比べ物にならないほど巨大で神がかつた荘厳な装飾のされた扉がずんと構え、それを守るように太い蔓が扉を覆っている。

「これで最後かな？」

「そっかもな」

シシーが青い光に触れる。それだけで、扉を嚴重に守っていた蔓たちは足元で群生する植物の一部と化した。それを踏みしめながら扉に近づき、ガルドが右側に、そしてシシーが左側にそれぞれ手をつき、二人同時に扉を押した。

扉はほぼ何の抵抗もなく開き始める。二人が手を離れた後も扉はひとりでに動き続けた。

広さだけでいえば地下保管庫より少し広い程度だが、視覚的には保管庫より何倍も広く感じる。余りにも物が無いのだ、部屋の中に一つの像があるのみ。しかし、ここが最後の部屋だというのは容易に想像できる。

最初に目に入ってきたのは、何人もの人間が折り重なって天へと手を伸ばしている壁画。彼らの手の延びる先には光を放つ一冊の本が描かれていた。そして左右の壁には一つの本をめぐって血みどろに争う人々、入り口の壁にはが一冊の本を愛しむように抱えている一人の女性が描かれている。

それらの中心に置かれた像は正面に描かれた絵画をそのまま彫りだしたように何人もの人間が折り重なり天へと手を伸ばしている。余りに精巧に作られたそれは石から彫り出されたのではなく、本物の人間を石へと変えたようでもある。

自ら意思を持ち、今にも動き出しそうな石像たちの手の延ばす先にそれはあった。

縦50cm、横40cm、厚さ10cmほどの巨大なものだ。表紙はシンプルなもので、ワインレッドの背景に金で書かれた一つの魔方陣、そして魔法陣の少し上には金字でこう書かれていた。

Chronopaidia

と。

バチンという音が部屋中に響き渡った。音源は二人の手のひら、ハイタッチした際に生じた音の波が鼓膜を揺らす。そしてシシーが地面に着地した音、シシーの身長はガルドの胸あたりまでしかなくハイタッチをするには自然にジャンプをする必要が出てくる。

「いやった〜！！ ほら、クロノパイディアだって！ ガル〜！！」
「うれしいのは分かったから、落ち着け。また怪我するぞ」

はしゃぐシシーの頭を軽く小突く。

「まだ何が起こるかわからんからな、遺跡が出るまでは油断はするなよ」

「…………ふい〜、そうだね」

シシーは深呼吸すると緩んだ顔を引き締めた。本へと向かって歩いて行く。

本は目と鼻の先。手を伸ばせば取れるところまで来たが、あまりにあっさりしている。トラップが仕掛けられているわけでもなく、謎を解かなければいけないわけでもなく、守護獣と戦闘することもなかった。それが不安を煽らせる。

ガルドは剣の柄を握りいつでも抜き放てるようにし、シシーは背負っていた本を左肩にかけなおし左手は本の表紙に触れている。

「行くよ」

「ああ」

シシーが魔道書に触れる。

ピシリと魔方陣に電光が走る。

途端。光と文字の洪水が二人を襲った。

魔方陣に電光が走った瞬間、シシーは二歩後ろに下がり前方に右手を伸ばした、手の先メートルほどのところが波打つように景色をゆがませ円形状に広がって行き、波が通ったところから色が失われて行く。最終的にシシーの前には何もかも吸い込むような漆黒の壁が存在していた。

「こっち！」

ガルドは腕で光を遮断しながらシシーの作り出した壁へと飛び込んだ。

「大丈夫？」

「ああ、目もそのうち戻るだろ」

「そうだね」

それからしばらく光の洪水は途切れることなく闇を押し流し続けていた。

だんだんと光が弱まってくる。目を開けても大丈夫な光度にまで

下がったのを確認してから右手を下ろした。漆黒の壁が揺らぎ、霧散する。

魔術書は消えていた。

石像の人々の伸ばした手は本をつかむことは出来ず、虚しく天を仰ぐだけだ。

だが、変化はそれだけではない。

像の向こう側に今までなかったものが存在している。

「……女の子？」

魔道書が消え代わりに現れたのは一人の少女だった。

Chapter 2 - Bound With Joy - (後書き)

破綻の種は芽吹きだした。これより、世界は己に牙を突きたて始める。

少女はうつ伏せで倒れていた。床いっぱい広がった長く透き通るような銀髪と、彼女の着ている黒いドレス、そして髪やドレスの間から見える白い肌が織り成すコントラストが今この空間にはあまりにも不釣り合いなある種の幻想を生んでいる。

「う……ん……」

少女の口から呻き声が漏れた。両手を地に着き起き上がる彼女の肩からさららと髪がこぼれる。その手入れの行き届いた髪と見ただけで質のいいと分かる布で作られたドレスが彼女がやんごとない身分の人間だと教えていた。

「あの」

少女がシシーの呼びかけに反応して振り向く。まだ意識が覚醒していないのか目は半分閉じられ頭を揺らしている。シシーは彼女が自分のほうを向いたことを確認して口を開いた。

「時の子さんですか？」

部屋に沈黙が舞い降りる。ガルドはいまだ目の前の少女を警戒し、シシーは少女の返答を待っている。そして少女はというと”何を言ってるのかしらこの子は”といった感じに見つめ返している。その視線に多少の憐憫をこめて。

「何を言っているのかわかりませんが、とりあえず医者診察を受けることをお勧めしますわ」

言っていて今自分のおかれた状況に気がついたのか、頻りに周りを見渡している。

「おお！ 姿だけじゃなくて声もきれいだね」

「き、きれ……ふん、何なんですかあなたは。馴れ馴れしい。そもそも何処なんですか此処は？」

「ここ？ クロノパイディア遺跡だけど」

「こんな所へ連れて来ていたいというつもり？」

「はいストップ」

今まで沈黙を通していたガルドが二人の間に立つ。少女は一瞬びくりと体を震わせたが、それも一瞬のこと、キッとガルドを睨み付けている。

「なによ」

「いや、このままだと話がぜんぜん進みそうになかったんでね。おっと、すまない」

そういつてガルドは自分の体に巻きつけていた大量の武器を取り外し地面へとおいた。

口調こそきついものだが、言葉に勢いはなく、そもそも体が小刻みに震えている。彼女はおびえていた。

当たり前のことだ、見知らぬ場所で目を覚まし、目の前には見知らぬ人間が二人。そして片方は体中に武器を巻きつけている。この状況で怯えないほうがおかしい。

ガルドはとりあえず、恐怖心を煽っているであろう全身の武器をはずして少女に話しかけた。

「とりあえず自己紹介させてくれ。俺はガルド・クォーツ、それでこいつがシシー・ノーレッジ。遺跡の探索や魔道書の確保を仕事としている。今ここにいるのも仕事の一部だ」

なるべく相手を刺激しないよう言葉を選び、気持ちゆっくりと話しかける。ガルドが自己紹介をしている途中にシシーも何かを話そうとしたようだが、ガルドに口を押さえられたことよって敢え無く不発に終わった。若干ふてくされたように上目遣いでガルドを見つめている。

それを無視してガルドは続ける。

「それで今お前がここにいる理由だが。おそらく魔術書の自己防衛機能が働いたのか、はたまた魔術書本体が発動したんだと思われる」
「ちゃんとした思考が出来るまでには安定してきたようで、少女はガルドの言葉を聞いて考え込んでいる。だが、”思考できる”をそのまま”理解できる”に繋げるには自分が相手の言っている言葉に”相手と同じ認識をできる”ことが前提として存在する。」

では、その前提が崩れるとどうなるのか？

「ひとついいですか？」

「ああ」

「さっきから魔道書を確保しているとか、私が魔道書のせいで来たとか。何？もしかして読めば空を飛べたり楽園へ連れて行ってくれる妖精がでてくるあれですか？あなたもそちらの少年と一緒に医者に見てもらったほうがよろしいのではないですか？」

こうなる。

彼女から放たれる毒が容易にガルドとシシーの中に侵入してくる。
シシーには効いていないが。

「……シシー」

「なに〜?」

「簡単な魔術見せてやってくれ」

「おっけ〜」

ガルドがシシーを開放する。近づいてくるシシーにまたも体をこわばらせる少女。

「だいじょ〜ぶ、危険じゃないよ」

そういつて右の手のひらを胸の前まで持ち上げ、手のひらを少女の
に見えるように少し傾ける。そして感情を抜いた平坦な声で言葉を
紡ぐ。

「『Fotia』」
火よ

火花が散る。手のひらにはこぶし大の火が浮かんでいた。

「……え?」

「これが魔術だよ」

「これ、本物? ……っ!」

火に近づけた手を反射的に引っ込める。手に伝わる熱はその火が本
物であることを伝えていた。

「これでわか「すごい! なにそれ、どうなってるの?」……はあ

「魔術で火がそこに存在していることにしたんだよ」

「??? なんかよく分からないけど、ほかに魔法ない?」

「あるよ。たとえば……『水 Nero』」

浮かんでいた火は霧散し、かわりに手のひらに水がたまる。指の間から零れ落ちた水は部屋の石畳にしみを作っている。

「すごいすごい! ほかに?」

「ほかにほね……」

既に恐怖心は無くなり いや、多少はあるのかもしれないが圧倒的好奇心の前にその心が表面に出てくることはなかった 少女が少年に詰め寄って質問攻めになっている。言葉使いもなんのその、完全に素が出てしまっていた。

そんな二人を一步引いた位置で眺めてる男の頭の中にはひとつの思いが浮かんでいる。 ” ああ、こいつもシシーの同類なのか ” と。

「もつとすごいのは?」

「それじゃあね〜……『炎 Flouga』」

「ちよつとま」

爆発

ガルドは制止の声を最後までいうことはできなかった。鼓膜を破るような轟音と皮膚をじりじりと焦がすような熱気が部屋を満たす。シシーの放った炎は決して炎と呼べるものではなかった。

前髪から煙が昇っているシシーの頭にコブシが落ちる。

「いたあ！」

「阿呆か！ お前に四大系統の超初級以上が出来るわけないだろ」

「今回はちゃんと理解できた気がしたんだもん……」

このやりとりももう何回繰り返されたことか。

少女は二人が戯れている間に乱れた髪や服を整える。とたん、少女のまとう雰囲気も貴族然としたものに代わった。

「まだ名を名乗っていませんでしたね、ごめんなさい。アイリス・フランロッド・エルンバーグです」

「僕はシシー・ノーレツジね。さっきはガルに言われちゃったから」「あの時お前がしゃべってたら話が纏まらなくなりそうだったんだな。それと、いまさら言葉遣いを変えなくていい……どうかしたか？」

アイリスが二人に疑問のまなざしを向けていた。

「驚かないのね」

「何にだ」

「エルンバーグというのはどんなに田舎の人でも知っている大国のはずなんです」

「いや、そんな国は聞いたことがない」

「歴史書の中にも書いてなかったなあ」

アイリスの話が本当のことだとすると、彼女は大国エルンバーグの王族ということになる。

しかし、少年たちはそんな国を見たことも聞いたこともなかった。

「……どういこと？」

その質問にはシシーが答えた。

「ぼくの予想だけど、アイリスは遠い昔かはたまた遠い未来の人なんじゃないかな。って。まだ魔法が発見される前の時代から来たか、魔術が絶滅した時代から来たかのどっちかだと思っただよな。」

「……もしそうだとすると、帰れるのかしら私は……」

目に見えて落ち込むアイリスに、シシーは”やってしまった”っという感じ。ガルドはそんなシシーにため息ひとつ。

「なあアイリス」

「……なんですか？」

「この世界に時系統の魔術書ってのがあってだな。今見つかったのはほんの少し先の未来を見渡せるだけだが、きつと時間旅行を可能にするような魔術書もあるはずだぞ」

「そうそう！　今ここにアイリスがいるんだもん。絶対あるよ」

「……そうね、くよくよしてても意味ないか」

両手をたたき心機一転といった感じのアイリス。まあ多少空元氣ではあるが。

「ガルドにシシーであってるわよね。」

「あってるよ」

「お願いがあるんだけど」

「魔術書探しか？」

アイリスが頷く。

「手伝つてくれないかしら？」

「もちろん！」

「別に俺たちの目的と違^{たが}っているわけじゃないしな」

また少し表情が柔らかくなった。

「ありがとう」

「とりあえず詳しい話はここから出てからにするか」

「そうだね……ん？」

シシーがあたりの壁を見渡している、その視線ををつたガルドもシシーの発した疑問符の意図を理解した。アイリスだけは頭に疑問符浮かべ続けているが。

壁画に描かれていた本が消えていた。ただし、女性が抱えている本を除いてだ。

「どういう意味なんだろうな」

「ねえちよっと、私にも説明してよ」

「えっとね、アイリスが来る前はそこそこその壁画に本が描かれてたんだよ」

「ふん」

とりあえず納得はしたようすでアイリスは壁を見渡している。

ふと、

「ん？　じゃあ何でこの壁に描かれてるのは消えてないの？」

アイリスもシシーたちと同じ疑問に行き着いた。

「まだこの遺跡には謎が残ってるってことだね」

「調べてみるか」

「うん。ごめんアイリス、ちょっと待っててくれる？」

シシーへの返答に首を横に振る。

「私も手伝うわよ。なんか面白そうだもん。何すればいいの？」

「壁床天井なんかを調べて、おかしな点やその場に不釣り合いなものなんかを探したりしてくれればいいよ」

「わかったわ」

シシー、ガルド、アイリスは思い思いの場所から調べて行く、ガルドとアイリスは壁を、シシーはさっきまで像があった場所を。

それからしばらくの間、部屋からはガサゴソという物音と三人の話し声だけが漏れていた。

Chapter 3 - Contradiction - (後書き)

プログラムから時間にして25分ほど、やっとヒロインが出てきました。

長すぎですね……

Chapter 4 - Dance With Shadow - (前書き)

大変遅くなりました。

これからもしばらくは遅いペースが続きそうです。

「何も見つからないわね」

「うん」

部屋の探索を始めてもう既に一時間は軽く越えている。壁や床の隅から隅までそれはもう蟻ですら見落とさないほどじっくりと観察し、壁に描かれている絵画は配色すら調べる始末。

「一度戻るか、アルマも待たせてるしな」

ガルドの呼びかけに、半ばやけくそ気味に探索をしていたシシーとアイリスは「さんせ〜！」と叫ぶ。長い間探索していた手前、何かきつかけがないとやめたくてもやめられない状態と化していた二人はガルドの提案に即賛同した。

三人が部屋から出て行ってしばらくすると部屋である変化が起きた。壁に描かれていた女性の絵が本と共に消えたのである。

「浮いてる……」

部屋から出たアイリスの第一声。空中に浮かぶ大地に一瞬呆然とするも、それはすぐに興味対象へと変わった。

「これも魔術の一種だよ」

そんなアイリスにシシーは話しかける。その声はどこか楽しげだ。

「へえ、何でも出来るのね魔術つて。ねえ、空を飛べるようになる魔術もこの世界にはあるの？」

「まだ見つかってないな。だが擬似的になら可能だ」

ガルドが乗っていた魔道二輪（よいはや）も飛行魔術がかけられている訳ではなく、いくつかの魔術を複合したことによってまるで空を自由に飛べるかのように移動する乗り物だ。

「ならその魔術使つてあそこから出て行けるんじゃない？」

アイリスが示すのは空。

「むり〜」

「なんで？」

シシーは人差し指を立てる。

「まずはじめに、ぼくもガルもその魔術を習得できないの」

「習得できないの？出来てないじゃなくて？」

「詳しい話は後ですとして、人によって習得できるものが違うんだよ」

「ふーん」

とりあえずは納得しとくといった感じのアイリスの目の前で二本目の指を立てる。

「次にたとえ習得したとしてもあそこまで飛んで行くのは無理、途

中で生命片マナが足りなくなるからね。これも後で説明するよ」

「お願いするわ」。

「そういうわけだから歩いていこう、ガルも先行っちゃったし」

話はこれで終わり。と、シシーはガルドのもとへ小走りで行ってしまった。

ガルドは巨大岩の前で立ち止まり振り返っている。

「話は終わったか？」

「うん」

「もうこの遺跡に入ってから8時間ほど経ってる。アルマを待たせたままだから少し急ごう」

「もうそんなに経ってたのか、そうだね急ごう」

シシーが前方の光に手を伸ばす。が、触る直前にその手を止めた。

「アイリス」

「なに？」

「これからすごい驚くことが起きると思うよ」

「え？ どういうこと？」

「それは見てからの楽しみ」

そういつてシシーは楽しそうに光に触れた。

暗転

ギインと金属同士を打ち付けあったような音が暗闇に響いた。

「シシー!!!」

「わかつてる!」

無数の三日月が視界を埋め尽くしていた。そのうちのひとつがシシーの頭上すれすれで止まっている。ガルドが剣の一本を二つの間に滑り込ませたのだ。ガルドはそのまま剣を振りぬき三日月を弾き飛ばした。

雲に隠れ空に浮かぶ満月が微かな光を手に地上の三日月を暴く。光を受けた三日月はそのほとんどを反射した、金属特有の光沢が浮かび上がる。

三日月が弧を描き三人に襲い掛かった。

そのときには既にシシーが魔術を展開していた。シシーを中心に薄い膜のようなものがアイリスとガルド取り込むように発生する。その表面のランダムな一点から光が波紋状に広がり球の裏側で収束し消えるという現象を繰り返している。

襲い来る無数の三日月は厚さ1mmにも満たない薄い膜を前に三人を切るどころか近づくことすら出来なかった。膜に当たった瞬間甲高い金属音を響かすのみだ。

そのとき月にかかっていた雲が途切れた。今自分たちがいる状況が浮かび上がってくる。木々が生い茂る世界ではなく何もかもが腐敗した世界がそこにあった。シシーたちの進行を邪魔したのである。巨木たちは、しかし、無残にもその根元から折れている。木々たちが死んでからかなりの時間経過していたのである。完全に腐敗しきっており触れるだけでぼろぼろと崩れていく。

「……何？ こいつら」

三日月は宙に浮いていたのではなかった、地面から黒い粒子が染み出すように現れてはあるものを形作っていく。

「死神みたいだね。ガルさつきはありがとう」

「気を抜くなつて言つてただらう。たく」

粒子は流動的で形が一定しない。集まつては霧散しを繰り返しているため、輪郭などははっきりとせず、奥行きをまったく感じさせない様はまるで自立した影のようだ。だが一箇所、人間で言う顔に当たる部分だけは粒子が固定していた。生命活動を停止した人間が放置され肉が腐れおちた状態、漆黒い人間の頭骨が黒いヴェールを幾十にも纏いそこから伸びる粒子が三日月に接続しているさまは、それを死神と呼んでもまったく違和感というものを与えなかった。

「どうするのよ？」

アイリスの声は震えていた。

「ガル、たぶんこのままじゃ出口に着くまで”鉄壁”が持ちそうにない」

敵は今なおこの場にいる三人の命を刈り取るうとしては、シシーの術”鉄壁”に阻まれ弾かれる。物理的な攻撃を繰り返している以上死神の鎌はシシーたちに届くことはない。シシーが使用した術は完全に物理的攻撃に対する防御に特化したものだからだ。だが、現在特筆すべき点はそこではなくその術を発動しているのがシシーだという点と、その術を攻撃しているのが一匹や二匹ではなく数十という点だ。これだけの敵からの攻撃を凌ぎ続けていれば出口に着く前

にシシーの生命片は枯渇する。

「俺が減らす」

シシーを守る際に使った剣を鞘へ戻しかわりに体に巻かれている武器の中から違う剣を一本引き抜いた。

剣というにはあまりに細く、レイピアというには刀身の側面にも刃が付いている。こんなものでは相手の鎌を防ごうにも何の抵抗もなく折れるだけだろう。力任せに相手を切りつけるだけで折れる可能性もある。

シシーはガルが武器を持ち替えたのを確認すると、現在発動している”鉄壁”の内側に自分とアイリスのみを守るようにもうひとつ鉄壁を発動させると、外側の壁を解除した。

「ふっ」

一閃。壁が解除された直後、ガルは剣で前方を横一線になぎ払った。……何もない空間にだ。しかし、結果はすさまじいもので、前方にいた数十といた敵が霧散する。彼らの持つ武器が重力に従い地面へと落下し、しみこむように消えていった。

その隙にシシーはアイリスの手をとり走り抜ける。ガルは前方の敵をなぎ払ったあとは殿をつとめ後方から迫りくる死神たちを一振りのもとに切り捨てる。

そこで見た。切り裂かれ跡形もなく霧散した粒子がまた一箇所へと集まり髑髏を形作る。

「切ってもバラけるだけか……」

そう呟きながらもガルドは剣を振り続けている。
そうして霧散しては再構築を繰り返す敵を切り裂き続けるうちに影
が今までにない行動を始めた。

「!?!」

霧散した粒子がほかの影に吸収され、吸収した影はその姿をより確
固としたものに変え始めたのだ。

より死神に近づくように、髑髏はそのままだが三日月へと接続され
ていた粒子は骨と皮だけになった人間の腕のような形に固定され、
三日月自体もより巨大に殺傷力を高める形へと変わった。

「シシー、ペース上げる」

「何で？ つて、なにそれ？」

ガルドの声に振り返ったシシーが驚きの声があがる。声を上げては
いないがアイリスも同じように驚いている。

「バラけた奴がほかの奴に吸い込まれた」

「吸収されたのかな……!?! ガル、下！」

ガルドの足元が波立ち、禍々しく歪曲する鎌が飛び出してきた。瞬
間に飛び下がり回避する。虚しく空を切った鎌はそのままドロドロ
と溶けるように地面へ消えて行く。

「……やっかいな」

ガルドがあまりに不利な状況に愚痴る。

「これは急いだほうがいいね。アイリスいける？」

「う、うん」

「よし、いけ！」

ガードが前方を思い切り薙ぎ、行く手を塞ぐように集まってきていた敵を一度黒い霧に変える。体が再構成されるまでのわずかな時間に三人は影の群れの中を駆け抜けた。

「どっちに行けば……」

「こつち、付いて来て」

シシーが先頭に立ち二人を先導する、しんがり殿は今まで通りガードが担当し二人に挟まれる形でアイリスが走っている。

クロノパイディアの保管部屋に向かうときにシシーたちの前に立ちふさがった巨大岩や巨木といったものは今この空間には存在していない。ただ大地が平坦に続くのみだ。

大地の形は変わっていないことから、シシーの頭の中にある地図から入り口　今で言う出口へと続く道を選び進んで行く。

それからしばらくは順調だった。シシーの記憶力によって道を間違え袋小路に追い詰められるということもなく、ガードの剣によって敵を捌ききれず袋叩きに遭うということもなかった。

……ここまでは。

「はあはあ……あれが、出口？」

「うん、そつだよ」

遺跡探索を仕事としている二人にとってこの程度の距離を走り抜け

ることに苦はなかったが、アイリスは違った。息は絶え絶え、既に膝も限界だろう、がくがくと笑っていた。それでも懸命に走るアイリスを尻目にシシーはふと頭の隅をよぎった違和感の正体を突き止めようとあたり見渡す。

「……？」

正体はすぐ明らかとなった。

目に見えて敵からの攻撃が減ってきている。影からの怒涛の攻撃をガルドが未然に防いでくれているが、いかんせん数が多い。そのためガルドの防御網を突破した影がシシーたちを襲っていたのだが、その数が減少しているのだ。

「アイリスちょっとま……」

言っただけだった。今までとは比べ物にならないほど巨大な影が自分たちを殺そうと武器を振りかぶっている。立ち枯れを起こした巨木の影に溶け込むようにそれはいた。アイリスはまだ気づいていない、というよりは視界に靡しか映っていないようだ。

「アイリス！！」

「え？ きゃー！ー！」

普段のおっとりとした言動とは明らかに違う鋭い怒声にやっと意識が覚醒、今自分のおかれた状況を理解したが、遅かった。

圧倒的質量が振り下ろされる。シシーの魔術”鉄壁”に阻まれてなおその質量はアイリスの命を絶とうと迫った。拮抗は一瞬、ガラス

が割れるような音を立てて”鉄壁”が破られる。だが、攻撃のベクトルをずらされた影の集合体はアイリスを一刀のうちに切り捨てることまかり得ず、その武器はアイリスの右側面すれすれを通過し大地を穿^{うが}つた。

砕かれた大地が粉塵とともに舞い上がり二人に襲い掛かる。それを至近距離で受けたアイリスの体が地面から離れ宙を舞う。重力にとらわれた少女の向かう先は奈落。

意識がはつきりせずなすすべもなく落ちて行く少女。その手をとったのは神でも仏でもない、シシーだった。アイリスの体が左右にふれる。

「……ししー？」

「待つてる、すぐ助ける」

シシーの頭から流れた血が重力に従い滴り落ちアイリスの顔を赤く染めていく。懸命にアイリスを引き上げようとするシシーの鬼気迫る表情。そのなかに影に襲われたときにすら見せなかつた恐怖の感情が色濃く映っているのをアイリスは見た。

そして、シシーの背後に二撃目を加えようとする影を……

目を大きく見開く。

「シシー!!」

シシーの名前を再度叫ぶアイリス。驚愕、焦燥、恐怖の感情をたぶんに含んだその声がシシーと自分に降りかかっている状況の深刻さを物語っている。

敵が武器を振り下ろせば、いや、重力に任せて落とすだけでシシーは斬殺され、

アイリスは奈落に沈む。

だがしかし、敵が振りかぶった腕を力任せに振り下ろすことは出来なかった。超重量の武器が影の腕ごと地面に落ちる。

その重さに見合う腹に響くような鈍重な音がアイリスの鼓膜を揺らした。

アイリスの細い手首を武を嗜むもの特有のゴツゴツとした手がつかみ引つ張りあげる。

「大丈夫か? と聞きたいところだが、今はこいつ連れて出口へ。いけるか?」

アイリスは自分の体を確認する。体のあちこちに痛々しいあざが出来ているが幸い骨が折れているわけでもなく、走ることに問題はなさそうだ。むしろ頭から血を流しているシシーのほうがひどい状況

ではないかと思える。生命片^{マナ}が枯渇寸前なのか足元がおぼつかない。確認を終えたアイリスが頷く。

「よし、行け！」

シシーの手をとり走り出すアイリス。それを確認したガルドはこの状況を作った元凶と対峙する。先ほどよりもさらに巨大に、より禍々しく姿を変えた敵を見てため息ひとつ。

「お前らの敗因は量から質に方針を変えたことだな」

己の持つ武器を細剣から自分の身長ほどもある大剣へと持ち替えたガルドは一人呟く。その言葉に触発されたのかはたまた偶然なのか、失った武器を腕ごと再生した敵が武器をガルドに振り下ろす。

視認できる死が敵と定めたものを喰らおうとガルドに襲い掛かる。

「莫迦の一つ覚えじゃあるまいに」

体の軸すべてを使つてのなぎ払いを自分に向かってくる鎌の側面に当てる。シシーの持つ”鉄壁”を軽く粉碎するその攻撃をガルドは一息のうちに払い飛ばして見せた。

「質に関してなら」

しかし、ガルドの攻撃は続く。

大剣を振りぬいた勢いを殺さずその場で回転。その切っ先が敵に触れる寸前、体のばねを一気に開放する。

「お前に負けることなんてありえねえんだよ!!」

筋力に遠心力をのせた渾身の一撃が敵を木っ端微塵に破砕した。

出口の前に二体の影がいる。どちらも他の影を一体吸収したときの姿だ。

今シシーたちを攻撃している敵は計二体。どちらもまだ影を吸収していない初期の姿のため、その攻撃は吸収体に比べればあまりに軽い。だが、生命片マナが枯渇寸前のシシーはその二体の攻撃を防ぐだけで精一杯だ。とても後二体敵を追加することなどできはしない。

不幸にも敵は出口を守っているだけのようで二人を攻撃してこないが、近づけば死の刃が二人に襲い掛かってくるのは目に見えて明らかだ。

「どっしよっ……」

そんな状況に途方にくれるアイリスは別段普通の反応だろう。むしろこの状況におかれて先ほどの鬼気迫る表情から打って変わり、口元に軽く笑みを浮かべているシシーのほうが異常だ。

「ね、アイリス」

「なに？」

口調も明るくアイリスに話しかける。そんなシシーを訝しげながらもこの状況を打開する策を期待する。

「ぼくが合図したらペース上げて出口まで走ってね」

そんなことを言う。

「え、でもそれじゃあ」

「だいじょーぶ、アイリスには指一本触れさせないから」

シシーの魔力が保たないんじゃないかという質問は、間に割り込んだシシーの言葉に封殺された。アイリスはそのときになってシシーが笑っているわけではないことに気づく。

顔の表情筋こそ笑みを作っているが、その目はまったく笑っていない。射殺するような視線が出口前にたむろす影を貫いていた。

”鉄壁”が不安定に揺らぐ、それでもまだ敵の攻撃は二人に届いていない。シシーは襲ってくる刃の場所を生命片を集中させ、攻撃を最小限の消費で防ぐ。

そこまで時間は経ってないだろう。二人の背後から鼓膜が破れるのではないかと思えるほど金属音が駆け抜ける。

「行って！」

タイミングを合わせたように叫ぶシシーに、アイリスは弾かれるように走り出す。出口まで100mほどだろうか、出口を守るように出口前を陣取りゆらゆらと揺れていた二体の影は手の内に鎌を形作っていく。

自ら地獄の門へ突っ込んでいつているかのような錯覚に陥っているアイリスは、それでも足は止めない。それはシシーの言葉を信じているのもあるが、”ここまで来たら走るしかないじゃない”といった投げやりな気持ちも多少、いや、多分に含まれているだろう。

武器が溶けるように大地に染み込んでゆく。おそらくガルドを攻撃したときのように遠距離から切りかかってくるであろうことは簡単に想像がつく。

アイリスは足を止めない。打撲の跡から神経を通って送られてくる痛みに止まりそうになる足を叱咤し走るといふ行動を続ける。

敵の武器が完全に地面へと溶け込む。次に視界に現れたときはアイリスの足元かそれともシシーのほうか。

そんなことをアイリスが考えていたときだった。

「^{炎よ}Flloga」

あまりに平坦で感情が微塵に感じられない言葉の羅列がすくっと染み込むようにあたりに広がる。

直後、爆発

爆心は二体の敵の間、爆発に伴い発生した爆風に影たちは体を保つことかなわず粉々に霧散した。

崩れた防壁網を突き抜けアイリスは速度を落とさぬまま出口に突っ込んだ。

「抜けた」

肌を突き刺すような殺気が自分から引いて行くのを感じとたんに体が重くなる。一度大きく息を吸う。体中に酸素をめぐるせ視界がホワイトアウトしそうになるのをこらえ、後ろを振り返る。

その瞳に映るのは、生命片が完全に抜け地面に倒れ伏す^{マナ}シシーと鎌を振りかぶる死神だった。

アイリスの悲鳴が空間を満たす。アイリスから見るとシシーは何の反応もなくうつ伏せのままのピクリとも動かないため、声が届いているのか分からない。無我夢中にシシーの元にかけてゆく衝動に駆られたが、一度気が抜けた足は動くことを酷く拒む。アイリスはその場に倒れこんだ。足を一睨みし、その場で叫ぶことしかできなかった。

そんなアイリスの声を聞き、シシーは笑っていた。今度は心からの笑みだ。

死神の持つ武器が風を切る。

「がる〜……」

「なんだ？」

消え入りそうに声に応えたのはガルドだった。今二人の近くに存在するのは不定形に漂う黒い粒子のみ。

「ナイスタイミング」

「……………ああ」

ガルドは視界の端に粒子が集まってきているのを確認する。シシーを脇に抱えこむと地を蹴り駆ける。アイリスとは比べ物にならない速度でだ。出口までの距離を一瞬で縮める。アイリスのかけた時間の十分の一も掛けず走り抜けた。

命の危険にさらされながらの逃走劇に加え、回復しきらない状態での長距離階段のぼりによってアイリスは完全にダウンした。シシーはというと、途中までガルドに担がれていたが意識が完全に覚醒した後は自分の足で階段を上っている。今はその空いたガルドの肩をアイリスが占領している。羞恥とプライドに始めこそ抵抗して階段を上っていたが、五分もしないうちにおとなしくガルドの肩にすっぽりと納まることとなった。

辟易するほどの距離を上ってきた三人、行きと同じくどこか神がかったホールにアイリスは肩の上で感嘆の声を漏らした。

ガルドに降ろしてもらい、鏡を掲げる女神像へと近づいて行くアイリス。靴が地面と接するたびに埃が舞う。王族として育てられているならばこんな場所は嫌悪する対象でしかなさそうだが、アイリスは気にしていない。女神と壁に描かれた紋章を交互に見つめていた。

「ここっていつ造られたかわかってるの？」

「8000年くらい前の建物だよ」

アイリスの質問にシシーが答える。

「……………」

お世辞にも綺麗とはいえない建物だが、口から出てくるのはなんとも抽象的な感嘆の声のみ。遺跡の魔力がアイリスの頭にこの遺跡を卑下する言葉は浮かんでこなかった。

「アイリス、行くところ？」
「……そうね」

名残を惜しむように女神の像と壁の紋章を見つめ、記憶に焼き付けたアイリスはガルドたちの元に歩いていった。

「ガ・ル・ド・様……!!」

晴天の下、桃色に輝く髪を振り乱しながらガルドに突撃してくる美女　アルマは考えた。”　仕事上がりの疲れたガルド様なら出会いがしらの不意打ちで抱きつけるんじゃないかしら？　ふふふ”と。

そして、有思敢行一（考えたことを”他人の意見なぞ知らん、わたしはやる！”の精神で実行すること）。

アルマの伸ばした腕はガルドのわき腹を挟み込むようにすすむ。ガルドが体を軽くひねり、と同時に手でアルマの腕を軽くはたき軌道をずらす。目標を失ったアルマはそれでもなおガルドを掴もうと腕を伸ばす。ガルドが分かかってましたよとばかりにアルマのぎりぎり届かない位置に移動する。

「ぐふ」

今の攻防、わずか一秒。軍配はガルドに上がった。敗者は地面に体を打ちつけくぐもった声を漏らすのみ。

そのやり取りをシシーは笑いながら、アイリスは心配そうに見つめていた。

「ひどいです、ガルド様。おあずけなんて。わたくしもう我慢できません、貴方様成分を補給出来ないのならわたくしが生きている理由などないのです。どうかわたくしを貴方の腕の中であたためてくださいまし」

「却下」

「あん、でも何かしらこの気持ち。嫌なのに、嫌なはずなのにい」
息を荒げるアルマ。熱のこもったその吐息は常人の男に対して理性の檻を地形干涉級の大魔術をぶつ放すのと同義である。（先の会話を聞いていた人を除く）

このやり取りをシシーは笑いながら、アイリスは汚物でも見るように見つめていた。

「この人がアルマさん？」

その質問はアイリスがシシーに向けたものだったが、耳聴くそれを聞きつけたアルマがアイリスのほうに振り向く。アイリスが一步後ずさる。

しばらくの空白の後立ち上がり、服についた土を手で払い落とし体ごとアイリスへと向き直る。

「ええ、アルマ・カンパネルダと申します」

「いまさらおせーよ」

物腰柔らかく微笑むアルマにガルドが一撃。

「ところで、貴方はどちら様？」

しれっと聞かなかったことにしたアルマがアイリスに聞き返す。その態度はあくまで淑女のもの。

「アイリス・フランロッド・エルンバーグです。あの、無理に態度を変えなくてもよろしいですよ」

顔に笑顔を貼り付けて、剥がれ落ちそうになるのを堪えながらの自己紹介。

「といわれましても、あれはガルド様だからですよ」

「心の底からやめてくれ」

「やん、ほんとはうれしくせに」

えい、と肘でガルドのわき腹を小突こうとするアルマとそれすら予想済みとばかりに華麗にかわすガルド。そんな様子に自分のかぶった仮面が砕けそうになるのを感じ、アイリスは視線を二人からはずした。その直後。

「さて、それでは本題に入らせていただきますね」

目の前にいた女性がその女性の形をしたまったく違う生き物と入れ替わった。そう錯覚させるほどの変わりようだった。声自体はさっきまでのガルドのやり取りで聞いていたはずだが、今自分にかけられた言葉にアイリスは背筋が冷えた。

すぐさま、視線を戻す。アルマの細目に吸い込まれるように視線が移動し、固定された。

自分という存在を成り立たせている根幹を根こそぎ引っこ抜かれじ

るじろと見られているような、そんな感覚に陥っているアイリス。

「貴方はなぜ此処に居るのでしょうか？ 遺跡なんてものに縁のある方には見えないのですが」

体感温度が急激に下がる。首を絞められている錯覚すらおきている。声を出そうにも声帯が仕事を放棄してしまったかのようにかすれた声しか出てこない。そんなアイリスに助け舟。

「それは俺が説明する。アイリスは木陰で涼むなりしてくれ。まだ疲れが抜けてないだろう？」

アルマの注意がガルドに向き、アイリスから視線が外れた。

「あ、ありがとうございます。そうさせてもらうわ」

重圧から解放されたアイリスは、微かに機能するプライドを総動員して上辺を取り繕う。王族として、さらに言うならば王女としてみっともない姿を見せてはいけない。小さい時からの教育が実を結んだ瞬間だった。

「シシー様もどうぞ。あ、貴方の魔道二輪も試運転段階に入りました。あちらに霄劔せうけんと並んで置いてますので」

またも豹変したアルマ。さっきまでの態度がうそのように優しげな秀困気を醸し出している。

「え！！ ほんとに？」

「ええ、銘を付けてあげて下さいな。魔道式計算機コンピュータは貴方の生命片マナで起動できる状態にしておりますので」

「うん！ わかった」

言い終わる前からシシーは魔道二輪に引き寄せられていった。その後ろにアイリスが続く。

「ねえ」

足取り軽く、鼻歌交じりに進むシシーの背中に声が掛けられる。そこで初めてシシーは後ろからアイリスがついてきていたことに気づく。

「うん？ なに、アイリス？」

「あの。アルマさんって……」

少し逡巡し意を決して話し始めたものの、尻すぼみになっていく。

「アルマはね、仕事とか立場のせいとそこにいる動機や背景が不透明な人にはあんなふうな態度になっちゃうんだよね。だいじょぶ、ガルドがちゃんと説明してくれるから。次からは観察されることもないよ」

奇跡的に、本当に奇跡的に空気を呼んだシシーの言葉に少しからだが軽くなったアイリスだった。

「アルマにはあんな態度をとらなくちゃいけない理由があったってことをわかってあげてね」

「……うん、わかった」

遺跡を壁沿いに進む二人。左手にそびえる壁は同じ装飾が一定間隔で配置されて長く見ているには面白みがない。右手には広葉樹林が

広がり、生き物の生活の音が聞こえてくる。

「シシー、魔道二輪って何？」

「魔道二輪ってのはね、簡単に言えば空を飛ぶ機械のこと。あ！」

そこまで時間もかからず二人は目的となる場所へ到着した。遺跡の脇をしばらく進んだところで、今まで続いていた遺跡の壁が途切れただ。二つの部屋をつなぐ通路に当たる部分のようで、上から見てコの字にへこんでいる。空間の中心、三辺を壁に囲まれてそれらはあった。

反射光に金属光沢を含む二つの魔道二輪。一つは壁に阻まれてできた影に同化するように佇む刀身を連想させる機体。霄剣だ。そして、同じように影の中に佇みながら影自体が意思を持ってその身を侵すのをためらっているかのような純白。滑らかに流れるような曲線で構成された機体はやわらかく、儂げ。対になるテーマを極限まで追求したデザイン。その造形美は万人の心を激しく刺激する

「これが魔道二輪……私、こっちに来てから驚いてばかりね」

アイリスも例に漏れず二つの存在に圧倒されていた。そんな自分に気づきアイリスは小さく呟く。

その呟きはシシーに届く前に森から吹いてくる一陣の風にさらわれた。いや、たとえ届いていたとしてもシシーは気づかなかっただろう。己の周りに自分フィールドを展開、外から来る情報をすべてシャットアウトした世界で、シシーは白い機体と戯れている。普通に話しかけたとしても気づくことはないだろう。だが、このフィールドはある話題においてのみ、シャットアウトするところかむしる助

長する。

「それ、名前はどつするの?」

「あ、うん。そうだね、名前を登録しないと」

魔道二輪の核となる複合術式の密集した制御装置の外殻にはケーブルが接続されており、それをたどると遺跡の壁の出っ張りに置かれた魔道式計算機へと繋がっていることが分かる。

「これは?」

「これはコンピュータって言って、なんか機械の制御をしたり計算をしたりするものらしいよ」

そう言うと、シシーはコンピュータを手に取り多方面から眺め始めた。

「ふーん……何やってるの?」

「スイッチを探してるの〜っと、あつた」

コンピュータを元の場所に戻し、側面にあるスイッチに軽く触れる。暗い画面には二人の少年少女が覗き込んでいる様子が映りこんでいる。と、ふいに画面が白く発光し、アイリスがびくりと体を震わせた。

白い画面はすぐに晴天の空のような青色に変わり、それを背景として中央を挟んで左右で分かれるように雷劔と白い機体の画像と情報が現れる。次に画面中央が長方形に白く区切られ文字が表示される。

生命片がシシー・ノーレッジと一致しました。 MB - 02 簡

易設定画面に移動します

一瞬のタイムラグの後、画面右側に表示されていた白い機体が画面左上へと移動する。霄剣に関する画像と情報が消え、開いたスペースを埋めるようにより専門的な言葉が並ぶ。そして、またも画面中央が区切られる。

MB-02 の名称を変更してください。

言葉の後ろ、空白をいくつか空けて薄い青色の枠線で仕切られた空欄がある。中ではバーが点滅している。

シシーがキーボードをたたき、頭に浮かぶ言葉を目に見える形に変換する。

名称を MB-02 から 光天 へと変更しました。起動ボイスコード設定へと移ります

「うづてん？」

横から覗き込んでいたアイリスが軽く首をかしく。

「ひかるかみって読んで」

「ひかるかみ、ね」

ボイスコードを設定します。ボイスコードを入力し、マイクボタンを押しながらコードを発声して下さい。

表示されたのはひとつの空欄とマイクのイラストが描かれたボタン。シシーは空欄に四つの文字を入力し、カーソルでマイクボタンをクリックする。

「ひかるかみ光天起動」

しばらくすると、新しく文字が表示された。

ボイスコードを登録完了。簡易設定の全工程を終了しました。トップに戻ります

画面がコンピュータを起動した直後の初期画面へ戻った。シシーは側面のスイッチに触れ電源を切る。

「終わり？」

「うん、これで光天を動かせるようになったはず」

光天の核につながっているケーブルを引き抜き、アイリスが見つめる中再度ボイスコードを言う。

「光天起動」

核を保護する外殻に蒼く発光する線がいくつも浮かび上がる。それ

はあまりにも細かく書き込まれ目に見る分には線にしか見えないような極小の文字列。何百ページもある魔道書数冊分の情報を直径10cmほどの球体に詰め込むための技術の集大成だった。

シシーとアイリスにはその凄さを理解することは出来なかったが、かわりにもっとはつきりと凄さが伝わる現象が起こっている。

「すごい！ 何で浮いてるの!？」

その現象はアイリスの心を執拗に刺激した。瞳から星を飛ばしている。

「遺跡でも言ったとおり、いくつかの魔術を組み合わせて擬似的に飛行できるようにしたんだって。詳しいことはアルマに聞かないと分からないけど」

「アルマさんって凄い人だったんだ」

「魔道二輪もあの魔道式計算機も、もっと言えば機械に魔術を施す技術もアルマが確立したんだよ」

「ふえ〜」

あまりにスケールのでかい凄さに、気の抜ける声しか出ないアイリスだった。

「いよし」

シシーがフットレストと呼ばれる、魔道二輪への乗車を補助する足場に足を掛け座席にまたがる。

「うごかせるの?」

「魔道二輪の試作機を存分に乗り回したからね〜。はい」

「？」

シシーがアイリスに手を伸ばしている。

「ほら、乗って」

「……二人乗りは危ないんじゃない？」

未知への恐怖と好奇心を天秤にかけると、わずかに恐怖に傾いているアイリス。

「だいじょ〜ぶ。アルマの作ったものだからね、馬車なんかよりよっぽど安全だと思うよ〜。……たとえ何かにぶつかっても被害は向こうが負うだけだろうし」

「それはそれで問題でしょ」

「気にしない気にしない」

「……そう、わかったわ」

シシーの手を借りて後部座席に座る。

「それじゃ、くれぐれも事故は起こさないでね。怪我はしないのかもしれないけどやっぱり怖いから」

そういいながらもアイリスは気分がどんどん高揚していくのを感じていた。

「了解〜」

アクセルを踏みハンドルを手前に引く。だんだんと視線が高くなっていく。左右の壁が視界を通り過ぎ、目の前に別世界が広がった。

広葉樹林を大地に置き去りにし、重力の鎖を引きちぎりし進む。蒼穹が視界いっぱい広がる。雲ひとつない空を翔る二人と一機。

宇宙と大地の境界に孤立した二人は速度を落としてゆっくりと進むひかるかみ光天から眼下に広がる遺跡や森、さらにその周りを囲むように連なる山々。はてはその山々を越えた地平線までを一望していた。

「こんな風景、元の世界だと絶対に見れなかった。光天も私がいつも乗っていた馬車よりもずっと乗りやすいし、たしかにこれなら大丈夫そう」

「そう？　じゃあ、ペース上げるよ」

「え！　きゃ~~~~~!!!!!!」

大空に少女の悲鳴が響き渡った。

森の中、魔道二輪を駐車いた場所から少し出たところにガルドとアルマは居た。

ガルドは右手を額に当てていて、アルマは笑みを湛えているような細目で空を見つめている。

「シシーの奴……」

「凄い悲鳴ね。あら、綺麗な宙返り」

「……はあ、行くか」

踵を返し宵剣へと足を向ける。アルマはガルドが去った後もしばら

く空漠と広がる青空を見上げていた。

魔道二輪の整備に使う細々とした道具を工具箱へと収容し、霄剣に接続されていたケーブルをまいている最中にアルマは戻ってきた。

「ケーブルはコンピュータと同じケースでいいんだっけか？ ……
どうした？」

返事をしないアルマを不審に思い顔を上げると、彼女は軽く首を傾け左人差し指を唇に当て、右手で空を示していた。指の先をたどり空を見上げてみそこには空があるだけ。だが、作業の手を止めあたりが静かになったことで、風が運んでくる微かな音を拾うことが出来た。ガルドは気の抜けた、或いは疲れたような笑みを浮かべる。

「あいつもシシーの同類だとは思っていたが……」

アルマとガルドは互いの顔を見合わせ苦笑を浮かべた。

空からはアイリスの笑い声が聞こえていた。

第一の魔道書が発見された際、その不可思議さゆえに万国が手を出すのを戸惑う中、逸早く魔道書の発掘に取り掛かった国があった。

小国マドニア

解析され、その書物の有効性

特に戦争における決定力が証明さ

れたときには、既に他国の追隨を許さぬほどの魔道書を抱え込む小さな大国へと成り上がっていた。

そこからのマドニアの発展は凄まじかった。魔道書を片手に近隣の小国を吸収し急速に肥大化。その当時大国であったモルデーン王国に宣戦布告し、これに勝利する。

この戦争における総死者は敵味方含め九十八人。これはモルデーンの王族、そしてモルデーン王国を支える忠臣の総数に等しい。つまり、マドニアはもとよりモルデーンにおいても軍官及び数人の将を除くほぼすべての兵が害を被ることなく、大国モルデーンは墮ちたのだ。

異様だった。

摩り替わるように政治にかかわる人間がマドニアの人間と入れ替わり、モルデーンはその名を変えた。その国は現在こう呼ばれている。

魔術大国マドニア と。

マドニア城 術務大臣室

城の中にはもうひとつ本で築かれた城がある。術務大臣室。高級感あふれる本棚が壁一面に整然と立ち並び、そこにはマドニアがまだ小国と呼ばれていたときから蒐集し続けた魔道書が整頓され陳列されている。仮定としてこの城に敵が入り込んだ際、真っ先に守られるのは王族、そしてこの術務大臣室だ。

この本の城に悠然と君臨する術務大臣、マルタ・サブナハは扉をたく音にペンを持つ手を止めた。

「アルマか」

「ええ、入ってもよろしいかしら？」

扉の向こうに居る人物が

マルタが入室を促すと、静かに扉が開きアルマが入ってきた。

「あいも変わらずの白衣姿だなお前は。もう少し華のあるものを着たらどうだ」

「あら、貴方様はわたくしに華をお求めで？ 事前に言ってくださいれば貴方様の趣味に合うものを見繕うことも出来ましたのに。この服装では魅力がございませんか？」

腕を組み、男性の欲望の対象であり女性からも羨望と嫉妬を集めるそれをことさらに強調するアルマ。

マルタはそんな彼女の行動に意を介すことなく手元に積まれた書類の中から一枚の紙を手に取り引き寄せる。

「気にしなくて良い、じじいの戯言だ」

風がカーテンを持ち上げる。日が傾き暖色系の色を強めた光がその隙間から差し込み、断続的にだが部屋に陽だまりを作る。

「じじいというには些か若すぎる気もいたしますが」

「いやいや、心は皺くちやヨボヨボのじじいだ。こんな仕事についてたら嫌でもこうなる」

肩を窄めてため息を吐くマルタ。

くつくつと控えめの笑い声がアルマの口から零れる。そのまま窓際へと移動し風に揺れるカーテンを開け放った。

「こんなに眺めが良いのですから、カーテンで隠しておくなんて無粋ではありません?」

視界をさえぎる物がなくなった窓には夕焼け空を背景に統一感のある白の町並みが日に照らされてオレンジ色に輝いている。城下では人々が帰路につき、商人が彼らに最後の呼びかけをして商戦を繰り広げていた。

「本の虫には直射日光はきついものがあるのでは。さて」

アルマが窓から目を放し、マルタのほうへ向き直る。

「これ以上じじいの話し相手を勤めさせるのは酷というものだからな。報告をお願いできるかな? ヴィネルマ図書館副館長、アルマ・カンパネルダ」

「諒解しました」

アルマは肩にかかるポーチから紙の束を取り出した。それを机の上に広げる。

クロノパイディア遺跡についての詳細が書き綴られたその資料には、シシーの持つ魔道書に浮かび上がった情報を分かりやすくまとめたものや新しく発見されたエリアの特徴や正確な地図。そして、敵として襲い掛かってきた影のスケッチや対処法などさまざまな情報がまとめられている。ちなみに、地図やスケッチはシシー作である。

「シシー・ノーレッジ及びガルド・クォーツが既存の情報に書かれていない未知のルートを発見いたしました」

「流石だな、あいつらは」

「正式名称クロノ・パイディア Kronopaidia。遺跡最奥に保管されていた魔術書も今までの例に漏れず同名でしょう」

マルタの眉がつりあがった。

「魔術書は既に消失して^{ロスト}おりました」

「……そうか」

「クロノ・パイディアは古代ゲルシア語で”大地の落とし子”を意味しており、その解釈は多義にわたります。名から術効を推察するのは不可能でした。ですが、術級に関しては間違いなく地形干涉級に届くかと」

「それは……惜しいな。足どりは追えそうか？」

「無理がありますね。戦争に使われた記録はないですし、裏ルートでも煙さえ立っていません。どこかのだれかさんが秘匿している可能性が高いですがそうなるとお金をかけるだけ無駄でしょうね」

「むう」

腕を組んだ状態でいすの背もたれに体を預け、なにやら思案顔でうめくマルタ。その顔はふてくされた子供のようにも見える。

「ほしいのう……」

言葉こそじじいのそれだが、言動はまるっきり子供のようだ。欲しいおもちゃが目の前にあるのに見向きもせず通り過ぎてしまった母の後ろをついていく子供の姿に一致していた。

「貴方様は心のほうも十分にお若い気がするのですが」

副音声”実は貴方、大人の形をした子供でしょう?”。

「いやはや、コレクター魂はいつまでたっても衰える気配がしないな」

そういつて、マルタは豪快に笑い出した。

「……………続けますね」

その後しばらくはアルマの報告にマルタが質問する形で情報の提供が続けられていた。

「以上ですね。より詳しい説明はそちらの書類で確認してください」

日がすっかり落ちこみ、しかし寝るには少し早い時間帯。黒く切り取られたような町並みの所々を街灯や家の窓からあふれる光が淡いオレンジ色に染めている。家の中では夕飯を済ませた家族が一日の疲れを癒しているのだろう。

それと比べて、術務大臣室には発光術式の刻まれたアンティークのような置き灯がマルタの手前を照らしているだけで、部屋は全体に薄暗い。だが、それはただくらいというわけではなく、いわゆるムーディーな店の雰囲気といったところだ。ピアノをBGMに男が女に甘い言葉でもささやいていれば、それこそそういう店にしか見えない。

しかし実際のところ、男はペンを持ち紙に何かを書き綴っており、女は男の作業机の前で静かに佇んでいるだけだ。

「よし」

マルタがペンを置き、彼の字で書かれた紙を二枚アルマに渡す。それを受け取ったアルマは書かれていた内容を一瞥し、ポーチにしまった。

「一枚はお前なので、もう一枚はあいつらにだ。渡すとき感謝の旨を伝えといてくれるか？」

「ええ、お伝えしておきます」

「今日は手間を取らせてすまなかったな。玄関に衛兵を用意してお

「う」

「お気遣いありがとうございます。それでは失礼いたします」

頭を軽く下げてお辞儀をし、そのまま扉に向かう。手を伸ばしドアノブを掴もうとするが、その前に後ろから聞こえてきた声に中断させられた。

「おっと。衛兵で思い出したのだが、もうひとつ質問して良いかな？」

「ええ、どうぞ」

ノブに向かっていた手を引っ込めマルタに向き直る。アルマが聞く姿勢を整えるのを待ってからマルタは口を開いた。

「お前は天女は存在すると思うか？」

「天女……ですか？」

今までの会話とはまったく関係のない質問に、アルマは答えを窮する。

「いや、なに。今日の早朝、巡回中の兵が城の立つこの山の裏側で桃と純白の天衣を纏った天女が空を舞っていたのを見たといっている」

「……その方、少し休暇を取ったほうがよろしいのではないですか？」

「うむ、明日から三日間家族と旅行に行くそうだ」

「それはいい考えですね。やっぱり疲れを癒すには家族が一番でしょう。……それにしても天女ですか。もしかすると居るかもしれないね」

「お前もそう思うか！ いや、ワシも天女は存在するんじゃないか」

と思っていたな。うゝむ……会いたいのう」

アルマの返答にマルタからは大人びた雰囲気が消え、まとも子供のような明るさが灯った。

「そのためには外に出なければいけませんね」

「むっ」

そして、子供のように落ち込む。

「自分から動かなければ会うことなんて出来ませんよ」

「……そうだな。よし。呼び止めて済まなかった」

「いえいえ、では今度こそ失礼します」

今度は止められることもなく退室するアルマだった。

部屋に一人残る男は、しばらくの間アルマの足音が遠ざかっていくのをいすの背に寄りかかりながら聞いていたが、その音が聞こえなくなると机の上に広がった資料を読み返し始めた。

記憶にあるアルマの報告との矛盾はないか、報告書に含まれるであろう嘘を探して。

百人単位で入れるような大浴場に一人ぼつんと浸かって孤独感を味わったアイリスは、体がさめないうちに用意してもらった衣服を身に纏った。髪は使い方を教えてもらった乾燥機なるもので乾かし

てある。

浴場から出たアイリスは、その足でシシーたちが居るリビングへと向かった。

扉の開く音に、シシーは本を読む手を止めて顔を上げる。この時シシーは床に敷かれた絨毯に寝そべり頬杖をついており、ガルドはというとソファアの上で胡坐をかきながら武器の手入れをしていた。

「あ！ お風呂どうだった？ 広がったでしょ〜」

シシーが体の向きを少し変えると、ガルドにこれでもかと言うほど洗われた緑銀の髪がさらさらと流れる。パジャマが男用女用どっちつかずのデザインのためか、その様子はどこか身分の高いところのお嬢様がくつろいでいる様には見えるが、男が寝そべっているようには見えない。

まあ、アイリスに話しかけた後いきなり床を転がり始めるまではの話だが。

「なんというか、私がお城に居たときは侍女の子がお風呂の世話までしてくれちゃって、一人で入りたいとは思ってたんだけど、実際独りで入ってみると周りが静か過ぎて怖かった」

「今はまだ皆仕事をしてる最中だからな。次入るときはもう少し遅い」
「ならばくが一緒に入ってあげるよ」

ガルドの言葉をかき消すほどの轟音を立てて扉が開かれる。部屋に居た三人は脊髄反射にのっつって音源に顔を向けることになった。

声の主は翼をモチーフに機械的なデザインを追及したような銀色

の髪飾りが特徴的なショートヘアの女の子。髪の色は茶色がかった黒色の髪だ。

髪飾りで耳にかかる髪をまとめていて、その髪が頭の左右からぴよこんと飛び出ている。

耳を出すヘアスタイルがパツチリとした目と相まって、その姿は活発なイメージを彷彿とさせる。

そして、女の子の後ろにもう一人。こちらは長身だが肉付きのないひよろひよろとした体つきをしている。髪も銀髪というよりは白髪に近くすんだ色をしていて、とても頼りなく見える。

髪飾りの少女は、巨大な音にまだ呆然としているアイリスのもとに一直線に進むと、そのままアイリスの手をとり大きく振り出した。

「きみがアイリスだよな？　ぼくはツバサ・サブナハ。ここでスパイヤってるよ。よろしくね」

「よ、よろしくお願いしま……す？」

「あ、ぼくのじいちゃん城のえらい人でね、この図書館の情報を報告するように言われてるんだ」

「？、？？」

いきなり現れたと思ったら、状況を確認する時間もくれずに怒涛の自己紹介。そして自分はスパイ発言。

アイリスの頭は今こんがらがっている。

「こらこらツバサ君、彼女が困っているじゃないか。それと、そういうことは口に出しちゃだめだと思うよ」

「いや、口に出さなくてもだめだろ」

ひよろい男がツバサをたしなめようと口を開くが、その口から出

たあまりに頼珍漢とんちんかんな言葉にガルドは思わずといった感じに突っ込んだ。

「ああ、ほんとだ。ごめんね、アイちゃん」

「アイちゃん!？」

「うん? どうしたんだい? アイ君」

「アイ君!？」

そしてスルーされるガルド。床ではシシーが転げまわっている。とりあえず一発蹴って黙らせたガルドは武器の手入れに戻った。

「えっと、私はアイリス・フランロッド・エルンバーグと言います」

多少落ち着きを取り戻したアイリスが遅い自己紹介をする。

「ああ、いいいいいよ。そんなかしこまらなくて。そういえば自分のこと教えてなかったよね。自分はブック・スパイン。一応この図書館の館長をやってるよ」

「ついでに、副館長をアルマだよ」

頭の中で”ブック館長”と”アルマ副館長”を比べてみて、”アルマさんのほうが館長みたいだなあ”などと考えてしまったアイリスはあわててその考えを彼方に追いやった。

視線を上げるとニヤニヤといたずらっ子の笑みを浮かべたツバサと目が合う。

「いま、アルマのほうが館長っぽいとか考えてたでしょう?」

「え、あ、いや、そんなことは……」

まさに直球ど真ん中。アイリスの慌て様が言葉や行動に表れる。

「まあねー、館長つて軽く押すだけで倒れそうだし、病院とかにいそうだよ。もちろん医者じゃなくて患者的な意味で。だからアイちゃんがそう思うのもおかしくない！」

「そうだね。自分もそう思うよ。」

誰が聞いてもマイナスの意味にしか聞こえないツバサの言葉を、その言葉を向けられた本人であるブックが肯定する。

「お前はもう少し威厳を持て！ どこに部下にボロクソ言われてうん、そうだね」なんて賛同する上司が居る！！」

「ツバサ君ツバサ君、ガルド君がイラついているようだよ」

「そうだね、ブックくん。これは育毛剤を用意しとくべきかな？」

顔を寄せ手で口元を隠しながら話し込む二人。ガルドにはつきりと聞こえるほどの声でささやくというわざとらしさをおくびにありありと出しまくるツバサと、まったくもって他人事のように話すブック。

そんな様子を見せ付けられたガルドは、怒りを通り越して呆れと諦めのこもったため息をこぼすだけだった。

「それにしても、アイ君は王族には見えないね」

しばらく談笑を続けていた五人。今まで話していた話題が終わったため、ブックが新たな話題を投下した。

「そうでしょうか？」

ブックの言葉は良くも悪くも取れるものでアイリスは曖昧な返答を返すしかなかった。

「もちろん良い意味だからね。アイ君の世界はどうかかわからないけど、こつちの世界じゃ初対面であんな呼び方したら罰を受けるし、下手したら殺されたりするかもしれない。それに比べて、アイ君は驚きこそすれ怒ることはなかった。まあこの国の人たちは総じて変な人ばかりだからそんなこと気にする人居ないけどね」

魔術に巻き込まれてやってきた世界での出来事を思い返し、浮かんでくる人たちのことを考えて、アイリスが納得してしまったのは不可抗力だろう。

それほどまでに個性的でキャラの濃い人たちにしか会ってないのだから。

ついでに、このときアイリスの中で乾燥機の使い方の方を教えてくれた女性は例外として扱われている。

「アイリス……なんか誤解してるようだから言うておくが、俺を含め国の人たちは普通だからな。此処が異常なんだからな」

体中に大量の武器を巻く人が普通なわけないという思いはアイリスの中で秘密裏に処理された。

「体中に武器巻いてる人が普通なわけないと思うよ？」

「そうだねー。師匠も十分変だよ。アイちゃんもそう思ってるっばいし」

「そんなことはないですよ」

先ほどのあわてぶりを見せることはなかったが、平坦な言葉の連続がアイリスのうそをありありと語っていた。

「ハリネズミみたいな格好のどこが普通なんですか？ ガルドさんの武器糞虫ー」

「そんなこと思ってないよー!!」

アイリスに似ているが若干高い波長の声がアイリスの後ろ、ガルドの死角となる場所から聞こえてきた。

その声色と内容にアイリスは自分が言ってるわけではないと分かりきっていなながらも、否定の言葉を叫ばずにはいられなかった。

「うんうん、やっぱアイちゃんは堅苦しくしてるより素の方がいいよ。これから一緒に生活するんだしさ」

「……そういえば私住む所なかったんだ」

この時までアイリスは衣食住の心配などしていなかった。

彼女の父は国民から膨大な量の税を徴収し私服を肥やす下卑た王ではなく、むしろ国民を何よりの一に考えるよき人格を持つ王だった。

それでも、彼や彼の娘アイリスの生活基盤には頂点に立つものゆえの潤沢な金や強大な権力があつた。

幼少からその基盤の上で生活していたアイリスにとって、衣食住は保障されるものではなく当たり前前にそのあるものと認識していたのだ。

その認識を正してみると、後に残ったのはこれからの不安。そして過去、認識を改める前の思い出。

芋づる式に掘り起こされる思い出の数々に比例してアイリスの顔はうつむいていく。

それを止めたのは四つの手。

「ごつごつとした手がアイリスの背中をたたく。
女の子らしいほっそりとした手がアイリスのほほを両側から挟み
こむ。

見るからに病弱そうな白い手がアイリスの肩にそつと置かれる。
そして、華奢だがところどころに傷のある手がアイリスの頭をな
でる。

顔を上げたアイリス瞳に飛び込んできたには、

にへらと緩んだような笑みを浮かべる少年。

はきはきとした笑顔で笑いかける女の子。

やわらかいと言うよりは安らかな笑顔を向ける青年。

アイリスの背をたたいた後そのまま扉に向かったと思われる男の
背中。

「そろそろ飯の準備も終わるだろ。先に食堂に行」

懇々と扉をたたく音がガルドの言葉を切る。一瞬の沈黙の後ガル
ドは扉を引いた。

「食事の準備が出来ましたのでダイニングルームへどうぞ。アルマ
さんも既にお待ちになってますよ……どうかしましたか？」

彼女の疑問はなんともいえない微妙な顔をしたガルドと、その後
ろで呵呵大笑する人たちに向けられている。

その中にアイリスも含まれていた。

「なんでもない」

そのまま扉の外に消えたガルドの背には哀愁が漂っているように見えた。

「行く、アイリス」

「わっ」

アイリスは自分の手を掴んで駆け出したシシーに引っ張られバランスを崩しそうになる。何歩か危なげな足取りをし持ち直したアイリスの後姿を見ていた二人。

「行こうか、ツバサ君」

「そうだね館長」

ツバサは駆け出しシシーたちと合流する、そんな様子を見ながらブツクはマイペースにダイニングへと向かっていった。

Chapter 8 - Homelibrary - (前書き)

どうしましょう、展開がほとんど進みません。

今回もパズルが出てきます。暇ならペンと紙を持って解いてみてください。

てか、解かないと読み応えがないかも。

ヴィネルマ図書館は大別して三つのエリアに分けられる。

ヴィネルマ図書館を図書館たらしめている、世界中から集められた数十万冊にも及ぶ書物が並ぶ図書エリア。

シシーたち図書館で働くもの達全員の居住を保障する居住エリア。アルマ率いる研究者軍団の居城、日々新しい技術が発明される魔術研究エリア。

大別した三つのエリアにはそれぞれエリアを象徴するような巨大な建造物が建っており、大きさだけを見るならば図書エリアの建物だけでマドニア城をすっぽりとしまい込んでしまえる。

建物の中では用途によって施設が変わり、エリアはさらに細分化していく。

三つの建物の間をいくつもの渡り廊下や橋懸かりが立体交差し、そこで働く者たちの移動を補助する役目を変わずに果たしている。

空が明け、鳥達の求愛のうたが人々の喧騒に吞まれ始める頃、アイリスはツバサにつれられ橋懸かりを歩いていた。

「はい！ ここがアルマの研究所」

朝早くに目を覚ましてしまったアイリスは時間をつぶすために建物の中を見て回ろうと考えるもと部屋を出てすぐにツバサに見つかった。

そのまま、居住エリア、図書エリアと回り、最終的に二人は魔術研究エリアと渡り廊下を隔てる扉を開いている。

扉の奥から漏れ出す光に温かみはなく、ただ人の行動の妨げになる暗闇を駆逐するだけの白い光。研究所の廊下には窓がなく、天井に取り付けられた発光術式が太陽の光に取って代わっていた。

白で統一された画一的な廊下を進むたびに足元からさびしい音が鳴る。だが、その音は二人の少女の楽しげな声にかき消され耳に届くことはない。

等間隔で現れる十字路をまっすぐ突っ切ること数回、アイリスには理解できない機器を抱え込む研究員や白衣姿で話し込む研究員とすれ違うこと十数回。長く続いていた廊下も終わりを見せた。

突き当たりの壁にはなんとなくあけるのを躊躇するような無機質な扉が鎮座している。

「アルマの部屋にとーちゃつく！ どうする、中も見てく？」

「うーん、仕事だったら悪いし別にいいかな」

「こんこん」

「ちよつと！！ 今私の言ってたこと聞いてた！？」

聞いておきながら、その答えをまったく無視して扉をたたくツバサ。扉をたたくの合わせて口で「こんこん」と言う姿は、口の端を吊り上げている事もあって、どう見ても「面白くなりそうだからやってます」と言わんばかりだ。

実際その後のアイリスの驚きようを見て、口の端がさらに上がった。

ている。

ツバサに一言言おうと口をあけたアイリスだったが、その行動はスライドし開かれていく扉にさえぎられる。

「あら、おはよう、ツバサさんにアイリスさん。どうしました」

「お、おはようございます、アルマさん」

扉から顔を出したアルマは相変わらず微笑を浮かべているようだ。しどろもどろに返事をするアイリスをみて、アルマはふふつと嫌にならない控えめな笑い声を上げた。

「おはー。いまはアイちゃんの図書館探検の手伝いしてるよ」

「なるほど、ずっと同じ風景が続いててつまらなかつたでしょう」

「いえ、すれ違う人たちが持ってたものとか建物自体始めて見るものばかりだったので見てるだけで楽しかったです」

「そう？ そこまで面白いものでもない気がしますけど。もしかしたら良い研究者になれるかもしれないわね。アイリスさんなら」
「あれ？」

ツバサの素っ頓狂な声に振り返ろうとしたアイリスはその途中でアルマ越しに人がもう一人居たことに気がついた。いすに腰掛けた状態で手元の資料を見ている。

しわが刻まれたその顔に所々に白髪の混じった髪。だが、そんな男の節々にアイリスは幼さが見え隠れしているように感じた。

「じいちゃんなんでここに居んの？」

「ん？ ツバサか、今日は魔道二輪なるものを見せにもらいな」

「あー、なるほど」

ツバサにじいちゃんと呼ばれた男は一瞬こちらに視線を向けずぐにまた資料を読み始めた。ツバサはそれを気にした様子もなく彼の後ろに回りこんで肩越しから資料と一緒に読み始めた。

入り口で置いてけぼりを喰らったアイリスにアルマが身振り入室を促す。

「彼はマルタ・サブナ八術務大臣。この国に仕えているツバサさん御爺様よ」

部屋に入ったアイリスにアルマが説明してくれる。

「術務大臣？」

「国の魔術や魔術書を一括管理する人よ」

「術務大臣……。なんか王様の次に偉そうな」

アイリスの呟きに、アルマは軽く目を見張る。

「貴方頭いいわね。まったくもってその通りよ」

魔術というものをクロノパイディア遺跡で一度見ていたとはいえ、そこからこの世界における魔術の重要性の高さに気がつくアイリスの頭の回転の速さに対する感銘の言葉だった。

「アルマさんって凄いですね。術務大臣が会いに来るなんて」

アイリスが少し照れたように唇に指を当てる。それをごまかすようにアイリスから出た言葉は感謝や否定ではなくアルマへの純粹な感嘆。

「ふふ、ありがとう。……それと、シシーたちの持つ魔道二輪は秘

密にしといてね」

「？ あ、はい。わかりました」

理由の欠如している言葉の意味を正確に理解し頷くアイリスにアルマはさらに笑みを強くする。

「それではマルタ様、七番倉庫に案内しますのでこちらにどうぞ」

「おおそうか。それじゃあまたなツバサ」

「ばいばーい」

いすに寄りかかったまま手を振るツバサと入り口近くで軽く頭を下げるアイリス。アルマがマルタを先導し十字路にその姿を消した。

「……ふう」

「まだ怖い？」

「怖いわけじゃないよ、ただアルマさんの前だと下手なことをしちやいけない気分になっちゃって」

「ああ、それ分かる。でもまあ、すぐ慣れるよ。ぼくらも行こう」

ツバサはアイリスの横を通り過ぎ部屋を出て行く。その後を追うアイリスも部屋を後にした。

アイリスが次に向かったのは図書館で働く者たちが一塊に集まり、さまざまな話題が飛び交うダイニングルーム。そこで朝食をとった後、用事があるというツバサと別れそのまま図書館へと向かう。

「あれ？ ガルドさんどこかへ出かけるんですか？」

図書エリアへと繋がる渡り廊下を目指していた時、シシーたちが生活しているフロアへと続く階段から全身に武器を纏った姿でガルドが降りてきた。

「ん？ いや、庭に向かうところだ。これからツバサに稽古をつけるんでな」

「へえ、ツバサちゃんの先生なんだガルドさんって」

「まあ師匠と呼ばれてたりするな。……都合のいいときだけ」

ツバサちゃんらしいですねというアイリスの言葉にガルドはやれやれとため息を吐く。それに合わせ金属のこすれる音もどこか呆れを含んでいるようだ。

「そろそろ行くな」

「あ、はい。呼び止めてごめんなさい」

ガルドが金属音を響かせながらアイリスの脇を抜ける。気にするなとアピールするように右手を上げ、アイリスの来た道を歩いていく。

その後姿を一瞥し、アイリスも渡り廊下へと進んでいった。

ヴェネルマ図書館・図書エリア。屋根の下を行き交う者達の足音が幾重にも反響し強め合っている。吹き抜け構造の巨大な建物を内から支える巨大な四本の支柱視界におさめながらアイリスは読書区画へと足を運んだ。

開館前のこの時間のため一般の人々は居らず時々、本棚の後ろから聞こえる足音を聞きながらシシーを探す。だが、一向に見つからない。

仕方なく足音をたどりここで働く男性にシシーの居場所を聞くと、朝ツバサに案内されたときには入ることの出来なかった扉の前へと案内された。

「シシー様はこの先に居ります。既にブック館長より入室許可が下りていますのでそのままお入りください」

「？　ありがとうございます」

男の発言にはアイリスにとって不可解なものが含まれていた。しかし、その疑問は口には出さず、お礼だけを良い扉を開く。扉に触れた際、手のひらに微かに違和感を覚えたが、気にすることなく扉をくぐった。

目的の人物はすぐに見つかった。本棚をいくつかよけた先、うずたかく積まれた本の塔に囲まれて少年は床に腰を落とし歴史書を紐解いていた。目が細かく運動し、二秒も掛けずにページを送っていく。アイリスが来たことに気がついていないようだ。

「シシー？」

シシーは変わらず本を読み続けている。アイリスはもう一度声を掛けようとしてその口を閉じた。改めてあたりを見渡す。此処に置かれている本には部屋の外に置かれていたものと違い、アイリスの知らない言葉で書かれた本が大半を占めていた。

このことと先に自分を案内してくれた男性の言葉から、アイリスは外よりも重要な本が保管されているとあたりをつけた。

背表紙を眺め歩いていると、一冊の本に意識が吸い込まれた。理解できない言葉が並ぶ中、そこだけアイリスの理解できる言葉が置かれていた。その一冊を手取る。

表紙には”蝶の黙示”と書かれている。題字の下方には黄金色に輝く金属の円盤が埋め込まれていた。中心とその回りを等間隔に四箇所を正円状に切り抜かれたかのように穴があき、中は黒く塗りつぶされているかのような。五個の黒円が十字の形に配置され、その中でははつきりと数字が浮かび上がっている。

アイリスが本を開こうとしても全てのページが糊付けされてしまっているかのようにぴったりと閉じたまま、かたくなに開こうとしない。

開くのは諦め、表紙に埋め込まれた円盤に触れた。ひんやりと固い感触が指から伝わってくる。アイリスがあれこれ弄っていると、指を離れたときに、切り抜かれた穴のひとつにつめが引っかかった。何かが外れる音とともに円盤が回転した。どうやら右回りに円盤を回転させることが出来る仕掛けが施されているようだ。

90度円盤をまわすごとに円のうちに浮かぶ数字が変化する。その様を眺めていたアイリスが本から目を離れた。移動し、本の塔の隣に静かにある木製の机を前にいすに座った。

アイリスは机の上に置かれた箱から一枚の紙と書くものを手に取った。線の滑らかさといちいちインクを含ませる必要がないことに多大な驚きを感じつつも、手は止まることなく本の表紙の仕掛けに浮かぶ数字を書き写していった。

? — ? — ?
? — ?

かの組み合わせに法則を当てはめ首をかしげる。

そんなことをしばらく続けていると、視界の端に若草色に輝くものが映りこんでいることに気がついた。顔をそちらに向ける。

若草の山と目が合った。アイリスの口から悲鳴にも似た驚きの声飛び出した。若草の山はシシーの髪で、そこからのぞく目もシシーのものだと瞬間理解できた。しかし、女性的本能か、あまりにも近くにあった少年の顔はその一瞬のみ恐怖の対象にしかならなかった。

「ごめん」

アイリスの驚きようはシシーには意外だったのか、弾かれるように身を引いて一歩はなれた。

「あ、大丈夫。……いつから見てた？」

強く脈打つ心臓を抑えこむように胸に手を当て振り返る。恐怖の次に襲ってきたのは見られていたことに対する羞恥心だった。顔がほのかに熱い。

「アイリスが紙に”(7+3)÷2-4||1”って書いてたときからだね」

「かなり前……呼んでくれればよかったのに」

いよいよもってアイリスの顔が赤く染まった。顔を隠すように紙へと向き直る。しかし、さっきまで意味を持っていたはずの数字がまるで知らない言葉のように頭の中でぐるぐる回り消えていった。

「呼んだけど聞いてなかったみたいだよ。どう？ 解けそう？」

空気を讀んだわけではないのだろうが、その話題轉換は素直にありがたかった。

「どうなんだろう。四つ目を抜かして、三つのうち二つまで共通する法則なら見つかったんだけど、全部に共通する法則が見つからないの。ために二つに共通する法則を四つ目に当てて出てきた4を入れてみたけど、違ったみたい」

ペンを置いて足先から手の先までをピンと伸ばし、固まった体をほぐす。

もともと三本あった装飾のような線は残り一本。もう後がないことを示していた。

「……アイリスは二つ目以降の数字の組を見るときに何をした？」
「なにつて、これをこうやって回して。……あ！」

気がついた。一つ目の組以外は90度ずつ向きが変わっている。数字や記号が整然に入り乱れる紙を脇にのけ、新たな紙を手に取りペンで数字を走り書く。今度はただ写すだけでなく、回転されていることを考慮する。

0度
? — ?
? — ?
? — ?

? — ? — ?
 ?
 270度

? — ? — ?
 ?
 180度

? — ? — ?
 ?
 90度

さっきまで頭を覆っていたもやが晴れてくる。見えて来た。法則はもう出ていたのだ。それもかなり早くの段階で。回転していることを頭に入れていたら既に解けていただろう。

アイリスは頭の中で導き出した法則に則って計算式を紙に書き出しながら正否を確認していった。

$$\begin{array}{r} (7 + 3) \div 2 - 4 = 1 \\ (9 + 5) \div 2 - 6 = 1 \\ (8 + 6) \div 2 - 4 = 3 \end{array}$$

合っている。つまり、四つ目の組の空欄に入る数字は、

$$(3 + 5) \div 2 - 1 = 3$$

となり、3だったというわけだ。

アイリスは円盤の空欄の中に3と書き入れる。これが間違いだつたら何が起ころのだろうという心配は杞憂に終わった。

3の形に倣った線がゆらゆらと揺れている。しかし、今度は消えることはなかった。しんと波紋のように光の輪が円盤をなでた。今まで頑なに読まれるのを拒んでいた本はあっけなくアイリスに中身を開放した。

「解けた!!」

見開きの本を視線の高さまで持ち上げた。適当に開いたページの前後関係の分からない文章は知識を与える代わりに、充実した達成感をアイリスに与えていた。

「よかったね」

「よかったわね」

がばりと背をひねり、背後を見た。

「いつから見えましたか？」

「何時からだったかしら。うふふ、何かを熱心に取り組む姿は見てまぶしいですね」

アイリスが浸っていた達成感に再び現れた羞恥心が流れ込み混ざり合っていた。

アイリスの隣でシシーが歴史書を読んでいる。またも自分の世界に籠ってしまったようだ。

アイリスの気持ちが落ち着いてきたところで、アルマがテーブルを挟んでアイリスの反対側に腰掛けた。肩にかかる大きなポーチを開けている。

中から出てきたのは一冊の本だった。それも、今アイリスの持つ”蝶の黙示”の横幅、縦幅、厚さ全てがひと回りもふた回りも大きいものだ。

片手で持つには重過ぎるそれがアイリスの目の前に置かれた。

「今から住人登録させてもらうわね。これに登録しないとこのヴェネルマ図書館での行動のほぼ全てを制限されてしまうので。今、貴方はブック様の一時的な許可の下、自由に行動することができています。ですが、それはあくまで一時的なもので、継続できる時間は二十四時間しかありません。この時間を過ぎると、アイリスさんはこの図書館におけるあらゆる権限を失います」

確かにこの部屋に入るときブックさんの許可をもらったが、ほぼ全てとは少し言い過ぎではないか？ ……いや、違うのか。考えていたことが分かったのかアルマが補足をしてくれる。

「ヴェネルマ図書館での権限を持たない方々は図書エリア一般開放区域までしか入れません。つまり、この扉の向こう側のエリアだけです。それ以外の区域に繋がる扉をくぐることは出来ません。窓から入ることも不可能です」

「なるほど、わかりました」

魔術のもつ有能性と危険性はアルマさんの作った魔道二輪とシン
ーたちの使った魔術だけでも十分理解できる。力の流出を防ぐ術は
十全なのだろう。この部屋にある本を許可なく持ち出そうものなら
ここは出口のない牢獄となる。まして破り捨てようものならどうな
ることが……

「では、はじめますね」

あらぬ方向に流れていく思考がアルマによって本流にもどされる。

「お願いします」

それではとアルマの手が本の表紙に描かれた手形に合わせられる。
仕草の一つ一つが羽のように柔らかい。

「アルマ・カンパネルダよりバイスキーパシステム副館長権限の使用許可を要求します」

検索開始 アルマ・カンパネルダ 完了

照合開始 マナ生命片一致 本人確定

バイスキーパシステム副館長権限使用可能です

あまりに平坦で、生き物には出せないような冷たさのある声にあ
わせ、本に重ねたアルマの手の間から光が漏れ出す。それはまるで
本が喋っているようにも見えた。

「まずはここに名前を書いてください。国名くになは入れないでください
ね」

開かれた本には右ページに描かれた手形をのぞき、見開きいつぱいを文字と下線の引かれた空欄が埋めていた。見るほどに書く気がなくなってくる。

アルマが指差していたのは左ページの左上、ほかよりも大きく場所をとった空間だった。手元のペンで名前を書き入れる。ペン先からこぼれるインクは紙に触れると黒色を弾き飛ばすようにきらきらと輝いた。輝きがおさまるとアイリスの筆跡が金字となって現れた。

「このまま書いていけばいいんですか？」

「普通ならそうなんですけど、貴方はいいわ。住所にエルンバーク国と書かれても余計な混乱を起こすだけです。この世界でのアイリスさんの証明はわたくしが捏造つくります」

不穏な空気が流れてきたのをアイリスは肌で感じた。アルマさんの微笑が怖い。

「それは、つまり……」

「貴方は今から、この世界で生を享うけこの時間に生きる一人の女の子よ」

慈母の様な微笑みと言葉の意味するところの隔たりがいつそ清清楚楚く感じる。それでも、これはやってはいけないことだろう。

いつの間にかアイリスの手から本とペンが離れ、アルマの元に移動していた。

「イケナイ事ですよ。それ」

「あら、失礼ね。貴方の正体が露見することのほうがイケナイ事ですよ」

遠まわしにイケナイ事していると認めたアルマ。

アイリスの質問に言葉を返しながらも、アルマの手は優雅に、それでいて迅速に文字を書き続けている。

次々に書かれていく言葉をアイリスは理解できない。読めはするが、固有名詞が分からないのだ。

「でも、これがアルマさんの作り物だと知られたらどうするんですか？」

「大丈夫よ。わたくし捏造ねつぞうや情報操作は得意なの」

また一つまた一つとアイリスの知らない言葉が増えていく。そのたび、桃の髪の艶女あつめんなに住まう悪魔にまた一步また一步と悪の道を歩かされる錯覚をアイリスは覚えた。

けれども、同時にアルマのやっていることが正しいとも思う。

どちらにせよ、アイリスにはどちらが良いか悪いかを判断できるほど、この世界の知識を持つてはいなかった。

「……穴はないわね」

全ての項目を書き終わったようだ。

「それではこちらに手を乗せて、名前を唱えてください。もちろん国名は抜いてですよ」

アイリスは頷き、右ページに描かれている手形に手を合わせた。まだ何も起こらない。

一言名前を呟く。手形にぼつと明かりが灯った。と、重ねた手から何かが流れ出しているような感じがする。これはこの部屋の扉を開けたときに感じた違和感を少し強くしたようなものを感じられた。

新規住人登録開始 アイリス・フランロッド

情報確認 不備なし

情報基地更新 完了
データベース

筆跡登録 完了

発音登録 完了

生命片登録 完了
マナ

新規住人登録全工程終了

「終わりましたよ」

「ありがとうございます」

アイリスが軽く会釈すると、アルマが微笑を浮かべた。ポーチに本をしまいこむ。

「異例ですが、今アイリスさんはシシー様やガルド様と同じだけの権限を持っています。開くことの出来る扉は今までと変わりませんが、ヴェネルマ図書館の敷地内のみならば、この部屋の本を私やブック様の許可をとる必要なく持ち出せるようになりました。ただし、持ち出した本を転貸てんたいすることは出来ません」

理由は分かりますよねと目が語っているような気がした。頷くと、アルマは顔に浮かべた微笑を少し深くしてそのまま席を立った。

「今、捜索班の人たちががんばって時系統魔術を探してくれています。目的のものが見つかるまでは、せめてこの世界を楽しんでくださいな。魔術を覚えてみるもよし、わたくしのところで何か作ってみるもよし、この世界を見て回るもよし。ただし、この世界はお世辞にも安全とはいえませんが、ほかの国に行くならば自衛の術を

習得してもらわなければいけません」

「何から何までありがとうございます」

アイリスも席を立ち、深々と頭を下げた。

「アイリスさんは今何かやりたいことはありますか？」

「魔術を使ってみたいなと思ってます。……私にも出来ますか？」

直前まで気が動転していたからだろうか。遺跡の中でシシーが魔術を見せてくれたとき、普段よりも気分が高揚したのを覚えている。もっと見てみたい。自分も使ってみたい。そんな思いが手伝って、そのときを振り返ってみるとひどく恥ずかしい自分がいる。

それでも、魔術への興味は衰えていくことなく、むしろ膨らみ続けていた。

「アイリスさんは何か分からないことがあったら、とことん調べる人でしょう？」

質問に質問で返され、少しの間が空いてしまった。

「まあ、そうですね。わからないまましていると気分が落ち着かなくなってしまうので」

「それならきつと、かなり位の高い魔術も使えるようになると思いますよ。魔術というのは覚えて使うものではなくて、理解して使うものなので」

アルマが分からないことを言ってきた。

「理解して、ですか？」

「ええ。魔術書を読んで中身を覚えたところで、中に書かれている

魔術は使えません。内容を熟読吟味して、糸を一本一本紡いでいく様に本に書かれていたことを縫り合わせていって初めて魔術が発現するようになるんです。本にかかれていた呪文を唱えたのに魔術が出なかったという方は、その魔術をちゃんと理解できていないんですね」

アルマが本棚の影に消え、しばらくもたたないうちにいくつかの薄い本を持って戻ってきた。

「この世界でいわゆる超初級や初級魔術と呼ばれている本です。一般の方が生活で普通に使ってるレベルですね」

本というよりは紙の束といったほうがしっくりとくる。机の上におかれたそれは目算で十五ページもなかった。

ただ、読もうと思っても無理なのだが。

「そんなに眉間にしわを寄せてはいけませんよ。こちらがその本を現代語訳したものです」

意味の分からない記号が並ぶ本の隣にほとんど同じ装飾のされた本が置かれた。違うのは表紙に書かれた題字。 ” 火の書 ” という捻りのない題名が書かれていた。

「新しく魔術書が見つかった場合、まずすることは現代語に訳すことです。ですがはつきり言いまして、現代語訳された魔術書というのは原書に比べて一段も二段も劣化してしまうんですね。なぜだか分かりますか？」

アルマの質問に首をかしげる。隣から本をめくる音が聞こえてきた。ふと、思いついた考えを伝えてみる。

「そこに翻訳者の解釈が含まれてしまっから？」

「正解です」

凄いですねとほめられて、うれしさと照れくささが入り混じった気持ちになる。アイリスは指を口元に当ててすこし俯きぎみにありますがとうございませと呟いた。

「こちらを見てください」

現代語訳で書かれている方の魔術書が開かれる。確かにそこに書かれている文字は読める。だが、あまりに難しい言葉や文法がずらずらと並んでいて、段落一つ理解するのも頭が痛くなってきた。

「翻訳者の方たちは最大限自分の解釈を除き、原書に限りなく近づけることを主眼に翻訳をしていきますので、読者には非常にづらい翻訳書になってしまっんですね。特にこの本は、ブック様が翻訳したものでかなり原書に近い翻訳がされてます」

「だから、あなたはとことん調べる人？なんて聞いてきたんですね」

一語一文ちゃんと理解しないと魔術が発現しないから。

「そういうことです。この部屋には手ごろな現代語辞典や古代語辞典がたくさんありますので、まずはこの二冊から読んでみるのがいいと思いますよ。もし分からないところがあれば私のところに来てくれれば教えてあげること出来ますので、」

アルマから二冊の魔道書を受け取った。 ”火の書” と書かれた本とその原書だ。

「ありがとうございます」

「いえいえ。それでは、わたくしはこれで。……と思いましたが、もう一つ。今日だけは魔術書ではなくほかのことに時間を使っていたいただきます」

「何にでしょうか？」

「家に居るにしろ出掛けるにしろ、着る服が一着しかないのは嫌でしょう？」

隣でシシーがまた一枚、ページをめくった。

恰幅の良いおばさんが声を張り上げていた。棚には冬の終わりに溶け出した清らかな水を浴び育った新鮮な野菜が並べられている。違うところでは、煙突から伸びる煤混じりの黒い煙が長いたびをして来たにかぜにつれられ、マドニア城後ろの山間へと消えていく。

シシーはマドニアの城下を歩いていった。隣にはシシーの歩幅に合わせて歩くガルドが居る。体が隠れてしまう大量の武器をいまは体に巻いておらず、がっしりと筋肉のついた体つきを見て取ることが出来る。腰に一本だけある短剣がガルドの持つ唯一の武器だ。

店に並んでいる商品を見ながら歩いていると、聞きなれた声が聞こえてきた。前方の少し離れたところで、ツバサが大きく手を振っている。その隣でツバサの目を引く行動に集まってきた視線の中にどこかそわそわしたようにアイリスが立っていた。

「ガーちゃんもシイちゃんも遅いー！ 私たちが狼に襲われたらどうするのよ」

頭の左右からぴよこんと飛び出した髪の毛の房が大きく上下に揺れた。

「お前が完膚なきまでにボコボコにして、去勢までしてくれそうだからな。何もしない」

ツバサが”ひどー”とか”それでも男ー？”などと叫んで更に人目を引きずり込んでくる。シシーは舞台の中心に居る二人を無視して、アイリスのところまで歩いていった。

「なんかあつた〜？」

ツバサたちから少し離れたところ、黒いドレスがアイリスの動きに合わせて揺れた。

「気になることが一つだけ、この腕輪には魔術的価値があるのかもしれない。もしかしたらとても希少な金属なのかなとも思ったんだけど、どう見ても銀だから」

アイリスは透明な箱の前に立っていた。箱の中には匠が魂をこめたであろう様々な貴金属が太陽を照明にその身の装飾を競い合っている。その中に一つだけ、どう考えても不釣り合いな腕輪が飾られていた。

「銀かどうかは知らないけど、そこまで希少な金属ではないと思うよ。値段が高いのはアイリスが始めに言ったとおり魔術が刻まれているからだね〜」

解ったのか解ってないのか、アイリスはなるほどと呟きはしたが、

その目は腕輪から離れなかった。

「アイちゃんって、うお、まぶし」

振り返ると、ツバサが大きさに体をのけぞらせて、手で目を隠していた。

「このキラメキはぼくには毒だ。アイちゃんはこういうの好きなの？」

「うっん、そうでもないよ」

店の勘定台で店主が身動きした。当てが外れてがっくり来たみたいだ。店を冷やかしている間、アイリスは華やかに着飾った貴婦人に目を向けることなく、ちらほら周りから浮いているみすばらしいともいえる腕輪だけを見ていた。

「次どこいこっかー。アイちゃんは行きたいところある？」

「何があるかわからないよ」

お昼時を少し過ぎ、外を歩く人たちが次第に増えてきていた。向かいから寄せてくる人の波がツバサとアイリスの前で二つに割れ、二人に道をあける

ツバサたちとシシーたちの間にまたも隔たりが出来ていた。

ツバサが先頭を歩き、その後ろでアイリスが時折きよるきよるとあたりを見渡している。アイリスが何かを指差しながら口を開くた

びにツバサが困り顔で返事をしているのは、普段のツバサとはあまりにもかけ離れていて、見てて楽しい。

後ろは後ろで、大きさも形もさまざまな木の棒を振り上げ襲い来る子供たちをガルドが素手でいなし、無防備になった子供の額を指で軽く弾いていた。周りにいる人たちはその様子をほほえましげに見ている。

一人の子供が石に躓き、転んだ。その子供を引っ張り起こすガルドの後ろで幼き剣客たちがいつせいに斬りかかった。その剣撃をガルドは足元に転がっていた木の棒で振り向きざまに全て防ぎ、子供たちや周りの見物人から歓声をもらっていた。

視線を前に戻す。ツバサがこつちを向いて、こいこいと手の先を上下に振っていた。

「シイちゃんよ。後は任せた」

「なにを〜？」

「説明をー」

何で耳元でささやくんだろう。アイリスに知られたくないのかな？ だとしたら意味がないけど。

アイリスはシシーの耳元に口を寄せるツバサを訝しげに見ていた。それに気付いたツバサはあははと曖昧に笑った。

その笑い声を子供のはしやぎ声が押しつけた。シシーたちの間を縫うように走り抜ける子供たち。ガルドとちゃんばらをしていた子供達だ。まだ邪気というものを知らないであろう男の子の一人がアイリスの脇を走りぬけようとしたちょうどそのとき、向かいから小走りでかけてきた少年とぶつかりそうになった。少年が身を捻ったおかげで衝突することはなかったが、バランスを崩した少年は小走りのスピードそのままにアイリスに激突した。

アイリスの体が弾き飛ばされる。体格差から押し負けたのはアイリスだった。

とつさに手を伸ばしアイリスの腕を掴む。

アイリスが地面に倒れることはなかった。しかし、少年とぶつかったときに、どこに入れてたのか巾着袋がアイリスの服から飛び出し地面に落ちる。落ちた衝撃で袋の中に入っていたものが飛び出した。

石？ でも、ただの石じゃないみたいだ。

シシーがじつと石を見てみると、アイリスにぶつかった少年も地面に転がった石に気付いたようだ。石と巾着袋をあわてて拾い上げアイリスに手渡し、” すいません ” と頭を下げていた。

アイリスの ” 気にしてない ” との言葉に少年は緊張した表情を緩め、もう一度、今度は深々とお辞儀をし、離れていった。

「大丈夫だったか？ …… てか、何見てるんだ？」

アイリスは手の平に転がる石をじつと眺めていた。

「あ、はい。大丈夫です。シシーが支えてくれたので。」

そこでいったん、アイリスの言葉が途切れたように感じた。

「これは、お父様がお守りにと私にくれたものです。見ますか？」

アイリスから石を受け取ったガルドが、それを指でつまんで光にかざした。石はその身に受ける太陽の光に暖かな橙色を加えてから、受け流す。一瞬、それはまったく気泡や不純物の入っていない琥珀にも見えた。屈折率が違うのか、三本の輝く線が絡み合うように石の中に浮かんでいた。光の線が閉じ込められているみたいだ。

「その石を見てると心が落ち着くんです」

「たしかに。この石ならばくも欲しいかも」

ツバサがアイリスの言葉に相槌を打つ。その隣で、シシーとガルドはじつと石を覗き込んでいた。

「確かに綺麗だな」

しばらくの間、石を覗き込んでいたシシーたちだった。しかし、通行人が使えているのに気がつく、石をアイリスに返しまた歩き出す。

？ 気のせいかな？

ガルドがアイリスに石を返したとき、アイリスが一瞬だけ首を傾げたような気がした。

ツバサと仕立て屋さんの声が建物の中から聞こえてくる。城下の町に来た理由であるアイリスの服を手に入れるため、ツバサのお気に入りの仕立て屋に来ていた。

ガルドは腕を組みじつと街道の一点を見ている。とはいっても、何かを観察しているわけではなく、考え事をしているみたいだけ。そこまで広く建物に四人全員が押しかけることは出来ず、シシーとガルドは店の前で待つことになった。

「なあ」

「なに〜?」

ガルドがどこか硬い表情をしている。

「何かわかったか？」

なにを言ってるかはすぐに分かった。

シシーはガラス越しに店の中に居るアイリスたちを様子を伺う。ツバサと仕立て屋さんが異様に興奮しながら話し合い、その間に挟まれてアイリスは疲れたようだった。

ガルドもシシーに合わせてか、それともつられてか、アイリスを見ていた。

「何かおかしい気がするんだよね〜」

ガルドがシシーへと向き直った。さっきよりもさらに表情を硬くしている。その目が続きを促していた。

「何で僕たちはアイリスのことをいろいろ知ることができたんでしょ〜？」

「ん？ そりゃあ、アイリスが話してくれたからだろ」

ガルドから硬さが少し抜けた。片眉だけ上げてシシーの言った言葉の意味を考えている。

「そうだね〜。じゃあ何でアイリスの話す内容を僕たちは知ることが出来たんだろうね〜？」

ゆっくりとガルドの眉間にしわがよってくる。見てて面白い。

「質問の意味がわからねえ」

ついに首を傾げ始めてしまった。

「過去の歴史を三つに分けるとするよ。発見したのか発明したのかはおいといて、人類が魔術を使い始める前の時代と後の時代、それに過去と現代の間にぼっかりと横たわる空白の時代。この三つの時代のどこかにアイリスが居たと仮定して、魔術を使い始めた後の時代は問題外。魔術のなかった時代に居たなら僕たちと現代語で話せるわけがないよね」

ガルドがはつと身じろぎした。伝わったかな？

「そうだよな。アイリスが過去から来た奴なら現代語を話すわけがない。古代語、悪くすれば俺らの知らない言語だったはずか」
「そういうこと。未来についても同じようなものかな。何かが原因で魔術文明が滅んだとしても、やっぱりアイリスが現代語を話すのはおかしいと思うよ」

一人でも現代語を話す人がいれば、一緒に魔術の存在だけでも伝わっていくから。

ガルドは相槌を打ったり、短く返事をして理解してくることを伝える以外は、シシーの話の邪魔をするようなことはなかった。

「文明が少しずつ衰退していくって可能性もあるけど、そもそも魔術が衰退していくなんて考えられる？」

「無理だな」

シシーの問いかけにガルドは少しも考えるそぶりを見せることなく答えた。シシーもガルドもただ何もせず魔術が滅んでいくほど、魔術がこの世界に与える影響が小さいとは思えなかった。

「それじゃあなんだ？ アイリスは空白の時代の住人か？」

「アイリスの時代の人たちが、後世に自分たちの偉業や歴史を誰一人、一切伝えなければそうなるかな」

ありえない。でも、可能性がないともいえないとシシーは思った。ガルドが空を見上げぼつりと言った。

「禁書の類か？」

蒼く染み渡る空には一塊の雲が浮かんでいた。ガルドは風に身を任せ泳いでいくその雲を目で追っていた。

「その可能性は高いと思うよ。でも、そうになるとアイリスがどの時代から来たかぜんぜんわからなくなっちゃうんだけどね。どこから来ても禁書のせいに来ちゃっから」

店の中では、エスカレーターしたツバサと仕立て屋さんに、アイリスが揉みくちやにされていた。シシーはアイリスのどこか泣きそうな顔を一瞥してから、ガルドと同じように空を仰ぎ見た。

「どこから来てどこに行くんだろうな」

ガルドが独り言のように呟いた。

揺ら揺らと流れる雲が建物の影に隠れるように消えていった。

雲ひとつなくなった空を眺めていた二人の背後でドアの開く音が聞こえた。

「シシ、助けて。疲れた」

「……すげえ顔だな。口調もシシー並みに馬鹿っぽくなってら」

「ガル？」

「ツバサも仕立て屋の人もぜんぜん私の話聞いてくれないの」

愚痴をこぼし始めたアイリスの後ろから、ぬっと二本の手が伸びてきて、アイリスの肩を掴んだ。

「アイちゃんどこ行ってんの？ ほら、まだ終わってないんだから」

ずるずる、ずるずると、アイリスは二本の腕に引き込まれていった。

「もう勝手にして〜」

「いいの？ わかった。それじゃあ採寸するから服脱いで」

「えー！？ まってよ。せめて人の目がないところだって、ちょっと」

ずっと視線をアイリスから外し、街道へと向けた。さっきガルドとちゃんばらをしていた子供たちが、はしゃぎながら目の前の街道を駆けていった。

……白かあ。

Chapter 2 - 1 - Jack in the Box - (前書き)

Book's dictionary

明明めいめい || あかるいさま

冥冥めいめい || くらいさま

飄々ひょうひょう || ぶらぶらと定まらないさま

散り別ある || 散り散りに別れ去る

花の都は今、静寂に包まれていた。体のかけた月が眼下を照らし、望む。寝静まった民の寝息は壁に阻まれ外に漏れること敵わず、夜を活動期間に定める一部の生物たちも、今日だけは都での生活を放棄してしまつたかのようだ。それほどまでに、今日、都に音はなかった。

風さえも吹かないこの都は、まるで時でも止まってしまつたかのようである……雲模様で明暗する月のはかなさだけが、都に生を吹き込んでいた。

花の都の所以である大庭園には、春も半ば、色とりどりの草花が命を輝かせている。それらに囲まれて建つ城も同じく静寂に包まれていたが、その静寂を生み出しているものは、直接的には違つもので間接的には同じものだった。

王への謁見が許されたもののみが入ることのかなう謁見の間には、招かれざれ客がいた。一言で表すなら『黒』。夜の闇に紛れるように黒色を全身に巻きつけ謁見の間を動き回っている。その動きは不規則に見えるようで規則的で、『黒』が通つた後をなぞるように大理石の床に青白い線が引かれていく。円や線、文字や記号が意味を持つ形に並べられ一つの魔法陣がその姿を表していった。ふと、『黒』が動きを止め、魔法陣の中央に視線を移した。『黒』から小さく漏れ出た下卑た笑い声は強く響き、空間を埋め尽くした。

魔法陣の中央には十数人の人間が結界により逃げ場を失っていた。『黒』が床に線を書く手を止めた。影が縦に伸びる。意外にも背が高い。

『黒』の手には一冊の本が握られていた。

結界の中では、怒声を発するもの、涙ながらに懇願するもの、結界に腕を叩きつけるもの、老若男女様々な人間が一つの目的、自分分に降りかかっている身の危険から逃れようともがいていた。『黒』

は生にすがり付こうとする人間を視界に入れながらも、その目に彼らは映っていない。結界が音を遮断しているため、謁見の間には『黒』の纏う黒衣がこすれる音しか聞こえない。

手に持った本を緩慢に開いた『黒』は、それをなぞる様に詠唱を始めた。

— 我は送ろう《aftos epiferei enathana tos》

— 希望に生を幻視した者も《kai echei ochi a fi》

— 絶望に死を見出した者も《kai echei ochi ifimi》

— ただ等しく平等に《aftos einaimolisd iatasso apovasilias》

— そこに善意も悪意もなく《to einai poly efkolii》

— 己を苛む罪悪もない《allato echei pote telos》

— 無情な皇の命するとおりに《pou spaieitinalysidatis zois》

— 延延と、延延と《kai synergatistou f akelo》

— 死せる者には天使に見えよう。《angelos chamogelio gia nekrous》

— 生きる者には悪魔に見えよう。《diavolos chamogelio gia agioi》

— ただ其のどちらでもなく《alla aftos chamon gello gia kaneis》

— 我は命を届ける送り人《kampana dentro da ktylios》

— 虚に響くのは木鈴の音《ego mechrithanatou》

— 届けるのは隷属の御印《symvolo einaimolistis tis zois》

— 逃げることは叶わないだろう。《aftos apagorevounnatoskasou》

— 皇の許すことなど無いのだから《to einaiklisis "Thanatou Speira"》

死霊術式 " 死の螺旋 "

真つ先に変化が起きたのは、結界の中だった。頭を押さえる者、首を押さえる者、胸を押さえる者。それぞれが別々の動きをしながら

らも、その身に受けているであろう苦痛を体現していた。

老人が床に倒れ伏した。落ち窪んだ眼窩にはまる眼球が焦点を結ばず、小刻みに震えていたが、それもすぐに止まった。それを皮切りにつぎつぎと床にくず折れる人間たち。

『黒』は耳障りな笑い声を発しながら、その光景を見ていた。正確には、倒れていく人間たちを見下ろすように空中を拡散、収縮する白い靄のようなものが次第に大きくなっていく様をだ。

最後まで身を震わせ、耐え忍んでいた子供たちが遂に生を手放した時、魔法陣の上空には二つの白い靄が浮かんでいた。大きさは人の頭ほどだ。

術式の発動に必要な膨大な生命片マナを、術者からではなく生贄から吸収した魔術はそれでもなおまったく足りない生命片マナを生贄の生命アニ核マで補った。

しばらく漂っていた白靄が壁をすり抜け城から勢いよく飛び出す。意思を与えられた二つの靄は、一つの使命に従って行動を始めた。すなわち、魔術の完成に必要な生命片マナを集めること。

二つの向かう先では、月の光に照らされて、花の都が美しかった。

さわさわと揺れていた木々が悲鳴にも似たたざわめきを発した。切り裂かれた空気が衝撃と成り、大地を襲ったのだ。

空を裂く二つの影の一つ　光天ひかるかみが速度を上げた。光天に追走していたもう一台の魔道二輪もそれに合わせてペースを上げ、光天とつかず離れずの位置を保っている。霄劔や光天が直線や曲線で表される美を追求しているのに対して、今、光天の後をついてくる魔道二輪にははつきりとしたテーマが見て取れた。翼だ。光沢のある青

黒色の機体がすらりと伸び、座席の後ろで二つに割れている。機体の両端に黒や銀の金属板がいくつも複雑に重なり合い、一对の翼のようなものが出来上がっている。魔道二輪の全体像は、翼をたたんだツバメを少し縦に伸ばしたような形だった。魔道二輪 鐔黎^{つばくろ}。つばくろとはツバメの別名のことだそうだ。霄剣と光天がそれぞれ早さと安全性でほかを圧倒しているのに対し、ツバメの名を冠するそれは操作性のよさでほかを圧倒していた。

『そのまま大きく右に旋回してください』

音速に近い速さで向かってくる風の威力をそよ風程度にまで落としてくれる魔術障壁の中に、アルマの声が聞こえた。だが、いまこの場にアルマが居るわけではない。

声は光天から聞こえていた。慣れてきたとはいえ、やはりどこか信じられないとアイリスは思った。

『ねー、あとどれくらいー？』

今度はツバサの声だ。後ろでは声の主が空を縦横無尽に飛び回っていた。早すぎてよく見えないが、どう見てもツバサは鋭角のターンを速度を落とすことなくこなしている。きつと鐔黎の軌跡が空に残っていたならば、小さい子供の塗り絵並みにかくかくと、ごちゃごちゃとしていることだろう。

『アイリスさん、今ツバサさんは何をしています？』

「……私たちの後ろを一糸乱れずについてきています」

ツバサがぐつと親指を立てた。良い笑顔だ。

「でも直前まで四方八方に飛び回ってました」

ツバサの笑顔がピシリと凍りついた。口の端がぴくぴくと小刻みに震えている。

『ツバサさん？ 貴方達は今、戦場のぎりぎり外側を飛んでいるに過ぎないのですよ？ もし相手の索敵範囲に触れたらどうするつもりですか』

『申し訳ない。どうしても、空を駆け回りたい衝動を抑えられなかったのです』

ツバサの言葉が変になった。必死の形相で放った言い訳はシシーに共感をもたらしたようだ。” そうだね〜 ” と相槌を打っている。

『今回の戦争は異常だとガルド様から報告を受けています。戦後のことをまったく考えていない、殲滅戦を繰り返しているのです。ツバサさんも聞 ているでしょう？ ライブラリアン 図書員の方たちのおかげで収束の目処は立ちましたが、いまだ戦争は続 ているのですよ？ 敵とみな れて攻撃されたらどうするつもり ですか』

シシーを共感させたツバサのいいわけだが、アルマには通用しなかった。アルマの言い方は、ツバサを優しく諭しているような雰囲気を感じられる。だが、ツバサにとっては違うようだ。アルマの言葉に冷や汗を一つ一つと増やしていた。

「アルマ〜」

『はい、な でしょうか』

途端にツバサの顔が輝いた。ほんとにわかりやすい性格をしている。

「声が聞こえづらくなってきたよ」

「戦場をまたいでいすので、生命片障害クナが起きいるのでしよう。此方からも貴方達の声が聞こづらくなっていますので」

アルマの声が断続的に聞けなくなる。聞こえないわけではないが一瞬一瞬、アルマの声が厚いかべにでも遮られてしまったかのように小さくなるので、聞き取れなくなる。なんとなくだが、声が小さくなる間隔が短くなってきている気がする。図書館と私たちの間に激戦区が入り込んできているのか。

『あ！ 湖見えたー』

との、ツバサの声が聞こえたから、前方に目を凝らしてみた。だが、湖などどこにもない。不思議に思い、本当に見えたのか確認を取ろうと後ろを見た。そこにツバサはいなかった。

ツバサを探して首をきよるきよる動かしていると、視界の端に黒いものが通り過ぎた。首が痛くなるほど見上げて、やっとそれを確認する。予想通り、罈黎の影だった。アルマが説教をしていたあいだ、あなたは何を考えていたのかと聞いてみたい。だが、それなら湖が見えたのも頷ける。実際、青空を映す湖のふちが森の中から顔を出した。

『湖のそばに朽 た建物がある そうです。建物の床に地下 と続く道があり、それが遺跡へ繋がっ いると報告され います』

「わかった」。探してみるよ」

湖に近づいていくとその大きさがはつきりとわかってくる。かなり大きい。ふちを徒歩で一周するだけで三十分と掛かりそうだ。

『シイちゃんたちー。なんか見つけたー？』

「なんにも」

人の手が及んでいないため、湖の周りにはぼうぼうと雑草が繁茂していた。乱立した高木と草むらに阻まれて、思うように探索が進まない。ツバサはどうかと見てみると、罽黎の翼の片方で水面を切っていた。高く舞い上がった水しぶきが太陽の光を屈折させ、短命ながらも虹が湖の上に現れた。

「ツバサちゃん何やってるの？」

『何って、湖の探索だけどー？』

「それが？」

『うん』

まったく躊躇することなく肯定してくれたツバサだった。まさか本当に探索してるつもりになっていたのでと一瞬考えてしまうほど、ツバサの返事には揺らぎがなかった。さっきから湖の同じ場所をぐるぐると回っているだけなのだが。

「アルマさんに」

『申し訳ありません、直ちに探索を再開させていただきます』

自覚はあったようだ。

罽黎が森の中に突っ込んでいった。かなりの速さが出ていたが、器用に雑木の間を抜けている。いったいアルマはツバサに何をしたのか知りたいところだ。

「もう少し詳しい情報が欲しかったよ」
『すません。こちのミスですね』

結局、建物を見つげるために湖を三週ほどまわることになった。

見つけた建物は土台の柱が少し地面から顔を出しているのみで、それすらも木の根と蔓植物にびっしりと覆われ、傍目にはただ木々が密集しているだけにしか見えない。ツバサが運よく地下への扉の真上を通過したときに、気持ち正方形に雑草が生えていなかったため見つけることが出来た。たしかに、詳しい情報が欲しいところだったと捜索班を責める気持ちも多少はあるが、そんなことよりもこんな場所をよく見つけたなと言いたい。

「それにしても、ちっさい入り口だねー。陳腐な魔術書しかなさそうな雰囲気だよ」

『報告ではかり大きいそうすよ』

「たぶん、裏口か緊急時の避難通路なんじゃないかな」

細身の人間がぎりぎり二人並んで通れるぐらいの正方形の扉だ。非常用の脱出口だとしたら頷ける。

「光天は通れないから、罫黎こはくだけ持っていこ」

「オツケー」

そういつてなにやら行動し始める二人だが、ちよっと待った。

「罫黎だつて通れないでしょ」

光天に比べたら細身の罫黎だが、罫黎を罫黎たらしめている両の翼がどう見ても引っかかる。そう考えていたのだが、ツバサの顔を

見るに違つようだ。

「見ててー」

えいという掛け声とともに片方の羽が座席を覆い隠すように畳まれた。もう一方も畳まれると確かに入り口を通れるくらいに細くなっていた。

「これなら通れるでしょ？」

「うん。でもそれなら光天だつていけるんじゃないの？」

「それがそうとも言えないんだよね」

シシーが光天でも実践してくれるが、畳まれた光天は畳まれる前とほとんど変わっていないかった。

「光天は制御装置が凄く大きいからね。どうがんばってもこれ以上は小さくならないの」

シシーがぼんぼんと光天をたたく。

「さ、とりあえず扉を開けよう」

雨風にさらされてぼろぼろになっていた扉だったが、明らかに人工的に穿たれたと思われる楕円形の穴が四箇所あった。その穴の一つに手をかけた状態でツバサが言った。

はめ込み式の扉を三人で力を合わせて持ち上げる。が、あまりにも重いので、少し上に持ち上げた後は横にずらしていった。

かなり深い。酸化の進んだ鉄梯子が下へ下へと伸びていて、闇の中へと消えている。

隣で、膝をつけて穴の中をのぞいていたシシーがすっと立ち上が

り光天に近づくと、取っ手についているボタンを押した。

「それじゃあ、行ってくるよ〜」

” いったらっしやい” と光天から聞こえてきた。それを聞いたシシーはボタンから手を離れた。

「二番乗り〜」

そう言っつて、シシーが闇の中に消えていく。かつんかつんと鉄はしごをたたく音だけが響いてきた。少しの間入るのをためらっていると、下から声が聞こえてきた。危険がないか調べてくれたのかな？ とても深くまで続いているように見えたのだが、シシーが降りていた時間を考えるとそこまで深くなかったようだ。

果して、三十秒もかからずに地面に足が着く。遺跡へと続く道には闇と冷気が漂っていた。シシーの手のひらに浮かぶ拳大の炎がそれらと対抗しているが、どうにも押されきみだ。興味本位で壁に触れてみる。つんと刺すような冷たさが手のひらに伝わってきた。人の手で整えられた石壁だ。石と石の隙間から水が流れ出し、手に伝わってきていた。

頭上からツバサの掛け声が聞こえてきたと思ったときには、ツバサはすぐ横にいて、地面ではじけた水流が足にかかった。冷たい。少し離れたところに立っていたシシーはというと、跳ね上がった飛沫を顔面で受け止めていた。

「あ、ごめん」

「私は大丈夫だよ」

「ぼくもへいき〜。いつもみたいに鼻に水が入ったわけじゃないし。あ、この水おいしい」

図書館の洗面台で、ガルドが眠っているシシーの顔面に水を浴びせかけている場面を初めて目撃したときは、何かとかなり驚いたのだが、いったいいつからその場面が日常に変わったのか。水が壁を勢いよく伝い落ちるところを見つけて、そこから水をすくって飲んで二人を見ながら、アイリスは思った。

「それにしても暗いなー。シィちゃんもっと明るいのを」

用意した水筒の中身を湧き水と入れ替えていると、隣で口回りを手の甲で拭ったツバサが言う。

「爆発してもいいなら、いいよ」

「いや、だめだからね」

シシーなら本当にやりかねない。

「私がやるから。とりあえずその右手を下ろして」

「お、二ヶ月に及ぶ引きこもり生活の成果が遂に見れるんだね」

言い方とは裏腹に、興味津々といった感じに私を見るツバサ。確かに、図書エリアと研究エリアを行ったりきたりする生活だったが、よく買い物に行ったり、ガルドに訓練をつけてもらったりしていたことはツバサが一番よく知っているはずだ。買い物や訓練に半ば強制的に連れて行こうとしたのはツバサなのだから。……ああ、だからか。

まだかまだかと私の顔を伺う二人を見てみると、小さいときに憧れていた姉というものが弟や妹に抱く気持ちを少し理解出来た気がした。

これ以上待たせるのは悪いと思い、覚えたばかりの魔術を一つ、言葉に乗せる。

— 舞い踊るは明明の蝶《to fos myga se to
ouranos》

— 散り別るは冥冥の闇《aftos oidyo fotei
noftero》

— 飄々彷徨う胡蝶の気まぐれは《kai fotizomas
skoteinos tropo》

— しかし、一時を照らす道しるべ《to einai klisis
”Fanos Petalouda”》

精霊術式

”ちようちんあげは提灯揚羽”

そういえば二人に言い忘れたなと思ったときには、掲げた右手に
発現した光が二人の網膜を鋭く貫いていた。

— 一匹の蝶が手のひらで翅を休めている。一枚で人の頭ほどもある
その翅を煌々（こうこう）と輝かせて。だが、それを眺めているの
は薄目を開けたアイリスのみで、シシーとツバサは目を押さえ悶
絶していた。

「それがアイリスが新しく覚えたやつ？」

目をしょぼしょぼさせたシシーが言った。そうだと返事をするど、
”すごいね〜”と返してくる。

「でもちよっと眩し過ぎでしょ」

ツバサは罈黎の陰に隠れていた。が、罈黎に反射する光が眩しくてよく見えない。ツバサの言うとおり、これでは探索に支障が出るだけだ。

右手に止まる蝶に左手を被せる。両手からはみ出していた翅は、両手がぴったりと閉じられるとふっと風に散らされるように消えた。手に伝わる光とぬくもりを感じながら、念じる。次に手を開いた時、宙に六匹の蝶が放たれた。

こんな所にも生き物がいるのか。傾いだ道を歩いている私たちの背後から、水の流れが追い越し、抜けていく。流れの淀んだ所には、一つの世界があった。閉鎖された食物連鎖に則った完結した世界だ。そこに住むものにとって私たちは侵略者であり、災いそのものだろう。

ちらりと後ろを見る。私の足から逃れた世界は、ツバサの足に無邪気に蹂躪されていた。そのときに跳ね上げた水滴が地面すれすれを飛んでいた蝶の一匹に当たる。途端、蝶の動きが乱れた。私が与えた条件に従って、ツバサの足元に落ち着いていた蝶だが、狂ったように飛び回るとツバサの背後へと移動した。

その蝶が罈黎の姿を鮮明に映し出す。呼吸をするように上下に揺れている様はどこか生き物じみた感じがして、しかし、ツバサの後ろを乱れずついていくさまに生氣は感じられない。

そういえば、魔術書の解らないところを質問しようとアルマのところを尋ねたときに、クロノパイディア遺跡で疑問に思ったことを一緒に聞いてみたことがあった。目測だが、人間を50メートルほ

ど上空へ飛ばすだけで生命片^{マナ}が枯渇するという擬似飛行術式をその身に組み込まれた魔道二輪に乗って、数十キロの距離を飛んで帰ったことをだ。

精霊術式の理論が基盤に採用されているのだとアルマは言っていた。近くにいた研究者たちがぞろぞろと集まってきて、話は即座に私の理解可能域を突破してしまったのだが……。とりあえず、発現に必要な生命片^{マナ}さえ与えれば顕現した魔術が空中の種々雑多な生命片^{マナ}を吸収して勝手に自分を維持するのだと、話が下火になった頃にアルマが言っていた。

消費を供給で上回るために、魔道二輪には重量制限をつけなくてはいけなくなつたと愚痴も聞こえてきた。愚痴よりも、そのときの研究者たちの落ち込みようがより印象に残っている。一途にその道を極めようとするものたちに始めて恐怖を感じたのだ。

「とまつて〜」

後ろから服を引っ張られて、思考が今に戻される。目の前に道はなかった。もつと言えば、私は道の上になかった。

内臓が浮く感覚、わきの下に腕を入れ支えてくれた二人のおかげで落下することはなかったが、見ると5メートルほど下のほうに床が見える。心臓が早鐘を打つ。

「アイちゃん、早まつちゃだめだ」

冗談にも聞こえる言葉に、返事をする余裕などもっていなかった。

それは一つの業^{いづ}。

魂を失い動かなくなったもの
それを死体というならば
死してなお、活動するものは
いったい何というのだろう

反魂され蘇生されたもの
それが天使悪魔の業と畏怖されるならば
魂なくして彷徨うこれは
いったい誰の業だろう

都は変わらずそこにある。たとえそれが遠目に見た世界だからだとしても、都はそこに存在している。変わったことといえば、色、
だろうか。

白と黒に似た茶。二色が都のほとんどを支配していた。いや、強奪といってもいいかもしれない。現に、今もなおゆっくりとだが、
二色は都の外へと広がり続けているのだから。

カランコロンと木の鈴を転がしたような音が、色とともに移動する。仮に人間が音の正体を見ることが出来たのなら、それは悪魔と口をそろえて言うかもしれない。残念ながら、この時において、それを口に出せる人間などひとりもない。

人間、動物、植物、道端に転がる石までもが全て……生きてなどいないのだから。

都を覆う黒茶色はあらゆる動植物の成れの果て。

異常なほどに黒く枯れきった花畑の中に一輪の花があった。桃色の花が咲いていた。わずかにも動かず、それは隠れているようだった。白い霞がその花の姿を隠した。次に現れたとき、花は周りに同化していた。

都を覆う白色は建造物の壁の色……そして、都の生を奪った元凶。月光の下、命を根こそぎ奪われた都は、それでもなお美しかった。

それはきつと壺だった

中身を根こそぎ奪われて

必要ないからと捨てられる

価値など微塵もない一点物の壺だった

それは人の形をしていた

……『黒』は笑い続けていた。

その景色を見た瞬間、やっと落ち着いてきていた心臓が今までとは違う意味ではねた。

巨大な円形の部屋には今私たちの立つ内周の石畳以外は水が満たされている。天井高くから落ちてくる水の流れが水面に当たり、轟々と音を叩きつけてくる。

だが、私が驚いたのは、建物のあちこちで淡い光を放つ灯りに照らされてか、部屋の中に微かだが沢山の虹が浮かんでいたからだった。どう考えても虹が出るには暗すぎる。提灯揚羽で先を照らさなければ螺旋階段のある縦穴に足を踏み外しそうになる程度の暗さで虹は出ないだろう。が、現に虹が見えるので、魔術の類だと思っておく。ここは夜に浮かぶ虹の中のような錯覚を起こさせる場所だった。

背後で石を穿った様な音がし、滝の轟音に負けないほどの金属音が続く。鐺黎が地に墜ちた音だった。

「ああー、だめだこりゃ。無効化されたっばい」

ツバサは石畳に転がっている鐺黎の尾を引つ張って、扉の外へと引きずっていく。遺跡と外を区切る扉を抜けると、地に伏せていたそれは何事もなかったように浮かび上がった。

「飛行術式だけが？」

戻ってきたツバサに言う。私の目の前を一匹の蝶が横切った。

「そうだよ。毎回こうなるんだよね。そのたびにアルマが中身をいじってるらしいんだけど、今のところ成果は見られないね」

つまり、遺跡は自らの足で攻略しろということらしい。地形を無視して攻略できるほど遺跡は甘くないようだ。アイリスは考えて、当たり前かと思ひ直す。飛べるなら途端にクロノパイディアの仕掛けが意味のないものになってしまうから。シシーが死神と呼んだあのおびただしい何かの襲撃から必死に逃げたことが回避可能だったなんてことにはなつて欲しくない。もし襲われる前だったら全力で回避したいことではあるのだが、一度襲われている身としてはそれ

はなんか悔しい。

〔ネロジエフィーラ遺跡〕

古代ゲルシア語で「水の架け橋」を意味する。紀元前7588年に建造された水上神殿。四大属性のうち水の一つ柱としてただ水そのものを祭っている。三つの円柱を横に並べた型をした建物は上方で地盤に接続され、地底湖を見下ろすように存在する。

シシーが読んでいた本の内容を掻い摘んで教えてくれる。滝の勢いに跳ねたしずくが床をかなり濡らしているのに、まったく気にせず背負っていた本を地べたに広げていた。

不思議なことにシシーの持ち歩いている本には名前がない。一般の本とは明らかに違う細かく厳粛な雰囲気を持った装飾がなされているのに、題字が書かれるであろう場所にはぽっかりと空白があるだけで、それがなんとも不釣合いに感じる。シシー本人もなぜ名前がないのかは知らず、ただ遺跡や魔術書などの古代の遺物の歴史を自動的に収集する便利な本と認識していた。それと結界術式の魔道書とも。

ふと、相互に関係のなさそうなこの二つの機能がなぜ一つの本に詰め込まれているのかとの疑問が頭をよぎるが、すぐに意識のそこに沈んでいった。考えたところで正解に辿り着ける気がしない。

シシーが本を閉じた。表紙を軽く払ってから背負う。それだけで本の表紙は乾いていた。

「時系統じゃなかったか」

シシーが落ち込んだように言う。人事ではないのにその落ち込みようがあまりにも子供のそれで、口の端から笑みがこぼれた。それ

をシシーに見られる。

「なに〜?」

「ううん、なんでもない。ありがとう、シシー」

頭上に疑問符でも浮かべているようにシシーは首を傾げる。その様子がまたおかしくて、私は笑い声をこぼした。

「それじゃあ、各自怪しいところを探そうか」

ツバサがオーと意気込んで、円形の部屋の内周を歩いていく。ツバサとは反対方向に私は歩を進めた。道はすぐに見つかった。曲線を描いた壁がそこだけ縦にすっぱり裂けている。提灯揚羽を一匹その先に放ってみた。何も起こらない。中をのぞいてみると今までと同じ円形だがそこまで広くない部屋だった。しかし、中央に巻貝のような形をしたものが淡い光を放っている。

大声をあげてシシーたちに新しい道を見つけたことを伝えようと、そのまま部屋の中へと進んでいく。さつきからどうも気になるのだ。少し視点を変えるだけで赤、青、黄、緑、様々な色がその灯りから溢れ出す。近くに寄ってみてわかったが、巻貝の形をしたものはまったく濁りのない透明な石で出来ていた。それが中心から発せられる光を様々な方向に拡散させているようだ。手を近づけると、手のひらが虹色に染まった。それだけではない、自分の体を見下ろして見ると、七つの色が揺ら揺らとゆれていた。

これが虹を生み出す仕掛けなのかと貝殻を指先でなざると、不意に天井が明るくなった。いや、天井が消えた。その上にあつたはずの大地もろとも。

ふと、自分が薄い膜に包まれているのに気がついた。シシーの使用結果だ。背後に気配を感じて振り返ると、部屋の入り口にシシーとツバサが立っていた。それぞれ本と短剣を片手に戦闘体勢を崩さ

ないまま私をじっと見ている。その視線が私の指先にへと移っていくのが分かった。そこで止まる。そして、私の目を見つめなおす。無言なのがなんとなく嫌だ。

「……ごめんなさい」

天井と入れ替わりに現れた蒼穹と沢山の虹の橋の下、私はとりあえず謝ることにした。

「探索は初めてなんだから、気にしない気にしない」

言われるまで忘れていた。仕掛け一つで自分の身が危険にさらされる可能性があることを。自分の身で体験したことがあるというのに。

どうにも、クロノパイディア遺跡の中での出来事の記憶が不鮮明になることがある。まあ、二ヶ月も経過すれば当たり前前の気もするが。

ありがとうといって意識を滝へと向ける。虹は、部屋の中央で滝が巻き上げた霧に移っているようだ。輝きを増した虹が滝をぐるりと囲むようにして、私の目を楽しませてくれる。さらに面白いのは滝そのものだ。もともと天井に開いた穴から現れていたのだが、天井が空に変わったときから、中空に突然現れるようになっていた。空中に水が湧いているような感じだ。

空が出たおかげでより細かく部屋を探索することが出来たのだが、これといった発見は無かった。場所を移す。

仕掛けのあった部屋を素通りし、反対側へ。

私が仕掛けに触れた部屋には二つの出入り口があった。一つは滝のある部屋につながり、その真反対、もう一つの出入り口は今私たちがいる場所に繋がっていた。上から見ると、円が三つ、直線状に並んでいる感じだ。

大人が二人両手を広げて並ぶよりもまだ幅広い内周の床から顔を出して、見下ろすと頭の後ろがくらくらしてきた。じっと見ているだけで吸い込まれていくような螺旋の階段がしん（・・・）と立っている。私たちは吹き抜けになった塔のてっぺんにいた。遺跡の設計者は高いところが好きらしい。いや、深いところか。

シルクの布がさらりと流れ落ちていくかのように薄く延ばされた水が何枚も何枚も重なり、なびき、塔の中央に落ちていく。

とりあえず降りてみようかということ、長い階段を下り始めた。広大なこの遺跡では階段の一段一段もまた広い。内周をぐるりと一周すると左手に扉があった。ちょうど一階分降りてきたことになる。扉を開けた先にも空の光は満ちていた。位置から言えば、真上は巻貝の灯りがあった部屋のはずだから、この空は偽物ということになる。そもそも遺跡から見える空全てが偽物なのだが。

建物の中に空を映す魔術もこれで三回目ということで、驚くことはなかった。それよりも部屋に入って二歩もしいところで足場が途切れてることのほうが、さっき落ちかけたこともあって、私の体をこわばらせてくれる。

足場の途切れた空間を挟んで目の先にもう一つ扉があるのだが、どんなにがんばっても届きそうにない。

「シイちゃん、あれ。階段じゃない？」

「……ほんとだ」

ツバサの指差す先を見ると確かにあった。向き合った二つの扉が下に四階層続いており、さらにその一つ下の階に扉と一緒に螺旋階

段、それに続く足場があった。

「あそこが進むべき道かな？」

「分からないけど、とりあえずの目的地にはなるね。」

話し合う二人の後ろで、ほかに何かないかと辺りを見回して見るが、私には見つけることが出来なかった。結局、ここには他にないだろうとシシーが言って、私たちは部屋を後にした。

それから三回、階段を下って扉を開いてを繰り返して四つ目の扉がある階層。一面石畳で頭上から枝垂^{した}れる水のヴェールは石と石の間に空けられた小さな隙間に寸分違わず吸い込まれていく。

私たちはもう一つ下の階に行きたいのだが、螺旋階段はここで終わっていた。その代わりというわけではないだろうが、壁の三分の一ほどが無く、大きな広場へと続いていた。

空を眺め、我を取れ

広場の中心には石碑が一つあった。書かれていたのはこの一言。
空を眺める？ 我というのは保管されている魔術書だろうか。

「ここが入り口だったよ。」

石碑の前でシシーが私立ち止まっている間、ずんずんとさらに奥へと進んでいったツバサが戻ってきた。ツバサのいる入り口付近の天井から肉食動物の歯を思わせる石柱が飛び出している。絵本に出

てくる龍の上あごのようだ。

「この先で地上に繋がってた。仕掛けはなし。ただ長い通路があっただけ」

ツバサが親指で龍の口の外を指す。その仕草と言葉に思考を乱された私と違い、シシーはさっきから碑文を見たまま動かない。

「どう？　なんか分かった？」

ツバサがシシーの肩をたたく。

「なんとも言えないね。アイリスはどう？」

言われて石碑に目を戻す。

空を眨め、我を取れ

眨める……そういえば、中央の塔は巻貝の部屋の床が空そらになっていた。

「真ん中の塔の天井に空があったでしょ？　巻貝の仕掛けがあったところのした。あれを螺旋階段に繋がる足場まで落とすっていうのは？」

”眨め”と”落とす”を掛けるのかも。

シシーがまた思考し始める。ツバサがまじめ顔で拍手をするものだから、やめてと言うのも気が引けて、気恥ずかしい思いをしながらシシーを待つ。……というほどでもなく、すぐにシシーは戻ってきた。

「……うん。今はその考えで行こうか」

今は、か。シシーにとっては安直な考えだったのだろう。それでも、これで行くということはまだ判断する材料が足りないというところか。

方針が決まったのはいいのだが、さて、いったい何をすればいいんだろう。

「それで？ 次はどうするの？」

ツバサがいい具合に質問してくれた。

「アイリスの考えで行くとさ、あの仕掛けが怪しいと思わない？」

あの仕掛けとは私が触れた巻貝の灯りの事だろう。

つまり。戻れということか。

その通りというように、シシーは螺旋階段へと一直線だ。行こうとツバサに肩をたたかれ私も階段に向かう。きつと上に着く頃にはバテバテなんだろうなと思いつつも、一方では次はどんな驚きがあるのだろうかと期待している私が出た。

「着いたね。それじゃあ、……少し休憩しようか」

声が出ない。口を開けば乱れた吐息が肺から押し出されるだけだ。上下する肩をさらに揺らして頭を振る。ツバサは分かるとして、なぜ普段図書室で本の虫をしているシシーが汗一つかかないのか、謎だ。

力の入らない足で無理やり立っている私だが、この世界に来た直後と比べたら大きく進歩したと思う。もしかしたらクロノパイデアよりも長い階段を一気に上れたのだから。

ガルドのきつい訓練は私の気にしていた足腰の線を引き締めてくれただけではなかった。……よかった。本当に容赦が無かったのだ。^{ウイネ}俺たちが三十周する間に、アイリスは五周な”と始まった図書館外周走。周回数のおまりの差に燃え上がった私の闘争心は、開始直後に消え去った二人の背中に火種ごと粉碎され、そもそも二周すら私の体力は持たなかった。

四周目の中ほど、抜き去り際にガルドからこれが三十周目だと言われた時、その言葉は白くぼやけた私の頭の中でぐるぐる回っているだけだったのに、次にガルドが発した言葉との相乗効果で私は思考を無理やり引きずり出された。

そして始まる地獄走。八回追い越されるたびに一周追加だというガルドに二回目の追加を言い渡されたときだったか、追い詰められた私は言った。自分は姫だからなんたらかんたら……たぶん思い出すのも恥ずかしい事を言っていた気がする。この曖昧な記憶は曖昧なまましまっておくことにしよう。とりあえず、姫ということをお口実にして逃げようとしたんだ。

そんな私の言葉に振り返りもせずガルドが言った。”だが、今の

お前は俺たちの家族だろ？”と。そんなこと言われたらがんばるしかないじゃないか。くそぞう。

息もだいが整ってきた。腰に取り付けられた水筒を手に取り、水を口に含む。水筒を戻した後、腰回りに手を当て細くなったウエストを確認しようとして、動きを止めた。ツバサが見ていたのだ。ニヤニヤとした笑みを顔に貼り付けて。

「稽古の事思い出してた？」

ニヤニヤ顔のツバサは心でも読んでいるかのように凶星を言い当てる。今回は別に知られて困ることを考えていたわけではなかった。素直に頷いた。

「ぼくも始めはきつかったな。師匠のしごき。そのくせ精神的に追い詰められる前に声を掛けてくれるんだよ。一言二言ね。でも、それを聞くとなぜかがんばれるんだよね。それに、なんだかんだで体を壊すようなことはさせないんだ」

それは分かる。始めの方こそ筋肉痛で動けなくなることが多々あったが、しばらく続けていたらそれも収まった。むしろ今は体の調子がいいくらいだ。

「師匠はぼくの憧れなんだ」

ツバサちゃん、それは憧れを抱く少女じゃなくて、恋する乙女の仕草だよ。

胸に手を当て視線を空に向けている。頬すら軽く染めて。どこか遠くを見ていたツバサが私の顔を見て、にやりと笑った。

「ぼくはね、師匠に救われたんだよ」

それだけ言っつて、離れていく。追求はさせてもらえなそうだ。その後姿を見つめる私の息はもうすっかり整っていた。

「いける〜?」

「うん、もう大丈夫」

「シシーが巻貝の仕掛けに触れた。……何も起こらない。そのまましばらく、ぺたりぺたりと観察を続けていたが、仕掛けをぐるりと一周すると一息はいてそれから離れた。」

「属性対応がスイッチの可能性が高いから、魔術使うよ」

「魔術なら私がやるよ」

属性対応というのがよく分からないが、基本の四属性、火、水、風、土なら得て不得手はあれど全て使える。こういふときこそ私の二ヶ月を役に立たせなければ。

「そう? それじゃあお願いするよ。水属性の魔術をこれに当ててみて。別に一単語呪文でも対応属性なら仕掛けが作動するから、別に難しいのにしなくていいからね」

水属性といわれて思い浮かべたのは、クロノパイディアでシシーが見せてくれた水の^{Ne. r. o.}一単語。誰でも理解できるゆえに、解釈の多様性が著しいこの魔術は、人によって発動の仕方が変わってくる。

指先を巻貝の灯りに向け、狙いを定める。

「^{Ne. r. o.}水よあれ」

拳大の水の塊が床に落ちて弾けたような音を立てて、空中に水球が現れた。見る見る体積を増し仕掛けをすっぽりと覆うと、事切れたかのように落下し床に水溜りを作った。

……なぜだろう？ それは図書館のときとは違った。

「発動に使うはずだった生命片^{マナ}を仕掛けが吸ったんだよ。発現はするけど発動はしないよ」

私の眩きを聞き取ったのかツバサが教えてくれる。と、左手首が急に冷たくなった。見ると手首に水がまとわりついている。すぐにそれは腕輪の形に落ち着いた。冷たさも無くなる。

もう少しよく見ようと左手を目線の高さまで持ち上げようとすると、胸の高さでいきなり腕輪が弾けた。飛び散るはずの水滴が一気に収束して目の前でいくつかの数字を形作った。

2 0 2 2 2 3 2 4

自分の手の届く範囲に浮かぶ四つの数字。空にその範囲を超えた先に、2 3、2 4という数字が円に囲まれて、あった。

「属性対応であってたね。ふむ……ちょっと2 0と2 2を押ししてみて」

もう解けたのだろうか。あまりの思考の早さに舌を巻く思いだ。私なんてまだ数字を読んでいたところだというのに。

シシーに言われるままに、2 0と2 2に指を当ててみる。丸で囲まれた。そのまま様子を見ていると一呼吸の間を空けて、二つの数

字が弾けた。はじけ方も渦を巻くようでいちいち綺麗だ。

床が不安定に揺れる。視線が下がっていく。しばらくすると、床はちようど一階分下降した所で動きを止めた。確認のため、下降途中に下ろした左腕を胸元まで上げた。手前にある四つの数字に変わりは無かったが、奥で丸く囲まれていた数字が23、24から20、22へと変わっていた。

「うん、あつてた。どうする？ 解く？」

「解く！」

我ながら意固地に返事をした気がする。

「わかった。がんばってね。あ、24だけか20、23、24を同時に選ぶっていうのはしないでね。もしかしたら死ぬから」

軽い口調で言うことだろうか。とりあえず数字には触れないことにしよう。

まずは円に囲まれているほうを考えてみる。触ることが出来ず、つまり見ることしか出来ないこれはたぶん今私のいる状況を表すものだろう。

「ツバサ、そっちの扉開けてみて」

「おっけー」

だとすると、いったい何を表すか……階層が一番しっくりくる。回数だったり、何階分降りたか昇ったかだったら選んだ数字と円の中の数字が違ってくるはずだ。

「シイちゃん、入り口が水に沈んでる！」

「水位が上がったんだね。たぶん一階分。こっちの塔は水位が一

階下がったよ」

確か今私たちがいる階は螺旋階段へ繋がる階から見て……六階か。20、22が六階を表して、23、24が七階を表すでしょう。

問題は四つの数字がどんな法則で並んでいるかだが、まったく分からない。共通しているのは全ての数字が二十代だということなのだが、

「わぁー、シイちゃん見て見て。目の前で手振ってるのに気付きもしない。すごい集中力。シイちゃんみたいだよ」

「ほんとだね」

「はっ！ 今ならアイちゃんのちよつと残念なお胸様をこの手におさめる事が出来る」

「残念かなあ。綺麗な線だと思うけど。それに残念具合ならツバサの方が上じゃない？ ペったんこだし」

「……うう。普段歯に衣を着せないシイちゃんだから余計に痛い……シイちゃんのバカヤロ」

「……だめだ。ぜんぜん分からない。21が抜けてるのは何でなんだ。」

「21が抜けてるのは、連続性がないという証明とパズルの難易度を上げるためだね。別に20、21、22でも同じように解けるよ。それもすごく簡単に。」

あと、パズルを解くときは思考を一方方向に絞っちゃだめだからね。たとえば二つの数字が横に二つ並んでたとしても、それを二桁の数字と見るのは安直だよ」

なるほど、20ではなくて2と0という可能性もあるのか。

「なるほどって。もうこれ似てるとかじゃないよ、そのものだ。シイちゃん二号だよ、この子」

左側は2で共通しているから、2に意味を持たせた状態で0234で区別するには、左右を四則計算ではいまいちぱつとしない。その方法だと左側を2でそろえる必要がなくなってしまふ。足し算なら31で22の代用が可能になってしまふから。

「シイちゃん、ぼくちよつと外出てていい？」

「いいよ。いつてらっしやくい」

……2の累乗ならどうだろうか。全ての整数は2を累乗した数の合計で表せるから、20、21、22なら簡単に1〜7階を表せる。一階なら—20(1)、三階なら—20(1)+—21(2)、七階なら—20(1)+—21(2)+—22(4)とすればいいだけだ。

「うん？　なんかみつけたの？　まだ触らないでね」

でもこれだと—20(1)、—22(4)で五階になるのか。それに、—23(8)、—24(16)にいたっては二十四階だ。

ん？　24をさらに左右に分けて足すと6になって7の1足らずだ。……ああそうか、これでいいのか。

今私たちのいる階は入り口からみて五階だ。

「解けた！　……のかな？　これだと一階より下の階にいけない」「そこまだ分かったんなら、たぶんあつてるね。ツバサが新しい仕掛けを見つけたみたいだから行く」

そういつて、シシーは私の手をとり歩き出した。

先の部屋からは滝に隠れて見えないところに、ツバサは居た。壁をくりぬいて作ったような台座に中の塔にあったものと同じような仕掛けが置かれていた。

シシーに促され、水の一単語をそれに当ててみる。魔術はまたも生命片^{マナ}を吸われ、発動にはいたらなかったが、代わりに仕掛けが発動した。

貝殻から滴っていた水滴の一部が左手の腕輪に吸い込まれた。

腕輪を確認してみると、四つの数字に並んで小さな水玉が浮かんでいた。触って見ても何の反応も示さないが、それについてはひとまず保留との事。

「アイリス、この場所からでも下の階に行けるか試してみてください」

中の塔に戻らなくても階層の操作が出来るかどうか調べたいとシシーは言った。

言われた通り、私は「22(4)」を押す。滝の轟音に負けず、腹のそこに響くような重低音が擦れあう床と壁から聞こえてくる。それは中の塔以外でも階層を操作できるという証明だった。

そのまま四階、三階、二階と一つずつ下へと降りていく。

どの階も円形の部屋に同じ仕掛けが施されていた。違うのは高さが増すにつれより厚みを増していく音の壁と、舞い上がったきりに映る虹の数だけだ。見上げると水の龍が虹を纏って天へと昇っている。その景色は幻想的で綺麗なのだが、あまりにも周りがうるさすぎて楽しむ余裕がない。

それでも、一階の仕掛けを作動させたとき、腕輪には四つの数字のほかに新しく0という数字が現れた。

シシーが何かを言っているのだが、聞き取ることが出来ない。ツバサと一緒に首を傾げるのみだ。

口を動かすのをやめたシシーは私とツバサの手を引いて、中の塔へと繋がる扉の前へと引つ張っていった。

扉を開いて一歩踏み出したシシーは、すぐにその足を止めた。そこにあるはずの床がなかった。

少し思考する仕草を見せたシシーは、私の左手首を指し示し、指先で0を形作る。押せということらしい。

左手を持ち上げる。最後の確認にとシシーを見ると、相槌を返される。そのまま持ち上げた左手で0に触れた。

小さな変化は一瞬。音が小さくなったかと思つた直後、私は無の世界にでも放り込まれた心地がした。轟音と押し合いをしていた聴覚が、いきなり相手が消えて前のめりに倒れてしまったのではないかと思つた。実際、そんなことはないことが耳を澄ませば分かつてくる。どこかではちゃんと水が流れているのだ。ただその音が私が集中しないと聞き取れないだけで。

私たちの目の前で、あれほどまでに存在感を放っていた滝が、その姿を消していた。上を仰いでも龍はいない。丸く切り取られた空には空中で水が湧くという不思議な光景はなかった。

「ぼくの耳がおかしくなつたのかと思つたよ」

「私も。それにしても何で床がないんだろう」

なぜかツバサたちが顔を見合わせ笑い始めた。可笑しな事を言つたつもりはないのだが。

「さつき僕達が居る滝の塔の水位を一階分下げたときにねえ、入り口がある螺旋の塔では水位が一階分上がったんだよ。六階から五階へ移動したとき、中の塔の床は滝の塔の水の高さと同じだった。でも今ははるか上空にある。つまりねえ、中の塔の床の高さは両側の塔の高いほうの水位にあつてるんだと思うよ」

中の塔の床は下から見ると空になっている。つまり、床のある階より上にあるものは全て空に隠されてしまっわけだが、確かに今空の下には扉が縦に七段並んでいる。

それにしても、シシーの言うさつきとは私がパズルを解いているときのことだろう。

「……ぜんぜん気付かなかった。そういえばいつの間にかツバサちやんもいなくなってた」

「もしあれで気付いてたんだったら、ぼくは激しく傷つくよ。目の前で手振ってるのにまったくの無反応なんだもん」

「ツバサがアイリスの胸揉もうとしたときも、反応しなかったよね」

私は反射的に手で胸を隠していた。左手を使ったため、目の前に数字が展開されるが、それも今はツバサから私を守ってくれる壁のようで心強い。

「本当にやろうとしてたわけじゃない！ アイちゃんに嫌われるよ。うなことなんてしないよ。……う、それよりシシー、道出来たのにいかないの？」

それは苦しい誘導だった。しかし、シシーには効果的で……既に意識は床に向かっていている。

天から落ちてくる滝の水を通すため、金属が網目状に張り巡らされた床には人が一人通れるほどの扉がついていた。

「中の塔への扉が一つとレバーが一つ、後は一面水浸しだね」

梯子を下った先は薄暗いホールのような場所だった。扉と梯子、

そしてレバーを一直線に足場が繋ぎ、それ以外の場所は水に満たされている。しんと静まり返ったこの伽藍に遠くから聞こえてくる水の音がまるで寝息のようだ。

レバーは取っ手のような形をしていた。上から下に動かせるようだが、あまりにでかい。背伸びをしようと手が届く。

何千という年月を過ごしてきたはずだというのに、取っ手は軽く体重をかけただけで、がたんと下へ動いた。

遺跡全体に劣化防止の術式が刻まれてるのだろう。この遺跡にはクロノパイディア遺跡のような風化や劣化は見られなかった。

と、水面が異様に乱れホール全体が揺れ始めた。揺れは歩くのを恐怖するほどにまで増大し、そして消えた。

ホールの壁が等間隔に切れ、そこから水が流れ落ちていた。

「これで進めるね」

私にも分かった。これでは一24(7)を押せばこの塔に溜まっていくはずの水は全て零れ落ちて、螺旋の塔の水位だけが下がっていく。

予想通りに床は降りてきて、私たちは螺旋階段へと繋がる階にいる。階段を下りる前にと開けたもう一つの扉の先は数多の本の保管庫となっていた。仕掛けはなく、保管されている本は跡で回収することにして、私たちは螺旋階段を下る。すぐに両開きの扉が見えてきた。

大きな扉だ。見たことのない材質で出来たそれは向こう側から抜けてくる光に、澄んだ青色を乗せている。

流れる水を彷彿とさせる装飾のせいで中の様子は分からないが、目線の高さに一箇所だけ、そこを流れるのを嫌うかのように流線型の装飾が左右に分かたれたところがあった。それこそ、『空を駆け、我を取れ』という言葉が刻まれたところだけを嫌うかのように。

それがなぜか私の不安を煽る。何か警告を発しているように見えるのだ。

その思いは扉を開くとさらに強まった。

水晶に囲まれた部屋だ。床以外の全てを水晶が覆っている。天井も例外ではなく、ここに空はない。

隣でツバサがはしゃいでいるのは、そんな部屋の中心に一冊の本があつたからだ。

水晶の台座に凜と鎮座し、澄ましているのは”ネロジェエフィーラ水の架け橋”。遺跡が生涯をかけて守ってきた一冊の原書を前にして、喜びや好奇心より先に不安が私の頭をもたげた。それはきつと、さっきから視界の端に静かに佇んでいるシシーのせいだ。

シシーがツバサと同じように喜んでいたらならば、私は頭に浮かんだ違和感を疑問へと転換しなかつた。

なぜ今になって入り口の石碑と同じ事を伝えてくるのか。

またパズルを解かなければいけないのかと思つたが、部屋にはなんの捻りも無く目的の魔術書が置かれているのだ。怪しいことこの上ない。

「シシー」

「うん？ あ、アイリスも変だと思つた？」

表情でも読んだのか。聞かれて、頷く。やはりこの部屋は何かおかしいようだ。魔術書も罫にしか見えなくなった。

シシーがツバサを呼んだ。ツバサはいつの間にかはしゃぐのをやめており、今は床と水晶の壁の間に頭一つ分開いた隙間に上半身を突っ込んでいた。

「なに？ それ」

ツバサの手にはくすんだ白をした筒状のものが握られていた。所々にひびが入っている。私の問いかけに、ツバサは握っているものをひらひら振りながら言った。

「骸さんだよ」

ツバサの手の中で、白い筒が音を立てて崩れた。その音はあまりに軽く、あまりに薄い。

はっと意識が浮かんできたのに伴って、私が息をしていないことに気がついた。意識的に肺を動かす。

「シイちゃん、やっぱりこれは罫と見ていいのかな？」

「うん、いいよ。まあ魔道書が本物の可能性もあるから、部屋の外から何か当ててみようか」

ツバサが手についた骨のかけらを払っている。思考が止まっていたのは一瞬だけだったようだ。ツバサにはこの部屋が罫だと分かって気を引き締めたようにでも見えたのかもしれない。

私は部屋から出て行った二人のあとを、あわてて追いかけた。

腰についた袋をガサゴソやっていたシシーは、袋から石ころを取り出した。それを隣で肩を回していたツバサへと手渡した。

「それじゃ、当てるよ。みんな逃げる準備しといてねー」

ツバサの言葉に、私は螺旋階段から魔術書がぎりぎり見える場所へと移動した。

それを目の端で確認し、ツバサは手に持つ石を放り投げた。

放物線を描き魔道書へと吸い込まれていく。石が表紙に触れた瞬間、私には魔術書の輪郭が崩れたように見えた。だが、それ以上の変化を魔術書が見せる前に扉が勢いよく閉まった。誰も触ってなどいない。

ツバサたちが身構えた時点で、私は階段を駆け上り始めた。背後からは何かにひびが入る音と硬いものが折れる音がえも言われぬ恐怖となって背中を後押しする。

ちょうど半周昇ったところで、やっと、シシーたちがまだ扉の前から一步も動いていないことに気がついた。それを見て、自然、足が止まる。もう音は止んでいた。

俯瞰ふかんではシシーたちが目で何かを合図しているようだった。頷いたツバサは両開きの扉を両手で勢いよく押し開けた。

ここからでは何も見えない。背中を這っていた恐怖は既に無くなり、私は来た道を引き返した。

部屋は何一つ変わっていないなかった。魔術書は変わらずそこにあり、水晶に囲まれて澄ましている。

「何か見えた？」

「ぼくには本が透けたように見えたよ」

「私は輪郭が崩れたように見えた」

先の魔術書の変化を報告しあう。シシーは扉が閉まる直前、魔術書の周囲に水属性の生命片マナが散つたのを見たそうだ。

「偽物だったね」

シシーが言った。

「だとすると、本物はどこにあるんだろう?。」

ツバサはシシーを見ている。その顔に、考えてるような雰囲気は見られない。そういうことを考えるのは全てシシーに任せているのだろう。私とツバサに見られながら、シシーは右の人差し指を立てた。

「まだ、行ってない場所があるよね。」

その指先は空を指していた。

なるほど。不安定な足場のうえでアイリスは思った。シシーが滝の塔の地下ホールにあったレバーを元に戻して、排水路を閉じた理由はこれか。

確かにそうだ。床の扉に思考を囚われて気がつかなかったが、滝が消えたことで開かれた道は一つだけではない。塔の壁にさえぎられた円形の空の中心には、さっきまで水の通り道があったじゃないか。

浮き床は塔の最上階である六階に到着したあとまなお上昇し続ける。幻影の空に隠れてるとはいえ、天井はそこに存在しているのだから、なるべく床の中心を陣取る。天井と床に挟まれて死ぬなどという後悔しか残らない終わりを迎えないために必要なことだ。

床と同様、天井の穴にも金網が敷かれている可能性もあるから、左手を胸に掲げてすぐに水位を下げられるようにもしておく。

ここまでやってやっと安心した私の周りでは、シシーとツバサが床に仰向けに寝転がってわいやわいやと雑談してやがる。緊張感や危機感といったものがかけらも窺^{つか}えない。

無性に足で小突きたくなってくるが、我慢だ。私は姫、厳格な態度を持って民の規範であるように。

周りから耳にたこが出来るほど聞かされた言葉を心の中で数回唱えた。

天井の代わりに空があるため、壁は途中で切れている。青空の下に筒を立てて、上を透明な何かで覆う。その中から外を見上げる風景に近いと思う。

つまり、もう頭二つ分の高さしかない壁の終わりはそのまま天井の始まりだ。さすがにと言うべきか、シシーたちも立ち上がり近くによってきた。

左手はそのまますぐに数字を押せる位置を保ち、右手で金網がな
いかを確認する。

伸ばされた右手は何かに触れることなく虚空を切り、ひじから先
が消失した。

驚きに右手を引っ込める。右手は……あつた。ちゃんと指が五本
あり、ちゃんと動かせる。

そのことにほっとする前に、私は暗闇に放り込まれた。

聴覚の次は視覚か。遺跡に施された魔術というのは、どれも一瞬
で世界が変わるから心臓に悪い。右手のこともそうだ。滝の出口を
見て、右手がどうなるのか分かっていたとしても、目の前で右手が
消えるなんていうのは自分に降りかかった世界の変化だ。恐怖以外
の何者でもない。

……はずなのだが、周りからは少年少女の楽しげな声しか聞こえ
ないのだ。どれだけ肝が大きいのかと思う。たとえ表面以外が全て
肝だとしても私は驚かない。

……そんなことを考えているうちに恐怖が綺麗に消えた私も、大
概肝が太いのだろうか……

目が慣れてくるところが少し窪んだ所だという事が分かった。肩
の高さに廊下があつて、階段を数段挟んで浮き床の高さにあつてい
る。

廊下の先には貝の仕掛けと扉が一つずつ、あつた。

感嘆の声は三人のもの。

驚きの悲鳴は私のもの。

面倒くさげなため息はツバサのもので、

いつも通りの間の抜けた声はシシーのもの。

自分の身長の高さがある水晶が大地から鋭く立ち並び、それらに囲まれて遺跡がぼつんと立っている。彼らの見上げる先には雲をまばらに散りばめて空が揺れ、神殿が一つ浮いている。

その中であつて、私たちだけがさかさまだった。

見上げれば水晶の大地があつて、見下ろせば空がある。飛び跳ねればそれだけ大地に近づけて、足を踏み外せば空に向かって墮ちていく。

異界だと思つた。この世界は私たちを嫌悪している。そう思わせる何かがこの幻想にはあつた。

しかし、それでシシーたちが畏縮するはずもなく、けれど扉を開けた状態で立ち往生している理由は、ひとえに扉の先に何も無かつたからだ。

扉の使い方を間違えているんじゃないだろうか、ここの設計者は道の続かない扉なんてただの窓だろう。

そんなことを思つても紳士に道が現れてくれるはずもなく、また謎解きかよとぶつぶつ呟いているツバサとは違う理由で、ため息の一つでも吐きたくなつた。

ツバサの呟いている通り、ここでも謎解きをしなければいけないのは明白だろう。ただ突つ立っているというのは忍びない。とうよりは私が謎解きの謎すら知らない状態で、シシーにそれを解かれて進まれるのが嫌なので、なにやら”窓際で”しゃがみこんでいるシシーに声をかけた。いや、かけようとした。

外の景色を背にして何かを覗き込んでいる装いのシシーは、空中にいた。

人間、地が無ければ落ちていくものでしょう？

そんな思いが真っ先に浮かんできた。きっと、私はまだ魔術とい

うものに慣れていない。

私には空中に平然と佇たたずんだり、嬉々として何も無い空間に飛び込んでいくなんて事、できるわけがないのだから。

立ち上がったシシーが足で何も無い空間をたたきながら私に言った。

「道はあるみたいだよ」

悔しいけれど、窓という認識を改めた。

見えない道を手探りで進めなどと言う無茶なことをさせるはずもないだろうから、他の仕掛けを探してみる。とりあえず床が消えるぎりぎりのところでしゃがみこんで、さっきまでシシーが覗き込んでいたあたり視線を走らせてみた。

私の手元、切れた床の側面にいくつも穴があった。小指ほどの太さしかないそれは、綺麗な円形をしていた。それだけでこの穴が人工的に作られたものだという事がわかる。

かなりの奥行きがあつて、むしろどこかに続いているんじゃないかと考えたとき、頭の上のほうでぴんと閃くものがあった。

この細い管を通れるものなんて、今は水ぐらいしかないじゃないか。

穴がまっすぐに続いているとすれば、その先は滝の通り道とぶつかるから、滝を復活させたら道が開かれる気がする。

このことをシシーに言うと、試してみたらと返された。試すにあたって死の危険はなさそうなので、何の気負いも無く腕輪から0を押した。

廊下の奥で水の音が増していく。と、足下で水が噴出した。

何本もの糸がより合わさって一枚の布を作るように、私たちの目の前で水の流れが重なり、縊よられて、一本の道を表す。それは空を目指す螺旋階段だった。

ここにきて、私は石碑に刻まれていた言葉の本当の意味を理解できた気がした。

私は今、空を見下す^{みおろ}ことで空を見下^{おろ}していた。

仕立て屋でツバサに服を脱がされたとき、たぶんシシーたちは見てたんだろうな。

唐突に思い出したくないことを思い出してしまった。

ツバサは人の目を気にしないと云うよりは、むしろ人目を引くのが好きな節がある。それでもって、何であれ、どんな方法であれ、楽しければ羞恥心など破り捨てる人だ。

そんなツバサと、彼女に意気投合した仕立て屋さんが仕立てた服を私は着ている。

パーティーに際して、胸元の大きく開いたドレスを着ることはよくあったし、着ることに戸惑いは無かった。主張の乏しい胸のせいで着られてる感が強かったのは否めなかったが、そこは慣れた。

だが、これはどうだ。

黒が好きなのは、黒を基調としていることはうれしいのだが……
いかんせん布地が少なすぎやしないか。

上半身はいい。ドレスに動きやすさを組み込んだものをツバサの趣味の元形にすればこうなるのだろう。まだ、ドレスを着ている感じがする。

問題は下だ。わたしは今までくるぶしより上を晒すような服装はしたことが無かった。

確かに、ドレスのように、動くたびに風にたなびく服が遺跡攻略

に向かないのは分かっている。

魔道二輪に乗ったら悲惨になることも分かっている。

だから、普段男性が着用するズボンを採用したのだろう事も分かっているつもりだ。 こちらの世界では女性も普通に着用していたが……。

だから私は股下に申し訳程度の丈があるズボンをはいている？

これに関しては口を大にして否と答えたい。

ツバサが暴走していて、私がそれに巻き込まれたのだ。……そう、たとえ探索班や攻略班に組する女性の皆々様が今の私と似たり寄ったりな服装をしていたとしても。

……そもそもこんなことを思い出してしまったのは、

翼の髪飾りからびよこんと飛び出した左右の髪房を上下に振りながら歩いているツバサが、

上に合わせた黒青色の、

これまたものすごく短いスカートを身にまとい、

いくつもある短剣を腰の辺りで揺らしながら、

水の橋を渡っているからだ。

つまり、スカートの中が床に映って丸見えである。

そして、隣でシシーが水玉かあと呟いたからだ。

私はこの無駄な思考を追い出すために、前方に目を凝らして広場を観察することにした。それは螺旋階段を終わりと神殿の入り口を結ぶ水の橋の中間にあった。

幸い、私の気を引くものがその中央にはあった。

下から差す光に照らされて、一輪の花が咲いている。その姿は青水晶で作られた細工のようだ。

より詳しく観察しようとしたところをツバサに止められた。ちょうど広場に足を踏み入れる二歩前といったところか。

「アイリスは”蝶の黙示”から”提灯揚羽フェノス・ベタローダ以外で何ができる？」

目を凝らしていた私に、シシーは言った。

「他には火属性がもう一つと風属性が一つずつだけど。どうして急に？」

「楽しい楽しい試練せんとうが始まるからだよ」

私の質問に答えたのは口を開いたシシーではなく、屈伸運動をしていたツバサだった。若干シシーが頬を膨らませているのが、なんともほほえましい。

けれど言葉の内容は決して微笑ましいものではなかった。

「戦闘って。何でそう決め付けられるの？」

「別に確定してるわけじゃないんだけどね。ただ、生き物だったり、それをかたどった何かが不自然にある場合、今までは全部襲い掛かってきたからさ」

植物だって生き物でしょ？ とシシーは言った。

「だから、まずは戦闘方針を決めるの。普段はシイちゃんが攻略法を考えて、ぼくが敵の攻撃を防ぐんだけど、今日はアイちゃんがいるからね」

「特にアイリスの精霊術式は戦闘でも使い勝手がいいから。アイリスは魔術師同士の戦いが魔術の相殺合戦になるのは知ってるよね？」

それはアルマが教えてくれたことだ。私が始めて魔術を発現できた日、アルマは何よりもまず魔術の危険性と戦い方を私に説いた。

この世界に浸透する魔術のほとんどには一つの共通点がある。規

模が小さかろうが、使いにくかろうが、まともに発動し、まともに喰らえば必死だと言うこと。人々が普段使っている一単語呪文ですら、殺害の意図を以って人に向ければ死神へと変貌する。

魔術の級数による違いとは、魔術のもつ威力の違いなどではなく、魔術が人に与える理不尽さの違いでしかない。

だからこそ魔術を使う今の文明は、魔術に滅ぼされないために、魔術を支配しようと躍起になる。驕おこることはあっても、踊らされることがないように。驕おこっているうちは人は滅びることなどないからだ。

この世界は魔術を使った犯罪に対してあまりに厳しい。それこそ、犯罪に魔術が関係した場合、内容の如何を問うことなく最高刑罰を適用させてしまう国があるほどに。

そこまでやって、文明は踊らされることを抑えている。

裏を返せばそれだけのことをやる価値が魔術にはある、とはアルマの談。

でも魔術に価値を求めている時点で人類は踊らされているよ、とは偶然私たちの部屋にやってきたブック館長の談。

話はそのまま戦闘方法へと移って、ブック館長は部屋から出て行った。置き土産に残していった、少なくとも今の人類はねという言葉葉が不気味だったのを覚えている。

魔術一つで国を滅ぼせるこの世界では、意外なことに戦争は魔術が発達している国でこそ頻繁に起こると言う。

力を支配した人間の大半が次に思いつくのは他の支配だけれども、強すぎる力というものは、押しなべて直接支配には向いていないのだ。支配しようとする力を向けた瞬間、その対象が利益もろとも滅びてしまうのだから。

強すぎる力とは振りかざすものであって、振り下ろすものではない。

にもかかわらず魔術が戦争に使われるのは、その力を無効化、ま

たは大幅に軽減する術が存在するからだ。

それが、属性相殺。

魔術が発現、発動する前に、その魔術と対になる属性を持つ魔術をぶつけると、生命片が相克し、霧散する。

必要な生命片がなくなる以上、魔術は不発に終わるのだ。

つまり、魔術師同士の戦いとはすなわち、魔術の打ち合いではなく、消し合いに相成る。

「今回の相手は水属性の魔術を使ってくるだろうから、アイリスが火属性の精霊術式をあらかじめ発動させておけば、戦闘が有利に運ぶと思わない？」

シシーの言葉は疑問の形をとった断定だった。

たしかに、魔術師同士で対峙したときに、既に魔術が発動しているということは、相手よりも言うて有利になっているということだ。しかし、その一手で相手を死に至らしめる事が可能なのが魔術なのだから、有利どころの話ではないと思う。

そう考えて、そもそも前提から間違っていることに気付いた。

対峙する相手の人数なんて如何様にも変動するし、

今回に限って言えば、相手は人間ですらない。

「私のやることはわかったけど、相手は魔術を使ってくるの？ 呪文の詠唱なんて出来なさそうだけど」

なにせ相手は花だ。

「たぶん大丈夫。使ってくるよ。詠唱型ではないだろうけども、空中に生命片で直接文字を書く記述型なら口なんて関係ないから。もし使ってこないんだったら、アイリスも攻撃に回ってくれればい

いしね〜」

「とにかくアイちゃんは辺りを見渡して、色つきの生命片マナが漂っているところめがけて対の魔術をぶっ放してくれればいいんだよ。あとはシイちゃんの言うこと聞いとけば」

他にいくつか聞きたいことがあるのだが、どうにもツバサは待ち切れなさそうだ。

「……わかった」

別に今聞かなければいけない事でもないし、後でアルマにでも聞けばいいだろう。たぶんそのほうが詳しく教えてくれるだろう。

”蝶の黙示”から私の理解できた章を一つ思い浮かべる。”提灯揚羽”は火属性だけれども、それよりも攻撃性の高いものを。

「あ、蝶には水属性の生命片マナに向かうように命令しておいてね〜」

言われた通りに……いや、私の生命片マナに反応しないように命令した上でシシーの命令を加える。私が水属性の魔術を使わないと有限らないから、このほうがいいだろう。

— 舞い踊るは赫赫の蝶 《to floga myga set
o ouranos》

— 燃え上がるは雑雑の万 《aftos oidyo fle g
o menos ftero》

— 飄々彷徨う胡蝶の気まぐれは 《kai kaiomaita
panta》

—しかし、所行の全てに亡びを纏う《to einai klisis》” Varcas Petalouda”《

精霊術式” 回禄揚羽”
かいろくあげは

手のひらに浮かんだ火の玉は、さながら平面空間を侵すがごとくに広がり、一匹の蝶を表した。赤く輝く羽の模様のそこかしこから押さえきれずといった感じに炎が噴き出す、手のひらには仄かな温かみしか感じない。

私は同じ呪文をさらに二回繰り返した。

精霊術式の難点は、空中の生命片マナを取り込む機関を発動させるために必要な生命片マナがあまりにも多いということだろう。

私たちの周りを三匹の蝶が舞っている。これがこれから始まるであろう戦闘に支障をきたさないための、私の限界だった。

「全然熱くないけど、これで大丈夫？」

眼前を通り過ぎる蝶を目で追いながら、ツバサは言った。

「この子達がむやみに熱を放出したら、今頃私の腕は無くなってるよ。大丈夫、この子達の理不尽さは私が保証するよ」

理不尽さがつぼに入ったのか、ツバサが吹き出した。魔術を強さなどもろもろを含めて、理不尽という言葉はびったりだと思っただが。

しばらく震えてたツバサは、大きく息を吐いた。

「それじゃあ〜」

「きばつていこー！」

広場に、足を踏み入れた。

第一の変化は広場の周りの空間に亀裂が入ったことだった。

ツバサが身を翻す。腰にぶら下がる何本もの短刀から無造作に二本両手に持つと、左手の短刀で前方の空間を二度切った。

敵のはるか前で振られたその短刀の切っ先を敵へと届かせたのは、風の刃。

風属性を示す緑色を宿したそれらは一輪の花に斬りかかり、地面から吹き出した水の勢いに軌道をずらされた。

その間に、敵を自分の間合いに取り込んだツバサは、白く発光する右手の短刀を振り下ろそうとして……

第二の変化が起こった。

空がひどく鳴動し、弾けた。

それが地底湖の水が噴き上がったのだと気付けたのは、怒涛をなしてツバサを視界から掻き消したからだ。

体が激しく揺さぶられる。

広場の中心に落ちた大質量は、しかし、私とシシーを押し流すことなく中央に留まったまま脈動している。

濛々（もうもう）立ちこめる霧の隙間から、細工じみた青い花はその身を水の中に沈めて、変わらずあった。

ツバサの安否を確認しようとする霧の中に目を凝らす。

しかし、第三の変化はそれすら許してはくれなかった。

鼓膜を劈く金属音。見ると、それは花の代わりに鉤爪をつけた蔓薔薇のようだった。

精巧な水晶細工が放つ斬撃は、薄さ一ミリにも満たない壁に阻まれ動きを止めている。

どれほどの速度で繰り出されたのだろう。敵の放った一閃は私たちに届かないまでも、そこまでにあつたもの全てを斬り飛ばしていた。

結果、霧に隠れていた敵の全貌が白日の上に晒される。

何千何万という蔓薔薇が巻きついて、あたかも一つの巨大な蓮華のよう。そこから伸びる四つの鉤爪は鎌首をもたげた蛇のように私たちを威嚇して、突如攻撃に転じた。

金属音がまた響く。しかし、一度だけだ。

向かってきた四本の、うち三本は頭上を越えて背後に消える。攻撃のためではない。攻撃を受けたためだ。

蔓は根元から断ち切られていた。

後ろから鈍い衝突音が抜ける。続いて前方で水が瞬間的に沸騰したような音。

どこにいたのか、ツバサが蓮華の花に右腕を突き込んでいる。音はそこからしていた。

噴出する蒸気を身に巻きつけて、ツバサが舌打ちするように顔をしかめた。

腕を引き抜いて獣さながらに飛び下がり、そのまま私達の所へ駆けってくる。

どこにも怪我はなさそうだ。そのことにほっと息を吐く。

「アイちゃん、気い緩めちゃだめ。これからだよ」

私を窘めたのはそのツバサだった。

斬られた鉤爪の根元が不気味にうごめいている。

「材質は？」

「腕は水と氷の中間。本体は氷。青い花周囲は生命片マナを吸収してくるよ」

「分かった。ツバサはいつもどおり。アイリスは僕と連帯。水属性以外の魔術に注意。直接攻撃は効果なさそうだから、防衛に徹して」

返事は口ではなく行動で示された。

私たちを囲む結界。シシーの放つ”鉄壁”。物理攻撃をことごとく遮断するこの結界には、今、二本の蔓が巻きついている。ツバサはそれを駆け出さずに切り捨てたのだ。

切り口から水蒸気を撒き散らしながら落下していく残骸に一瞥すらくられず、その瞳は敵を射抜いて離さない。

およそ人間とは思えない速度で疾走するツバサの先で、不気味にうごめいていた蔓の根元が動きを止めた。

ツバサは曲芸じみた回避を余儀なくされる。

ツバサに切られた計五本の鉤爪は、その数を倍に増やしてツバサに迫っていた。

「僕等も行くよ！」

急に腕を引かれて、危うく転ぶところだった。

行くよといいながら、シシーは敵を中心に円を描くように走る。

ここにきて、ただ漂っただけだった蝶たちに変化があった。不規則だった動きに指向性が追加されたのだ。彼らの向かう先には花が咲いていた。

それは切られた鉤爪の残骸だった。

根を張るように透明な床の中の水脈へと水の管が伸びている。そのうえに様々な種類の植物が群集して、一つの花を支えていた。

魔術の原書に使われる古代文字が青い生命片マナでかかれては花の周りを一周して消えていく。それがあまりに早く行われるので、注意して見なければただ青い光の輪が浮かんでいるようだ。

なるほど、これが記述型か。

青い輪に赤い蝶が重なったとき、白の爆発が起きた。魔の熱を孕んだ蝶と魔の冷気を孕んだ花の接触は、周囲をなぎ払う蒸気と雷を生んだ。

「うおう！　　すげー。何でびりびり？」

「わかんないし、それどころじゃない！」

十本あった鉤爪は、数え切れないほどに増えている。どう考えてもツバサが切ったそばから復活している。たちの悪いことに斬られたところから二股に分かれて。

斬られた蔓の残骸もいまでは床を埋め尽くすほどだ。その一つ一つから花が咲いている。

幸い敵の行使する魔術は生命片マナがそこまで含まれておらず、相克した際の回禄揚羽の生命片マナ消費速度が吸収速度を越えることはなさそうだ。

今の状態ならば二匹だけでも十分回せる。が、すぐに三匹でも足りなくなるだろう。

「アイリス、あれ落とせる？」

「あれ？」

あれは頭上にあつた。地面から突き出した水晶の中で一際大きく、

形の整ったものが一つ。広場のちょうど真上にあって、落とせれば敵を倒せそうだ。

すぐに回禄揚羽の一匹を飛ばした。

出来うる最速で昇っていく蝶は、途中で上昇をやめる。翅をばたつかせて、けれど上昇はしない。何も無いと思っていた空間に何か薄い輪のようなものが幾十にも重なる様が仄かに明滅していた。

私はそこにくもの巢を幻視した。触れたものを逃すことなく絡めとるくもの糸に、一匹の蝶が囚われて……

急いで戻ってくるように命令する。それはまずいことだ。今一匹でも無効化されるのはまずい。

心配をよそに蝶はすんなり戻ってきた。天井に結界に束縛の意味が含まれてなくて本当によかったと思う。

だがこの状況はどうしたものか。敵の攻撃がシシーの”鉄壁”を揺らす頻度が増えてきた。いくらツバサでも裁ききれなくなってきた証拠だ。

実質的な危害を加えたのはツバサだけだからか、敵の攻撃はほとんどがツバサへと集中している。攻撃が線ではなく壁として襲ってくるのだから、むしろ今までずっと渡り合っていたことからしておかしい気もする。

鐔つばさ黎と同様、急停止、方向転換、急加速にかかる時間を一瞬にまで圧縮したような走りのおかげで、いまだツバサは敵の攻撃を一度も受けていなかった。

狭い空間での小回りならばガルドよりも上だ。

敵の攻撃をかわし続けるツバサ、敵の攻撃を”鉄壁”で防ぐシシー。その恩恵にあやかる私。このままではじり貧だ。

しかし、対処の仕方が分からない。床は既に一面の花畑で、その花に引かれて蝶が右往左往している。どうも透明な床に張り巡らさ

れた根から新しい株が生まれている。目に見える速さで植物たちは増えていた。

「ツバサ、後一分耐えて」

「おっけー、まかせときんしゃい」

シシーは変わらずどこか飄々としているし、ツバサは今の状況を楽しんでいる。

「何か分かったの？」

「あそこの壁見て」

広場に壁など無かったはずだが。そう思って見てみると、確かにそこに壁が見える。植物が繁茂し何も無い空間に壁の輪郭を現していた。そして、太い縄のようなものも。

ぴんと張っており、角度からみて天井へと伸びていそつだ。と、他のところでも同じことが起こり始めた。

八つの柱とそれぞれから伸びる八つの縄は天井の大地へと伸びている。シシーの言ったとおり一分ほどでその姿は確たるものになった。

「ツバサ！ 広場の壁に八つの縄が見えるね」

「見えるよ」

「斬って」

「うい」

右手に持っていた短刀を腰へと戻し、違う短刀を引き抜く。ここまでは流れるようだ。そこからの動きは獣のそれをも凌駕していた。

体の軸を捻って、鉤爪の猛威の隙間を縫ってツバサは跳ねた。体を高速で回転させながら、ツバサは敵の頭上に躍り出た。そこで開放する。

両の手に持つ短刀は同じ装飾がなされている。違うのは装飾のなされた側面が左右で違うこと。

両の先から迸ったのはツバサの生命片^{マナ}を吸収して発動した風だった。渦状に広がる二重螺旋はその全てを刃となして、八本の縄を断ち切っていた。

縄の切れた音は、むしろツバサが壁を穿った音に比べてあまりに小さかった。

「シィちゃん入れて！」

ツバサが結界に触れる直前、薄い膜が消えて、すぐに復活した。転がり込んできたツバサ共々大地を見上げる。巨大な円錐はすぐそこまで迫っていた。途中にあった重円の結界を素通りし、あまりの振動に私は尻餅をついた。隣でシィーも膝を曲げている。ツバサだけは変わらずに仁王立ちだ。

鉤爪の動きが止まった。

視界を塞いでいた氷の粒が重力に落ちると、始めにさかさまの円柱がみえた。つぎにはそれに刺し貫かれた蓮華の花が。最後にその中で咲いていた青水晶の花細工が根元から折れているのを。

氷が割れていく。

床に広がっていた花畑は輪郭が崩れて水へと戻っていく。

広場を覆っていた亀裂が落ちていく。

私は広場を囲む空間の亀裂は蔓状の茨が巻きついていったものだったのだと、今、分かった。

試練たたくいの終わりを告げる音は静かに、けれど重く、厚く。氷の割れる音はどこか人の骨が崩れる音に似ていた。

「おわったあ、おわったー」

ツバサがどっか、と腰を下ろした。

「おつかれ〜。ツバサもアイリスも」

そこまで動き回っていたわけではないのに、終わってみるとすごく疲れている。初めての戦闘はやっぱり精神的にきつかったみたいだ。

「アイリスのおかげで無傷で倒せたよ。ありがとう」

「そうだね〜。ぼくもよける必要がなくなったから、考えることに集中できたよ」

でもそんなことを言われたら、うれしくなっちゃっじゃないか。

「まだ、仕掛けが待ってるかもしれないんだよね」

そんな返事をしてしまった。

「まあね〜。でも待ってないかもしれないよ。ほら」

「……扉が」

空に浮かぶ神殿の扉が少しずつ開いていた。

「仕掛けがあつたらあつたで、そのときはシィちゃんが考えればいいんだし、今は休憩休憩」

そういって、ツバサが床に大の字になる。床はまだ激しく濡れているのに。

……私もやるうかな。ズボンはすっかり濡れて、背中の中まで水が昇ってきている。今更床に寝ても変わらない気がする。

寝転がってみると、思いのほかひんやりして気持ちよかった。

ただ、大地を空高くから見下ろしているようで、ちょっぴり怖かったりもした。

Chapter 4 - Manner of right - (後書き)

戦闘描写をもっとよくなりたい。

だれか、戦闘をカッコよく書いてる作者が作品を紹介してください。

帰路を飛ぶ^{はしる}私たちの持ち物には、行きにはなかったものが三つあった。水筒に満たされたおいしい湧き水と、遺跡に保管されていた水の架け橋”、そしてそれを守っていた一輪の水晶花だ。

戦闘が終わり、敵の体を構成していた大量の水が流れ去った後に取り残されていたこの花を私は持ってきていた。襲ってこなければ綺麗な花なのだ。

枯れてしまつたらそこまでだけど、今は髪留めに取れないように括り付けてある。

「ガルはがんばってるのかな？」

『ええ、今日の夕餉は一緒に食べられそうですよ』

光天越^{ひかるかみ}しにアルマが答えた。

ガルドが戦争の仲介に繰り出されてから一週間もたっていないというのに、いくらなんでも早すぎる気がする。

私の希望でゆっくりと飛行する魔道二輪の上から、戦場のほうを見る。遠くに立ち上る煙は狼煙か、魔術の残り香か。

『もうそろそろ、いいかな？』

『そうですね。あとはまっすぐ飛んできて大丈夫でしょう』

『それにしても、何でこんな短時間で戦場が移動したんだか』

私たちは行きと帰りで違う道筋をたどる必要があった。それはまだ戦争が続いているからでもあったし、行きと同じ道筋が戦場のど真ん中を貫いているからでもある。

『ガルド様の報告では意図的に動かされたとの事です。策と呼ぶに

はあまりに稚拙で、本当にただ場所を移したただけのようですが。問題は移った先が両陣営にまったく利益しないことと、そもそも両陣営ともなぜ移動したのか理解していないことですね」

『怪しさバリバリじゃん。ほんとに帰ってこれるの？』

『行きの道中に言ったでしょう。収束の目処は立ったと。今回ばかりは戦場をいくら左右されたところで、戦争が左右されることはありませんよ。』

詳しい話は後でガルド様に直接聞くとして、今は無事に帰ってきてください」

機械越しに聞こえるツバサの返事は、不承の念が漂っていた。

「ところでさ」ツバサたちの会話に耳を傾けるだけだったシシーがそう切り出す。「この先に、確かひとつ町があったよね。そこで魔道二輪見られてもいいの？」

『町ではなく都だと自称していますけどね。大丈夫ですよ。もう取引は終了しています。ですので人目をはばかる必要はありません』

「こんな森の深いところに人が住んでいるんですか？ 排他的、というわけではなさそうですね、」ライネルマ図書館と取引しているからという安直な考えだけでも。「何かと不便な気がするのですが」

気になったから聞いてみる。

『そうですね。ですが、もともと仲間には暖かくよそ者には冷たいという、むしろ村の思想を強く持った、小さな町だったそうですね。されが魔術発展とともに都へと変貌したのですから、立地的に閉鎖空間が築かれてしまうのはしょうがないことだと、わたくしは思います』

「なるほど。……やっぱり魔術は私の理解できる範囲を軽く飛び去ってくれます」

『それはわたくしたちも同じことですよ。ただし飛び去っていくその背中にしがみついている時間が長かっただけです。そもそも魔術を追求するに至って、根源すらまったく解明されていないのですから』

「根源、ですか？」

魔術の発動原理などだろうか。

考えは意外な返答に否定された。

『ええ、魔術がいつたどこから来たか、です』

「……魔術がなぜ存在しているのか分かっていないんですか？」

魔術の誕生を証明できないのか。

『ええ、そういうことです』

驚いた。つまりこの世界は得体の知れないものの上で成り立っているということだ。本という形をとっている以上、そこにはナニモノかの意思が紛れているだろう。

魔術にどっぷりとつかったこの世界の人たちは、知らず知らずに踊らされている可能性も否めないわけだ。ブックの言った通りなのかもしれない。

……まあ、それでもこんな楽しいものをやめる気はさらさらないのでが。

『魔術書の紀元はシシー様の曾祖父、ノウン・ノーレッジ様が魔術書を手したことで始まりました。実はそれこそがヴィネルマ図書館の起源でもあります』

「は？ え、シシーのひいじい様なの？ 魔術見つけたのって」

これにも驚いた。

「魔術書を見つけたのはね。ついでにこれのことだよ」

風に乱れる若草の髪の間隙から表題のない魔道書を覗く。なにか、特別すぎやしないか、この本は。

話の前から何一つ変わってないはずの本に、新しく正体不明の恐怖がくすぶる。

『道が見えたよ。そろそろ町に着くつばい』

傾き始めた日の光と、先の話さえぎって鐺黎つばくろが降りてきた。

「魔術の発達したところなんですよ、そこ。面白い魔術書とか見つかるかな？」

「ありえないですね。魔術の発達した国ではなく、魔術の発達に伴って発展した所なんですよ。アイリスさん」

なぜそんなはつきりと否定できるのか分からなければ、その理由もよく分からない。

少しの間が開いて、アルマの話は続く。

『魔術の向上は、すなわち生活の向上なんです。さて、生きるだけならば不自由しなくなった人類は面白いことに、生きることに必要なものにこそ価値を見出しましたよね。その先端に行くのが、今から通るところです』

『すごく綺麗なところですよ。あたり一面に所狭しと広がる花畑は圧巻です。あの』

不意に途切れたアルマとの通信は、切羽詰った声で警告するブツクのせいだろうか。

『君たち、すぐ引き返しなさい！ 結界が……』

そこまで聞いた時点で即座に向きを反転させたシシーとツバサはすごいと思う。

……けれど、遅かったみたいだ。

『何これ、どうなってんの！？』

ブツクは言葉を切ったのではなく、断ち切られたのだろう。見た感じ外一方からの干渉を遮断する結界を内側に向けて発動しているようだ。

防ぐための結界ではなく、逃さないための結界。封と言ってもいいかもしれない。

閉じ込める、活動を制限する意を持つこの言葉には、転じて内のモノコトを外に悟らせないという意味を含んでいる。

まさに、私たちは封の内にいるのだ。

なぜなら、日が傾き始める時間帯、今は私たちは夜の帳の中にいた。これほどの異常を外にいる私たちは気付けなかったのだから。

差し当たり外側へと球状に広がり続ける、結界特有の幾何学図形は封印といったところか。

……やめよう。冷静に分析すればするほど、冷静でいられなくなりそうだ。

それに、どうも悪いことは立て続けに起こるもののように、

「ツバサ！ すぐに着陸するよ。ここら辺、生命片クナが浮かんでない！」

「はい！？ うわー、まじだ。がんがん減ってるよ」

生命片^{マナ}残量を示す計器が目に見えて減っていく。もう半分を切りそつだ。改めて擬似飛行術式の貪欲さを目の当たりにした。

カラン

「だめだ。アルマも館長も、だめもとで師匠にも繋がらない」

「あたりまえだよ。言葉を運ぶ生命片^{マナ}が浮かんでないんだから」

無事着陸は出来たが、だからといって状況が好転したわけではない。ひとまずの墜落死を回避できただけで、むしろ何倍にも悪化している。

「これからどうしよう」

この状況で健気に振舞うことなど出来るわけがなかった。

「とりあえず、ここに留まって助けを待つか、この結界を張った人に会いに行くかは出来るよね」

「それよりも先に試すことがあるよ、ね！」

横一閃。

腕が唸り、短刀が白の線となる。その先が空間を伸び、しかし結

界に弾かれた。

「けど、無理だなこれは」ツバサの口から舌打ちが漏れた。

「炎Flouga」

……だめか。シシーの使う結界みたいに魔術攻撃を素通りしてくれるなら、蝶を外に飛ばせるのに。

「アイちゃんアイちゃん、……やるなら言って。あと少し落ち着こう」

「え？ あ、ごめんなさい」

炎のFlouga一単語が巻き上げた土を全身にかぶったツバサが、そこにいた。

「ロン」

「ここにいても何も進展しないから、都に行ってみようか。結界の中心はそこみただし」

「さんせー」

「……ここで待ってたら、助けがくるかな」

この遺跡じみた大魔術は、私たちに選別の試練ではなく鮮烈の死を叩きつけてくるようで、正直すごく怖い。

「くるかもしれないけど、すごく時間かかると思うよ。でもまあ、

どちらにせよまずは明かりだね。……「F o s」^{光よ}

シシーの手のひらに浮かぶ拳大の光が冥い闇を払う。
それを見ているだけで心が落ち着いていくのが分かった。

カラン、コロソ

澄んだ音が聞こえた。木の鈴を転がしたような音が。

闇が再び世界を支配した。ツバサが光球を握りつぶしたのだ。

その隣で鐔黎の燕尾をツバサが取り外している。音も無く外された二つの尾羽を、今度は腰に付いた金具に繋げた。

すらりと引き抜かれたのは長剣。夜に紛れる二本の黒青剣が研がれた刃先に月を映す。

今度は何がおきたって言うんだ。

「シイちゃん、なんか来るよ。どうする？」

「そうだね、隠れようか。誰かが助けに来てくれたなんて希望は持たないようにね」

それは他でもない私に向けた言葉なのだろう。残念ながら、そんな楽観的なことなど微塵も思っていない。

私はまだ物心付くか付かないかの頃、音を聴いた。

父に訊くと、硬くこわばった口から、無事に送るためのおまじないなのだ知った。

始めにカランと二回鳴らして、終わりにリンと二回鳴らす。

……わが国伝統の国葬の様式だ。

終始で違う二つの音。

今聞こえてきた音は紛れも無く、その、始まりの鈴の音だった。

急に強い衝撃を腕に感じて我に返る。ツバサが私の腕を取って、音がしたほうと逆の方向へと駆けていた。

長く人の手が加えられていないであろう散雑な森の中に、隠れる場所などいくらでもあった。太い幹の影に広がる茂みに身をかがめて闇に目を凝らす。

それは、天使とも死神とも付かない姿をしていた。人の頭蓋だけを浮かせたような球体は、表面に開いた眼窩ともとれる穴という穴から噴煙を撒き散らす。

その様は死と墳怨を暗示しているようだ。

しかし、その後ろで尾ひれのように伸びるのは、どうみても天使の羽だった。

その矛盾はすつと重さを感じさせない動きで魔道二輪へと向かい、何も無かったかのように透過した。

それだけで光天、鐔黎、両機ともが地に伏せた。

「……どういうこと？」

まだ三割ほど生命片マナが残っていたはずだ。

「生命片マナを吸われた可能性大」

「そうだね」

吸う？

「あの一瞬で？ どれだけ早食いで大喰らいなの、あの……精霊術

式？」

そういえば、何の術式なのだろうか。精霊術式の性能に似てはいるが、この世界に存在しうる生き物なのか？ あれは。

それとも、精霊術式がこの世界に現存した生き物を模しているというのが間違いなのか。

「さあ？ どっちかっていうと、死霊術式のほうがそれっぽくない？」

生命片を吸った余韻にでも浸っているのか、さつきからただふよふよと浮かんでいるだけの姿は確かに幽霊じみている。

「でも、そんな魔術はアルマさん教えてくれなかったよ」

「だろうね、知らないだろうから。私も知らないし。シイちゃんは？」

シシーが静かに首を振る。

「どうしようか。一発叩いてみる？」

ツバサの持つ剣が霞のように揺らぎ始める。それはすぐに全身へと回った。

会話する、私と二人の違いは、話の対象から目を放したか否か、ただそれだけだろう。

だから、私だけ反応が遅れた。

Chapter 2 - 6 - Overcrowded - (前書き)

小説を書く纏まった時間が取れないので、小分けにして投稿していると思います。

コロソ

振り向くより先にツバサが私を押し倒した。強い衝撃に息が止まりそうになる。それでも、目は閉じなかった。

ツバサの背すれすれを通過し、それは動きを止めている。顔の部分が全て羽に隠れて、まるで天使の後姿だ。うれしくもない。

「ありがとうツバサちゃん」

「はいはい、どういたしまして。……シィちゃん」

「分かっている。行くよ、二人とも」

同時に敵が行動を再開した。ひどく緩慢に見える動きで、森の中を逃げる私たちとの距離を縮めてくる。

シィを先頭に雑木の中をジグザグに進む後ろで、敵はまっすぐ木々を通り抜けてくるのだ。そのたび、月の光を青く跳ね返す木が、黒々としたものへと変わっていく。

「あれさ、生命核^{アニメ}まで吸ってるよね？」ツバサが言う。

「そうだね。つかれたら死ぬね」

それなのに、二人はいつもと変わらない。

「ねえ、何でそんなに冷静なの？二人とも」

生命核^{アニメ}は命そのものだ。生命片^{マナ}と違って、消費したら回復することも無く、使い切れればそれは死ぬということだ。そもそもどんな魔術でも消費できるものではないはずなのに。それを奪う魔術なん

てあつていいのか？

逃げる三人。敵から隠れるように移動しても、敵は確実に追ってくる。私たちと敵とをぴんと結ぶ見えない紐を辿っているかのような正確さだ。ツバサの後ろを付いていく罫黎に似ている。

「僕たちの生命片マナに反応してるみたいだね」

流し目に敵を観察していたシシーが言う。その先で森は開け、都への道が見えた。そのまま進路を都へと向ける。

整えられた道を走っているぶんには、敵に追いつかれる心配は無くなった。けど、引き離すには遅い。

付かず離れずの今の状態に、真つ先に耐え切れなくなったのは、ツバサだった。

「ああ！ もう、めんどい」

左手で腰に付けた、風の刃を生み出す短刀を掴む。かなりののがむしやらかな姿勢から生み出されたのに、その刃も正確だった。

ナニモノをも音も無くすり抜ける敵を、音も無く切り抜けて、左右に断ち切った。

その切断面が不気味に蠢もよほいて、すぐに元通りに繋がってしまうものだから、ただ刃が擦り抜けたように見える。たちの悪いことに体に触れていた部分の生命片マナを根こそぎ奪い取って。

悪いことはそれだけではないが、いいこともあった。

カラカラ、コロソ

吸い取れなかった風の刃を追って、敵が向きを変えたのだ。

「……………」

「シシーが走るのをやめた。合わせて私も足を止める。三人の息遣いしか聞こえない静寂だった。」

二人して後ろを振り返って見れば、振りぬいた姿勢をそのままにツバサが動きを止めている。

ところで、悪い事はそれだけではないといったが、

「ツバサ」

「わかってる。言わなくていい」

鈴の音は、多方向から聞こえた。

「まあ対処事態は簡単だって気づけたんだし、気にしない気にしない」

ツバサの放った生命片マナの塊を追いかけていったのだろう。まだ敵の姿はない。澄んだ月明かりを頼りに、靴底が石畳をたたく。

だんだんと黒く塗りつぶされた木が増えてきた。

鳥は鳴かず、虫も飛ばない。ひどく冷たい黒の森には、ただ木の葉すらも揺れない。

静かなことをここまで怖いと感じたのは、まだ幽霊を信じていた頃以来だ。

その黒色に切り取られて、幽幻に浮かび上がる白い城はあまりにも不気味で、出来ることならば回れ右して逃げ出したい。

特に、都の様子がなんとなく分かってしまう今の状況ではなおさらだ。

願わくは誰かいることを祈って。私は歩を進める。

そして、祈りは結界に阻まれて天まで届くわけが無かったんだと思いつた。

「うーん、これは森の中に隠れてたほうがよかったのかな？」

「相手が生命片^{マナ}を追いかける以上、僕たちが相手の目を欺^{オソ}くには死ぬしかないんだから、無駄だと思うよ」

一、二、三、四……数えるのも嫌になるほどの数を前にして、しばし呆然となる。嫌でも分かってしまった。中に人などいない。

暗くなるまで土地を耕していたのだろうか。土で汚れたつなぎを着たままで、白髪混じりの男性が一人歩いている。鍬^{くわ}を持たずに、目的も持たずに。

その手足は骨皮ばかり。夕日に汗を光らす顔は、干からびていた。

元はここで花を育てていた娘、だったのだろうか。結び癖の付いた髪を無造作にたなびかせ、寝間着姿の女性が向かってくる。靴を履かずに、身嗜みも整えずに。

その手足は骨皮ばかり。花をいつくしむ瞳は、白くにこりきっていた。

人間だった何かが、ひしめく巢窟。その入り口に私たちはいる。

それらの伸ばされた腕は、すぐるものを探しているかのようだった。私は、口を手で押さえて吐き気と戦うのに必死だった。

そんな私の両肩に仄かな温かみが、ぽんと置かれた。左右にいるシシーたちの手だ。

「大丈夫だよ、アイちゃん。見た目気持ち悪いけど……超気持ち悪いけど、あれも魔術だよ」

「そうそう。クロノパイディアのほうが怖かったよ。あんなのちょっとありえないくらいに干からびた人間が歩いてるだけだって」

……それがおぞましいのだけれども……でも、うん、少し楽になった。

「行ける？」

「うん」

ちょっと干からびた人間が何だ。肌のみずみずしさではこちらの圧勝じゃないか。

ただいま。なんだ、まだ起きてたのか

うん。お帰り、パパ

そうやって私を奮い立たせていると、後ろで声が聞こえた。シシーたちのものではない。

勢いよく振り返って見れば、そこにいたのは……人ではなかった。

人型ではある。一番初めに思い浮かべたのは、クロノパイディアで襲い掛かってきた死神だ。全体が黒一色で統一されていて、奥行きを感じさせない姿はそっくりだ。

頭もあるし、胴もある。腕もあるし、足もある。

けれど、そのどれもが子供の粘土遊びから出来たような、不恰好な塊だった。

ひしゃげた手のひらを私に向け、えぐれた胴体からツバサの黒青剣が突き出しているのが分かった。声を発したのはこれだろうか。

頭に開いた二つの眼窩の中で、夜空に燃え尽きる流れ星のように煌いていたものが、今消えた。

それが、自分の体をこの世界に繋ぎ止めるための核だったのか、黒い体を闇に溶かしていくように、その存在が薄れていく。後には何も残らなかった。

ツバサが剣をおろす。

「ねえ、今の声って何？」

この質問に、二人は異なる反応を示した。シシーは何かつつかえが取れたような顔で頷いて、ツバサはしかめっ面で首を傾げている。

「こえ？ 何のこと？」

「あゝ、あれ声だったのか」

返答も異なり、私の知りたかったことも程遠かった。こんな静かなところで聞こえないなんて事はないだろうし、聞き取れないというにはあまりに透き通っていた。一体どういうことだろう。

考える時間は、残念ながらなさそうだ。

建物の影からちらほらと、黒い人型が飛び出してきている。さらには、さっきまで追いかけてきていた幽体まで戻ってきていた。さて、……どうしよう。

「アイリスは”蝶の黙示”から一番長持ちする蝶を出して。ツバサは黒い奴を頼むね」

危機的状況にシシーの指示が飛んだ。私もすぐに詠唱を始める。

カラカラ、コロソ

私が選んだ蝶は、”回禄揚羽”だった。熱放出しない限りは、生命片のほとんどを術の維持に使えるからだ。

空へと舞い上がった蝶につられて、幽体たちが昇ってゆく。蝶には近づくものから逃げるように命令したから、つかれることもないだろう。

その間に、襲い掛かってきた人型の全てが消されていた。

きょうはねえ、みんなで花のかみかざりを作ったの。

そう、それはよかったわね。ほら、もう寝なさい。明日もいっぱい遊ぶのでしょうか？

くそ、虫が湧いちゃったよ。せつかく綺麗な花咲かせようとしてたのに、台無しだ。

それは大変だったね。

お前も本ばっか読んでねえで、少しは手伝え。

……もしかしてこれは、アニメ生命核を奪われた人たちの最後の会話な

のではないだろうか。都の人たちは、何が起こったかも分からないまま殺され、何も知らないまま彷徨っているのか。たぶんそうなのだろう。

今度は驚きや恐怖ではなく、怒りや苛立ちに身を震わせた。

一体、命を何だと思っっているんだ！

「本来は僕たちのやるべきことじゃないけど、」
「シシーがツバサを見ながら言う。」「結界を解くついでにライブラリアン図書館の仕事もやっちゃおうか」

それはつまり、これ以上の被害が出る前に、その原因を取り除くということだ。私は迷い無く頷いた。

もし、私がここで頷かなければ、今もみんなで笑い会えていたのかな

建物の間を銀線が巡る。意思なくさ迷う死体の隙間を抜けて、跳び掛かってくる人型が、次には夜に消えていく。

そのたび再生される最後の会話に、私の足は自然と速くなっていた。

巻き込まれた三つの命。それは、この世界において、はっきりと異端であり、強者だった。その足で無造作に踏みつけるように、向

かってくるものを駆逐していく。

敵の襲撃が途切れた頃、道が開けた。

視界に映る建物は、城、唯一つ。周りを花畑だったものに取り囲まれて座している。花たちはやはり、黒く変色していた。

身の丈ほどの大剣を担いで、城への門を守るように、二体の騎士が立っていた。

突然、目の前からツバサが消えた。敵に初撃を加えるためではない、敵の剣線を避けるためだった。

二体の騎士は、宵闇に白く残像し、音も無くツバサただ一人を攻め立てる。姿かたちは違えど、敵の体は幽体と同じく、白い煙で構成されていた。

「うおう、何でぼくばかり。あ、もしかして一目惚れかな？ 君たちも良いがたいしてるね！。そういうの僕は好きだよ」

「……ツバサちゃん」

一気に雰囲気の間が抜けてしまった。呆れ声しか出てこない。

「アイちゃんその目やめて。冗談だからね。この後に」だけ人間に限る”ってつなげるつもりだったんだからね」

とか言ってる間にも、敵は攻撃の手を休めない。相変わらずツバサばかりを狙っている。どうやら、命令の優先条件にツバサが当てはまってしまったようだ。たぶん危害を加えてくる者を狙うように命令されているのだろう。

攻撃されないことをいいことに、敵を分析していると、ツバサが呟くように口を開いた。

「まあ、ぼくだけを狙うならちようどいいかな」呟きは語りかけに変わる。「シイちゃんたちだけでお城行ってよ」

急に不安が過ぎつた。見た限り物理的攻撃はまったく効果をあげていないし、魔術的攻撃も、たぶん吸われるだけ吸われて終いだらう。敵に塩を送るだけだ。それで浄化してくれるなら、話は別だ。それがありえないのは、先の追いかけてここで証明済みだ。

そういつた事実が口から飛び出す前に、シシーが頷いてしまったものだから、言つに言えなくなつてしまった。

「大丈夫なの？」

だから、この言葉に全てを含ませる。ツバサは笑っていた。

「とりあえず軽口はたたけるよ。城の中が二人じゃきつそうだったら、蝶でも送つて。お供二人つけてすぐ行くから」

「了解。そいつには絶対触れないようにね。行こう、アイリス」

軽口をたたきながらも、危なげなく敵の攻撃をかわすツバサを見て、不安は杞憂だったと思ひ直す。

シシーに手を引かれて城門をくぐる。

「気をつけてね！」後ろで戦うツバサに向けて。

「いやいや、気をつけなきゃいけないのはきみたちだから」後ろで戦うツバサから

私とシシーは庭園を駆け抜けた。

シシーたちが城の中に消えるのを見届けて、ツバサは過度の緊張を解いた。途端に襲い来る、得もいえぬ違和感に顔をしかめる。

「……………」

彼女の右腕は、もう、使い物にならなかった。

Chapter 2 - 8 - Quadmirer - (前書き)

ま、片片へんへん：切れ切れになる様
- - - Books Dictionary
- - - 颯さつ颯さつ：風が吹くさ

扉を開けて、真つ先に目に入ってきたのは、空中を漂う大量の黒い生命片^{マナ}だった。こんな色は見たことがない。いよいよもって死霊術式というのが現実味を帯びてきた。

城の中は、術式が発する人工光で満たされている。闇を溶かし込んだような黒い光だ。それでも部屋の隅々までの輪郭が浮き上がっているのはどうしてだろう。

その光に照らされて、生命片^{マナ}は開け放たれた奥の扉から流れきていた。

明らかな異物が入り込んだというのに、城のほうに動きはない。つつきり、わんさかの敵とご対面するかと思いきや、排除しようとする意思を感じないどころか、むしろ受け入れている節さえある。

効率より外観を重視した燭台が立ち並ぶ廊下を渡り、人気のない階段を上ると、大きな扉があった。廊下との小さな隙間からしきりに生命片^{マナ}が噴き出している。

私もお城で生活していた身の上だ。この先の部屋が何に使われているかおおよそ見当がつく。

そこは、謁見の間だった。

シシーと合図しあって両開きの扉を押し開けると、今までとは比べ物にならないほどの濃密な生命片^{マナ}が溢れ出す。墨を流しかけるように風景を黒く塗り替えて、私の視界を覆い尽くした。

とつさに身構えるが、それ以上何か起こる気配はない。生命片^{マナ}は尾を引くように後ろへと流れて行き、もう視界を遮るようなことも無かった。

中の様子は今までと代わり映えしなかった。顕示欲を満たすために飾られた品の数々も、今は部屋の隅にひっそりと息を潜めている。唯一つだけ、それらを照らしあげるのが、部屋の中央にある境界

の光だということのをのぞけば、だが。

玉座の前を陣取る形で、筒状の結界が縦に伸びていた。それが二つ。

二重構造をなすそれらのうち外側のものは、床に描かれた術式を守っているようだ。

そして、内側の結界に囲まれて、ここからでも分かる、何十もの人々がくず折れていた。

すぐに駆け寄りたい衝動を必死に抑え、さらに注意深く部屋を観察する。術者の姿は見当たらない。

しばらくそうしていたが、謁見の間は静かなものだった。それこそ、壁、床、空気に至るまでが死んでしまったかのような静けさだ。それはあながち間違っていないのかもしれない。

ここは原因。私たちを巻き込んだ封の中心。幽体が現れた魔術の式場。彷徨う死者たちの誕生の祭壇。

……そして、たぶん最も始めに死んだ場所。

シシーが背負っていた本を肩にかけなおした。目に見えて警戒の色を強めている。そのまま慎重に歩き出したシシーの後に続くこうと、足音を立てないように一歩を踏み出す。途端に冷気がまとわり付いてきた。

世界が変わった。ここでなら、どんな理不尽もまかり通ってしまう。そんな思いがふつふつと浮かび上がってきた。

振り払おうにも、その思いはひどく私の心を掴んで離してはくれない。安心するためにも、私は玉座の横にある、ぽっかりと開け放たれた扉を注意していた。

近づけば近づくほど、より克明に現れる惨状。目を逸らさずにいられるのは、それが私の知る死というものからあまりにかけ離れているからだろうか。まだ、花に沈み安らかな顔をしているほうが、死というものを受け入れられる。

結界の中に安楽なところなど一つもなかった。王、給仕、男、女、

老人、子供。一切の差別無く、同じ苦しみに死んでいったのだろう。ひどく乾ききって、木の枝のような体はばきばきと裂けていた。

ここまでならば、都を彷徨う人々とほとんど変わらない。違うのは見ただけで分かるほどの苦しみの表情を全ての亡骸が湛えていたことだった。

「……ひどい」

無意識にこぼれ出た言葉だった。

「相手が非情な奴なのは、町に入ったときから知ってたでしょ」

声のした方を見れば、シシーが結界を調べるために移動を始めていた。私はシシーから離れたくなくて、駆け足で近寄る。

「これ、解けるかな？」シシーが聞いてきた。

「術者をどうにかすれば、あるいは」

結界を解くのは至難の業だろう。力技で解く技術は持っていないし、生命片^{マナ}切れを狙おうにも、その生命片^{マナ}がどこからか供給され続けているから、今まで結界が維持できていたのだから。もしかしたら、森の中を漂っていた幽体たちが集めた生命片^{マナ}を送っているのかもしれない。

やっぱり術者に解かせるしかないだろう。

それにしても、

「一体何をしようとしてるんだろう」

「さあ、少なくとも世のため人のためなんて言葉は聞けないだろうね。アイリス、ちょっとあたりを警戒してて。魔術使ってみるから」

幽体たちが群がってくるんじゃないか。そう言う前にシシーは光の^{F.O.S}一単語を発動していた。返事ぐらい聞いてからでもいいだろうに。木鈴の音はいくら待っても聞こえてこない。そのことに、ひとまず安心する。この部屋ならば魔術を使えそうだ。発光する結界に、恐る恐る触れてみる。ひどく冷たい。それは冬の外気に晒された金板を思い起こさせた。部屋の中が底冷えしていたのも、このせいなのかもしれない。そうやって結界に触れていると。

「おや？ お前たちは誰だい？」

元凶が話しかけてきた。

「別に知りたいことでもないか。おかしいな、私だけのはずなのだが。……まあ、いいか。歓迎するよ、お坊ちゃんにお嬢ちゃん。恥ずかしいことに、一人で心細かったんだ」

真っ黒な布を頭からすっぽりと被った何者かが、一段高いところにある玉座の間から見下ろしていた。声と外見からは背の高い男だということがかがえる。けれど、布は顔や体型すら覆い隠し、私にはそれ以上のことは読み取れなかった。

「実は今、ある実験をしていてね。すごく面白いことが分かったんだ。これはもう世紀の発見だと、私は思うね。誰もが舌を巻くに違

いない。……ああ、久しぶりの会話は楽しいなあ」

男の話は途切れることなく続いていく。どうでもいいことをつらつらと、つらつらと。でも、その中に一つだけ、咎めずにはいられない言葉があった。

実験？ あれが？ この惨状が？

「実験というのは、あの都の人たちのこと？」

シシーの問いかけに、男は嬉々として答える。

「見て来たのかい？ すごかったろう。私の仮説が証明されたんだ。やっぱり、誰も知らないことを暴くのは楽しいね。実験はまだ途中ではあるけれど、もう考察も完了しているよ。きっと、お坊ちゃんたちも驚くはずだ。これも何かの縁だし、少し中身を話してあげよう。まだ、私しか知らない世界の原理だ」

「……ふざけないで」

私は、手の震えを止められなかった。強く握りしめていないと、怒りで何を口走るか分からなかったからだ。

「彼方の言う、その実験とやらに、どれだけの人を巻き込んだの。どれだけの人を苦しめたの。……どれだけの人を殺したの！

それを彼方は……すごい？ たのしい？ ありえないよ。

お前は命を何だと思ってる！」

「そう、それだ！！」

私の怒声を上回る声量で男が叫んだ。すごく、楽しそうに。

「私は、命とは何かを知りたかったんだ。すごいよ、お嬢ちゃん。

お嬢ちゃんは今、私と同じ疑問にぶつかつた。

見えないし、触れない。聞けないし、嗅げない。そして、味わうことも出来ない。感じられないし、思い浮かべられない。だけど、無ければ人は生きられない。

「一体命とは何なんだ……」

大仰に天井を仰ぎながら男は言った。すごく、楽しそうに。

「……私はね、お嬢ちゃん、命は大きな輪だという仮説を立てたんだ。生命片も生命核も突き詰めれば命と同じものだろう？　そうである以上、どこかで循環していなくちゃおかしいんだ。万物を縛る、保存量の法則だよ。」

生物から抜け出した生命核はまた生物に。そうやって、ぐるぐる、ぐるぐる。

そう考えると、死や生という概念もおかしく感じられてこないかい？　命を失うことを死というけれど、命は失われることはないんだ。おかしくないかい？　命を授かることを生というけれど、命は元から存在するんだ。おかしくないかい？

だから私は、命は輪だという仮説を立てたんだよ。万人が考える死や生はその輪の一点でしかありえない、いわゆる通過儀礼なんだ。この仮説を証明するために、今回の実験はあつたんだ。実験内容自体はすごく簡単なものだよ。つまりね、その輪を切つて、ずらすだけなんだ。

そう、永久的な生命核の循環に、始まりと終わりを作つただけなんだよ。これで、今まで通りに世界が進んでいくのなら、私の仮説は間違つている。少しでも異常があれば、仮説は正しかったってね。結果は、お嬢ちゃんたちも知ってるよね。大成功さ。彼らは一般で言う死体となりながらも、動いている。

命は生命核の循環だつたって事さ。そして、命を失つた今の彼らこそが本当の死者ということになる。

空の肉体がなぜ動くのか、失った生命核がどこに行くのかは、いまだはつきりしないが、そこはおいおい説明していくとしよう。

私としては、いわゆるの死がいわゆるの生へ繋がるうと、律儀に円運動して、けれど与えられた、新たな軸方向へ螺旋を描いて伸びているのではと考えているんだ。つまりね、終わりという一瞬を無限大に引き伸ばしているのではということだよ。

次の実験はね、この死の螺旋を輪にして、終わりと始まりをつなげようと思うんだ。すごく面白い結果が出そうではないかい？

……ああ、たのしいなあ」

謁見の間に男の下卑た笑い声が響き渡る。身をよじるようにして、体を震わすその姿は、私からありったけの嫌悪感を引き出してくれた。

「そんなくだらないことで、人々の命をもてあそんだの？」

侮蔑の籠こもった私の呟きは、なぜか、謁見の間全体へと染み渡った。先ほどもまでの男の笑い声は、静寂へと摩り替わる。

「……くだらない？」

堪えきれずに漏れ出たような声だった。

「くだらないと言ったか、小娘え……！」

それは、すぐに激昂の気迫となって私へと向けられた。友好的な態度など、一瞬で崩壊して、もうひとかけらも残っていない。

「ああ、何で分からないんだろう。何で認められないんだろう。いつもそうだった。私の考えを誰も理解しない」

両手で顔を覆うようにして、男が告白する。ひどく、苦しそうに。

「それとも、まだ足りないのか？ やっぱり次の実験も始めてしまおうか。ああ、でも、まだ生命核アニマも足りない、生命片マナも足りない……」

男は黒い布で顔を隠し、表情は分からない。けれど、指の隙間から男と目があった気がした。男の口がつりあがるのを見た気がした。

「……あるじゃないか、目の前に」

腕を持ち上げ、男は震える声で呟いた。ひどく、愉しそうに。

— 是は生を厭うものへの祝福。 《pou evlogie ito thanato》

— 是は死を厭うものへの鉄槌。 《o idios tsimpi matiz zois》

— 逃げることは叶わないだろう。 《tous apagorevounnatoskas》

— 一王の許すわけがないのだから。 《to einai klisis》
” Psychi Vlastos” 《

死霊術式

” 緯切ヒトキ”

私たちに向けられた手のひらから、白い何かが迸る。付け焼刃の私の詠唱とは比べ物にならないほどに早く韻を結び発動した敵の魔術は、交わそうとした私の目の前で漆黒の壁にかき消された。

今まで黙っていたシシーが右手を掲げていた。左手と本の表紙からは青白い光が漏れ出ている。シシーが”鉄壁”とは違う結界を発動したのは明白だった。

「おや？ 面白い魔術を使うね」壁の向こうから声だけが聞こえてくる。「動かせる結界とは、初めて見たよ。……仕方がない、攻撃を変えよう」

「アイリス、呪文！」

男と私は同時に口を開く。

— 我は送ろう《aftos epiferi ena tha
natos》

— 希望に生を幻視した者も《kai echei ochi a
fi》

— 絶望に死を見出した者も《kai echei ochi f
imi》

— ただ等しく平等に《aftos einai molis d
iataaso apo vasilias》

— 此の手に宿るは供物と褒賞《yparchoun pros f
erontase mou sostos》

— 故に我が全ては王のために《kai anta moivis
e mou aristera》

— 逃げることは叶わないだろう。《tous apagorev
ounnatoskasas》

— 王の許すわけがないのだから。《to einai klis
is” Synkrousi Cheri”》

死霊術式

” 報贄ほしの相克”

— 舞い踊るは颯颯の蝶《to anemos mygas
to ouranos》

— 其の前に汝、片々と成す《aftos oidyo aic
hmiros fterro》

— 飄々彷徨う胡蝶の気まぐれは《kai kovotapa
nta》

— しかし、紛う事無き刃の化身《to einai klisis
” Anemoi Petalouda”》

精霊術式

” 風伯立羽ふうはくたては”

詠唱の終わりも同時だった。やはり、速い。私よりも一段高位の

魔術を発動されてしまった。

……けれど、私の魔術は数で攻める。

ありつたけの力をこめて、私は目の前にいる蝶を叩いた。途端、何十という破片に散らばる緑色の生命片の塊。其の一つ一つが小さな蝶を形作る。

「行け！」

研ぎ澄まされた風は其の身全てを刃と化し、男へと殺到した。

部屋の中に、またも静寂が舞い戻っていた。男の声も、足音も聞こえてこない。……男が倒れる音さえも。

と、シシーの放つ結界に奇怪な物体が生えてきた。太い筒の用で、その先が五つに分かれています。

それが、男の腕だと理解する前に、私はシシーに弾き飛ばされた。

傾いていく視界の中で、甲高い破裂音とともにシシーが吹き飛ばされたのが見える。シシーは、はるか後ろにあるはずの壁へと叩きつけられていた。

それを呆然と眺めていた私は、腹に感じる強い痛みにも、我に返る足が見えた。男の足が私に突き刺さっている。

「……うぐ！ げほっ、げほっ」

床を激しく転がされて、止まった。腹を押さえて咳き込む私に、

近づいてくる足音が恐怖だけを運んでくる。

背筋を走る寒気に、顔を上げると、男の右手が迫ってきていた。今まで感じたことのない死の感覚に、抗うすべなど持つてはおらず。男の腕は容易く私の首を捕らえた。男は道端にある小石でも拾うかの様な気軽さで、私を宙吊りする。

男の手は、この上なく冷たかった。それが、生命片^{マナ}を吸い取られている作用なのだと気付いたとき、私はもう腕を持ち上げることさえ出来なくなっていた。

火中に入った二つの命。それは、この世界において、はつきりと異端であり、弱者だった。

「綺麗に澄んだ生命片^{マナ}だね。これなら期待できるかな？」

それは独り言だった。男は布越しに私を見ている。けれど、その瞳に私は映っていない気がした。

私の首を掴んだまま、男がシシーに近づいていく。シシーは壁から崩れ落ちてから、身じろぎ一つしていかなかった。

男の左腕がシシーに向かって伸びていくのを、ぼうと見送って、私の意識は白で上塗りされていく。その最後の一片が塗りつぶされる直前に、私は男の腕が何かに弾かれるように引っ込められるのを見た気がした。

ツバサは整頓された町並みの中を逃げていた。その右腕は壊れた操り人形のように揺れている。アイリスを庇ったときに、軽く掠っただけでこれだ。シシーに忠告されるまでもなく、この身をもって知っていた。

その上で、あえて念を押しただろう事は分かっている。けれど、これは………これは、難しいんじゃないか？

月明かりの中に影を伸ばして、夜に紛れ込む。しかし、騎士たちにとつては意味のないことだった。

相手が生命片^{マナ}を追いかける以上、僕たちが相手の目を欺^{あざむ}くには死ぬしかないんだから

シシーの言葉に、いつもなら”だったら逃げればいい”、”だったら相手を殺せばいい”などと反抗するところだが、それすら出来ない相手と対峙したのは初めてだ。

騎士のような図体をしているくせに、騎士道を全力でかなぐり捨てた敵の攻撃は、着実にツバサを追いつめていた。

、カラン

道端に行く女性に、右腕をぶつけてしまった。痛みがない。顔面から激しく倒れこんだ女性は何事も無かったように立ち上がり、目的無く歩き続ける。その顔は干からびていた。

その女性をすり抜けて、騎士たちは剣線にツバサを捕らえる。音も無く地面に突き刺さった剣は、その目的を果たすことは出来なかった。

急に敵へと向き直ったツバサは、一瞬で達した最高速度で敵の間を抜け、背後へと回る。その姿は低空を飛ぶツバメめいていた。

ぴよんと一息で跳び乗った建物の上で、音を聞いた。

コロソ

あたりを見渡せば………いた。騎士たちのほかに一体、あの幽霊がいる。城のほうから一直線に向かってきていた。

アイちゃんの魔術が切れたのか、もう少しもってくれればそんな思いを否定する。遅かれ早かれこうなることは分かっていた。でも、舌打ちくらいは出してしまうものだ。

ツバサの短刀が指揮棒さながらに振られ、幽霊はそれに従い離れていく。さて、と気を取り直して騎士へと向き直れば、異様なものを見た。

から、カラから

、カラカラ、カラカラ

からカラ、カラ、カラカラからカラから

騎士たちが体を縮めていく。何かに耐える仕草だった。内から食い破ろうとする何かを抑えるしぐさにも見える。

何かとは、どろどろに腐りかけた人の顔の形をしていた。そのくせ、発せられる音はひどく笑っているようだった。

ぴりぴりと肌を焼かれていくような感覚に、自然と足は敵から背

き、

文字どおり弾けた敵から逃れようと、隣の建物へと飛び掛り、そこで後悔した。

着地するまでの間も無く、前後左右上下までもがどろどろの顔に埋め尽くされようとしている。

とつさの判断で風の刃を飛ばしてみるも、顔たちは見向きもしなかった。

進退谷まる。

地に足着いて方位から逃れるのが先か、相手がツバサに憑くのが先か。その結果は明白だった。

屋上を無様に転がるツバサは、生きていた。騎士たちから最も離れた場所に開いた、肩幅ほどの包囲の穴に、体を捻じ込んだからだ。だから、ツバサは生きていた。……けど、それだけだ。

顔たちが集まって、騎士を形作るのを、ツバサはただ見ている。騎士たちがこちらを振り返るのを、ただ見ている。

逃げようにも、ツバサの右足は死んで（・・・）いた。

騎士たちが剣を振り上げるのすら、ただ、見ていた。

悲鳴が聞こえた。動きたくない。

生暖かいものが膝にかかった。知りたくない。

怪物の下種な笑い声が響いた。聞きたくない。

薄暗い部屋の中に、二本のろうそくだけが揺らめいている。

ふと、悲鳴が途切れていたことに気付いた。

重い頭を上げてみれば、妹がいた。腕にはナイフが貫通している。あまりの痛さに気絶したんだろうか。ぼくには分からない。

ねえ、神様。もしいるんなら、その顔を、思いっきり殴らせてください。

友達と遊ぶのはいけないことでしたか？

おいしいご飯を食べてみたいと思うのはいけないことでしたか？

……いなくなったお母さんに会いたいと望むのは、いけないことでしたか？

ねえ、神様。もしいるんなら、一回だけで良いんです。その顔を、思いっきり殴らせてください。

怪物と目があつた。

その顔が狂気じみた笑みに歪むのを、ぼくはただ見ている。怪物が近づいてくるのを、ただ見ている。

逃げたくても、ぼくの右足は鎖に囚われていた。

怪物がナイフを振り上げるのすら、ただ、見ていた。

でも

そのナイフが振り下ろされるのを、ぼくは見えていない。その前に怪物が消えてしまった。変わりに出てきたのは、全身に武器を纏った男の人。

その姿は悪魔みたいで怖かったけど、………神様よりもよっぽどかっこよかった。

騎士たちが剣を振り下ろすことは無かった。強風に晒されて、体ごと霧散したからだ。

ツバサは自分の体を抱き上げた、その太い腕に、左腕だけで抱きつく。

「……走馬灯が見えちゃったよ。助けるなら、もっと早く来てよね」
「……すまない」

それは、あの時、気絶した妹に掛けた言葉。この言葉で、ぼくはこの人が悪魔ではないのだと分かったんだっけ。
だって、悪魔は自分を責めないもの。自分のせいじゃないのに、罪悪感に顔をしかめることなんてないもの。

「……でも、助けに来てくれて、ありがとう。師匠」

掴んだ腕はすごく温かった。

Chapter 2 - 10 - Sanity Insanity - (前書き)

今回のあとがきのページは、少し修正を加えたChapter 1 - 1、1 - 2の文表現を取り入れております。なんか脈絡ないなと思っただ方はすいません。

.....寒い。

頬に触れる冷たさに、シシーは目を覚ました。まどろんだ意識は、自分がおかれた状況を思い出した途端、急速に覚醒していく。

「.....！ アイリス！」

顔を上げただけで、体のあちこちがずきずきと痛んだ。けど、それがどうした。体に鞭打って立ち上がり、アイリスを探す。すぐに見つかった。見つけたくなかった。

裸にされたアイリスが、玉座に座らされ、手足を拘束された姿なんて、見つけたくなかった。

白く華奢な体が、黒い線で埋め尽くされていく。アイリスが暴れて抵抗しているが、男の指先は止まらない。

術式の完成はすぐそこまで迫ってきていた。

そのとき、男が身じろぎしたおかげでアイリスと目があった。少しでもこちらに近づくように身を乗り出して、叫んでいる。

何も聞こえない。

知らず、僕はアイリスの名前を叫んでいた。

何も伝わらない。

男が玉座から離れた。その手には一冊の本が握られている。

アイリスの顔が恐怖に歪むのを、結界越しに見ることしか出来ないのか、僕は。殴りつけた腕は、ただ痛いだけだった。

そして男は、最後の韻を紡ぐ。

アイリスの暴れ方がまた一段と激しくなった。けれど、それは抵抗ではない。抵抗する余力など、あるはずがない。

いま、アイリスは、僕の周りに転がる木乃伊ミイラと同じ苦しみを受けているんだ。

体を硬直させて、目をぎゅっと閉じて、漏れ出る悲鳴をかみ殺して……………

あれ？ おかしいな。　　ぼくは　その　苦痛に歪む顔を
知っているよ？

『黒』は理解できなかった。なぜ、自分の集めた研究成果と同じものを同僚が持っているのか。なぜ、自分ではなくその同僚が評価されているのか。理解できるわけがなかった。

だから始めたのに。絶対人にはまねできない、この実験を。

『黒』は納得できなかった。なぜ、何十という魂喰いを前にして二人の生き残りが現れたのか。なぜ、その二人にすら実験を否定されたのか。納得できるわけがなかった。

だから始めたのに。絶対人に認められる、次なる実験を。

『黒』は理解できなかった。なぜ、生き残りの片割れ、気絶した少年を掴もうとしたこの腕が弾かれたのか。　　なぜ、その少年に自分が殺されそうになっているのか。理解できるわけがなかった。

綻びの音は突然に。硝子の碎けるような音は、むしろ明るかった。

光源を失ったはずの広間は、とりわけ明るかった。

ただ、蒼灰色あおばいを暗赤色に塗り替えて、少年が結界まじりに囚われている。否、結界が少年に囚われていた。

「……何なんだ、お前は」搾り出すような声。

『黒』は確認しなかった。近づいてくる少年は、果たして、人間なのだろうか。

「さあ〜？」少年は階段に足を掛ける。「人に聞いたことないから、判らないよ」

結界の形は定まらない。うねり、拉げ、歪み、少年に纏わり付いている。その色も相まって、それは巨大な心臓のよう。

鼓動して押し出された血液があたりを朱色で満たしていくように、『黒』の異界は『赤』の異界に敗は衄いしていく。

『黒』の優位性など、あまねく塵となっていた。

少年が階段を上りきる。ここにきてはまだ、『黒』は動かない。動けるわけが無かった。ただ、少年の口元から目が離せなかった。

髪に隠れたその顔の、唯一見えるその口が、幽鬼のごとくに壊れていたから。

少女の苦悶の声を背景に、少年と『黒』が相対する。そこまで、だった。

男を壁に叩きつけてすぐ、客体に主体が追いついたのを、シシーは感じた。今の自分の行動が、自分が行動したことで生み出されたものだ、遅ればせながらに気付く。

おかしいな感覚だった。

自分が当たり前にやったことに、自分で肯定できない。そんな感じを頭の片隅に沈めて、シシーは走る。何で今まで歩いていたのか、やっぱりわからなかった。

「アイリス！」

返事はない。聞こえているのかも分からない。ただその口から漏れる苦悶が、少年の心臓を捉えて離さない。

「まってて、すぐ助けるから」

けど、どうやって？ アイリスの腕をこすってみただけど、黒い線は消えなかった。腕を固定している金具が血で赤く染まってるのを見て、焦燥感だけが募っていく。その金具も自分では壊せそうにない。

そこまで考えて、自分の馬鹿さ加減に腹が立った。何で男を気絶させてしまったんだろう。男は床で伸びていた。その顔に頭巾の上から水を掛けて、無理やりに覚醒させる。

咳をする動作などお構いなしに、襟首を掴んで引き寄せた。

「おい！ 今すぐあれを止める」

男ははじめこそ恐怖しているようだったが、しばらくもしないうちに嘲りを多分に含んだ声で喋り始めた。

「無理だよ、お坊ちゃん。私は実験を辞めるつもりなんてなかったし、止めるつもりなんてまったく無かったんだ。だから止める方法なんて知らないし、そもそも本に載ってないんだよ。」

多分譲ってくれた人が破ったんだろうね。理由は分からないけど、別に知りたいことじゃなかったし、必要なかったから聞いてないよ。だから止める方法なんて知らない。

……それにほら、もう遅いよ。生命片マナが底を尽きそうだ。次は、生命核アニマだね。お坊ちゃん」

視線を向けた先で、アイリスの体から白い靄みたいなものが細かい糸のように昇り始めていた。

シシーは床に転がっている男の魔道書を拾い上げて、中に目を通す。瞬きなんてしない。そんな時間は残されていなかった。

傍目でアイリスの安否を確認するたび、白い糸は増えていく。

二本、三本。

男の言ったとおり、魔術書の末項がごっそりと破り捨てられていた。

、いやだ。

魔道書を床に放り投げて、アイリスに駆け寄るシシー。その頬に一筋の涙が流れている。伸ばした手はアイリスに描かれた術式を消そうとしているようで、むしろ縋り付いている様だった。

四本、五本。

シシーは後悔していた。こんな所に来ずに森の中を逃げ回っていたらこんなことにはならなかった。誰かの助けを待ってればよかったんだ。と。

六本、七本。

白い糸が八本に増えたときだった。

アイリスの銀髪が空を湛えた蒼色に染まる。髪留めに括り付けられていた一輪の水晶花が皓々（こうこう）と輝いていた。

そのおかげか、アイリスの暴れ方が少し落ち着く。

驚いてアイリスの顔を見れば、硬く睨られた^{まぶた}瞼からすうーっと力が抜けていくのが分かった。そして、

「シシー？」

薄く目を上げて、二人が互いを認め合った。

嗚呼と、言葉にならない声をあげて、シシーが震えている。安堵ではなく、これから訪れる未来に恐怖して。

一瞬の強い発光の後、光は少しずつ消えてきていた。それに合わせるように、アイリスの瞼も落ちていく。

、いやだ……！

それは、死への秒読みのよう。

「……よかった、無事だった」

水晶かの光が消える直前に、アイリスはそういって口元だけで微笑んだ。その声を呆然と聞き入って……

あれ？ おかしいな。　ぼくは　この　苦しみを隠して

微笑む顔を　知っているよ？

「いやだ――――！！」

光の奔流が、謁見の間を襲った。
シシーの持つ、無名の魔術書がひとりでに浮かび上がる。青白い
光を撒き散らしながら、ばらばらとページがめくられていく。
次々変わる紙面には、今までシシーの読んだことのない事が書か
れていた。

xekiniseteanalysis.....
aftosepiferienathantos.
kai echeiochiafi...
kai echeiochifimi...
aftoseienaimolisdiaatasso
povasilias...
toeinai polyefkoli...
allatecheipotetelos...
pou spaetitinalysidatiszo
is...
kai synergatistou fakelo...
anggelos chamoggeloggianekrou
s...
diavolos chamoggeloggiaaggioi
alla aftos chamonggelo ggia ka
neis...
kampa naidentrodaktylis...
egomechritthanatou...
symboloeinaimolistiszois.

o
aftos apagorevouna to skas

.telos "Thanatou Speira"

xekiniseterevna

.telos "Iero Dachtylidi"

魔術書の動きがぴたりと止まったのと同時に、シシーの周りを、
白い円が何重にも廻り始める。それは紛れも無く、記述型の術式だ
った。

広間に浮かんでいた、漆黒の生命片マナと対になる、純白の生命片マナが
シシーから溢れ出す。

白い円が一箇所に収束するように、それは一本の剣を成した。
その柄を掴んだシシーは、切っ先をアイリスへと向ける。
苦しみ悶える少女に向けて、その切っ先を、突き刺した。

慌てて剣を引き抜く、自分が今何をやったのか理解できなかった。
剣が霧散し、何も見えなくなった世界でシシーは一人、息を呑む。
少女の息遣いが聞こえてきた。

まだ生きてる！

シシーはすぐに光のFOS一単語を唱えた。淡い光に少年と少女が浮か
び上がってくる。刺し貫いたはずの腹は白い肌を晒していた。

よかった。本当によかった。この際、不思議さなんてどうでもいいや。

胸を穏やかに上下させて、閉じていた目が開かれていく。もう、大丈夫そうだった。

「アイリス、大丈夫？」

「シシー？……うん、もう苦しくない」

どこか心ここに在らずな返事だったけど、ちゃんとここに居る声。力が抜けていく。立ってられなくなつて、地面へとへたり込んだ。

「ねえ、シシー」

顔を上げれば、どこか全体的に赤みを帯びたアイリスが居る。その赤さも今ここに生きている証のようで、うれしかった。けどなんで赤くなっているのだろう。その疑問に答えるようにアイリスが言う。

「あんまり、見ないで？」

言われて、気付いた。アイリスは、裸だったんだ。気にする余裕なんて無かったから……。

ぱつと顔を逸らす。でも、目に映りこんだアイリスの姿は消えなかった。

「ごめん。まっつて、どうにかしてその手枷外すから」

雑念を振り払うように、勢いよく立ち上がる。

ずく。

……その音だけが妙にはっきり聞こえた。霞み始めた視界を少し下げると、目を見開いたアイリスが見える。その肌は、なぜか赤く染まっていた。

口から血が吐き出される。傾いでいく視界の中に何か銀色に光るものが映りこむ。

それは、剣だった。血塗れているけど、所々に背後の男の姿が反射している。

そういえば、起こしてそのままだったな　　そんな事を無感動に考えながら、地面へと倒れ伏し……………

シシーの世界が、白く砕けた。

破綻の種は伸び続け、これより世界は崩壊を開始する。

気付くと誰かの背の上だった。暖かな鼓動を感じるここは揺り籠のそれか。

「起きた？」

意識が朦朧として、真っ白の頭でなんとなく頷く。

「なんで……」

誰かに背負われているのだろう。おかしいな、自分は一体何をしていたのだろう。……それに、なんで、体中が焼けるように熱いのだろう。

体の内側から崩れていく様な激しい痛みに、意識がまどろみから引っ張り出される。より、鮮明な痛みとともに。

きつく食いしばった歯の隙間から、はばかり苦悶の声が漏れた。

「おかしいな。傷はそんなに深くないのに」

そういえば、声は女性のものだった。体が上下に揺さぶられるたびに、下のほうで小枝の折れる音がする。ここは森の中なのだろうか。

立ちくらみを起こしたときのような真っ白な世界では、今自分の置かれている状況がよくわからなかった。

何でこんなことになってるんだろう、全然思い当たる節がない。

……そもそも、

「きみ、名前は？」

「……わからない」

自分を自分と認識するための記憶が、すっぱりと欠落しているようだった。生まれてから今までを辿ることができない。すごく、もどかしい。

「記憶がないの？」

「多分。……君は、俺の知り合い？」

言つて、さつき相手が自分の名前を聞いたのを思い出した。少なくとも名前を知らない間柄なのだろう。……こつちが一方的に知つてた可能性はあるのか。………なんか、嫌だな、それ。

「初めてのはずだよ。どこかですれ違ったことはあるかもしれないけどね。……大丈夫、きみがぼくを付けてたりとか、影からこそこそ見てたとかはないから」

なんていうか、俺の思考をぴたりと突いてくる人だ。声色から察するに、きつと彼女はにやにやしている。

それにしても、今まで自分が何をやってたのか分からないのが、ここまで怖いとは。犯罪は起こしているなよ、過去の俺。

やっと色が着き始めた白い世界に、俺は一人、心の中で手を合わせた。

少し視線をずらせば女性の顔が見える。予想以上にその顔は幼かった。いや、男一人背負つて悠々と森の中を歩けるような体格ではないという意味での幼さなのだが。

どこか特徴的な翼の型の髪飾りが空に向かって伸びていて、それに束ねられた髪の毛が横からぴょんと飛び出している。それが俺の頬に当たっていた。

「運んでくれてありがとう。もういいよ、自分で歩ける」

本当はまだ体中が痛むけど、彼女に負担をかけるのはなんとなく嫌だった。この思いが今まで培っていたはずのものから来てるのか、今新しく手に入れた記憶から出てきたのか判断つかないのが、また、もどかしい。

隣の彼女が訝しげに覗きこんできたが、何も言わずにおろしてくれた。踏ん張ろうとした足は力なく折れ曲がり、背後にあった木に寄りかかってしまう。

その姿を見て、彼女はどこか呆れたように口を開いた。

「ほら、まだだめじゃない。その足じゃ歩けないでしょ。相手への配慮を考えるのは、まず自分が配慮される状態から回復した後でしようが……まあ、それは訳の解らない男心のせいにしとくか。歩けるようになったら言ってね」

そういつて、彼女は木の根に腰を下ろしてしまった。やっぱり心のうちが読まれていたみたいだ。その際、少女には不釣り合いな長剣が木の幹にあたって音を出した。

俺は素直に腰を下ろす。ここまでお膳立てされてしまえば、無理して歩く必要など無くなってしまったのだから。

目の前に居る彼女は、じっと俺のことを見ていた。観察しているのかもしれない。それは歳相応の好奇心から来てるようだった。この少女のどこに俺を軽々と運べるほどの力が眠っているのだろうか。と、少女の無造作に投げ出された右腕が気になった、それはあたかも糸の切れた操り人形のよう。彼女の腕であって彼女の腕ではないような感じがする。

見つめあいはこちらの根負けで、俺は自分の姿を確認するために視線を下に向けた。どこか神官じみた真っ白なローブが全身を覆っている。とてもじゃないが、森に入っていくような服装じゃない。

過去の俺は一体何をしてたんだろうか。傷は深くないとか言っただし、なんだかとても普通じゃないことになっていた気がする。……今この瞬間も普通じゃないか。

森の中で遊ぶ風たちが気持ちいい。

「ねえ」思考の海の只中で、少女の声が聞こえてきた。「その服のどこかに、自分の名前が書かれたものとか入ってないの？」

彼女の言葉に、はっとなる。確かに身分を照明できるものを身に着けている可能性は高そうだ。特に神職などに就いていればなおさらだ。

………と、思ったんだけど。服の中には何も無かった。本当に何も持っていない。

「なかった？」

少女は手に持った剣から目を放すようにこちらを見ていた。頷くと「こつちにも無かった」と剣を放り投げてくる。どうやら俺のものだったようだ。

記憶にない剣を眺めていると、目の前で少女が左手を膝に打ちつけた。ここにきてはつきりと認識する。彼女は右腕が使えないんだ。

「じゃあ、名前決めないとね」

そのままうーんと考え込んでしまった彼女は、俺の名前を考えてくれているらしい。ありがたく一任することにした。

「決めた。古代語の純白《Lefkotita》って言葉から取って。レフにしよう。服も髪も真っ白だし、いいよね？」

考え込むというほどでもなかった。清しいほどに物事をぱっぱと決めていく人なのだろうと、心の片隅でなんとなく思う。きっと周りの人が振り回されている。

是非を問わせない言い方で、是非を問うとはこれ如何に。な、感じがするけど、特に非の返答を持ってない俺は、ただ頷くのみだ。いきなり彼女の顔が全面に広がって、気後れしていたのもある。

どこか楽しみに頷き返した彼女は、もといた木の幹まで戻っていつてしまった。あっさりとした会話の終わりだ。けど、それだと俺は何にも知れない。

「ところで、それは不公平だから、「君の名前は？」

俺は尋ねて。

「ぼく？ ツバサだよ」

少女は答えた。

森の中、二人は出会った。木々の隙間から見える空は晴れ渡り、けれど、どちらも一寸先すら見えぬ霧を、心に宿して。

綻びの音は突然に。

破綻の種は、芽を出した。

ツバサと名乗った少女に連れられて、レフは彼女の町へと足を踏み入れた。淀んだ空気。あわただしく右往左往している人々。

自分の視界に入ってくる人のすべては、一様に悲しみや絶望を湛えているようだった。

当たり前か。

現存する生物のものとは思えないほどの巨大な爪あとが、縦横無尽に走っている。石畳もめくれ上がり、建物は痛々しく削りとられている。完全に崩壊した建物もあった。

その中で、耳を澄まさずとも泣き声が聞こえてくる。女性が、泣きながら誰かの名前を読んでいる。夫か子供か。とにかく親しい人の名前だろう。その呼びかけに答える人はいない。周りに居る人たちには聞こえてすらいらないようだった。

途切れない黒煙は、燃え盛る民家から立ち上っている。住人の人たちが魔術で火を消そうとしているが、火はむしろひどくなるばかり。

その赤い光に照らされて、少し視線を移せば、両の腕が欠けた男が無造作に倒れている。ひどく不揃いな呼吸をする男を赤く染めているのはおびただしい量の血液だ。

……どうみても、町は何かには蹂躪されたあとだった。

「……何があったんだよ」

「黒い異形が襲ってきた」

どこかあっけらかんとしたツバサの声。後ろを振り返れば、ツバサがどこか違う所を見ている。つられて視線の先を追えば、小さな女の子が崩れた建物の前で一心に残骸を取り除こうとしていた。

嫌な予感がした。

女の子のどかした瓦礫の影から腕だけがゆっと飛び出している。考える以前に足が動き出した。お母さん、お母さんと呟く少女の血だらけの手から、すばやく破片を抜き取って後ろへ下がらせる。母親は落ちてきた天井の下敷きになっているようだ。一枚板の瓦礫の下に腕を突っ込んで力の限りに持ち上げた。ぶり返した激痛を無理やり押さえ込んで、腕に力をこめる。少しずつ上がっていく天井。少しずつ明らかになる瓦礫の下。

母親は、脇から下がなかった。

「おかあさん~~~~っ！」

叫ぶ少女の目をツバサが手のひらで塞ぎ、離れていく。俺は、動けなかった。ひびだらけだった天井は、自らの重さに耐え切れず崩れていく。ぼろぼろ、ぼろぼろと。その下に少女の母を埋めて。

自分の中からこみ上げてくるものを、堪えきれずに吐き出した。

俺は、一体どこにいるんだ。過去の俺は、どこにいたんだ。

積もった瓦礫の影から腕だけがゆっと飛び出していた。

「……なんで」

こんなことになってるんだ。

「ツバサ！ 黒い異形って何だ！」

俺は知らず声を荒げていた。泣き喚く少女を抱きしめたままで、ツバサがこちらに振り返る。しばらく俯いていたツバサは、近くで救助活動をしていた男に少女を託すと俺の手を引いて歩き出した。

終始無言を貫くツバサ。我慢できずにもう一度質問しようとした俺に、すぐに話すよと言ったきり口を閉ざしてしまった。あっけら

かんとした口調だった。逆にそれが俺の不安を煽ってくる。

ツバサにつれられてたどり着いた場所は、町外れに立つ小さな教会だった。くたびれた白い壁に囲まれて、長い間信者の祈りに耳を傾けていたのだろう。その面影がかすかに残っていた。教会だとわかったのは白い山にまるで墓標のように十字架が突き刺さっていたからだった。

「ぼくの家」

一言。そういつてツバサは残骸を上っていく。俺は無言でついていくしかなかった。不安定な足場だ。すすいと進んでいくツバサと違って、俺はあちこちを体にぶつけていた。てっぺんまでたどり着いたツバサは十字架の下に座り込んで、空を見上げている。十字架をはさんで俺が隣に腰を下ろすと、ゆっくりと語り始めた。

「朝はお父さんが起こしてくれてたの。お祈りをして、朝ごはんを食べて。その後のぼくは本を読むか、庭に来る小鳥を眺めてたりするのが日課だった。お昼を過ぎると町から子供たちが来て、途端に家がにぎやかになるんだ。お父さんも子供たちと一緒に遊んだりしてね。恥ずかしかったからぼくは見てるだけだったんだけど、それだけでもすごく楽しかった」

けどね、とツバサは続ける。もうあっけらかんとした口調ではなかった。今まで耐えていたんだ。そう思った。

「そんなときにあれは来た！ 沢山の不細工な黒い人型。ただ片腕だけが異様にでかくて……お父さんが抵抗してたんだ。お父さん、魔術書をよく読んでたから。だからぼくに子供たちを町に避難させて、魔術で抵抗してみたみたい。」

ぼくが子供たちを町に送り届けて、避難するように叫んでたらね、

あいつらが町に入ってきたんだ。魔術はほとんど通用しなかったよ。建物が崩れて、目の前で人が引き裂かれて。ぼく、無我夢中で走ってた。お父さんに会いたかった……………」

そこまで言つて、ツバサは口を閉じてしまった。俯いて、どんな表情をしているのかわからない。どんな言葉をかけるべきかと、働かない頭を捻っている、隣で鈍い音が聞こえてきた。硬いものに拳を思いっきり叩きつけた音だ。叩きつけられた手からは血が流れ出している。

何をやってるんだとツバサの手をとろうとした俺の手を、逆に掴んでツバサは細く呟いた。

「……………ねえ。かみさまつて、いるのかな？」

顔を上げたツバサと目があつた。俺は何も答えられなかった。どうやら過去の俺は人付き合いが苦手だったみたいだ。そんな場違いなことを考えた。目の前で瞳を細かく揺らす少女の両の眼を見ただけで、そこから流れだす二筋の涙をみただけで、俺は身動きすらできなくなっていた。

俺が何か言えば、体を少しでも動かせば、すぐにでも壊れてしまふそうだったから。

見ているだけしかできない俺に、ふつと表情を崩したツバサは、けれど瞳は揺らしたままで町のほうへ向き直ってしまった。その横顔に表情はない。

「落とした粘土人形みたいにぐずぐずの人型が町に来るちよつと前にね、一人綺麗な形をした人型が教会の前を通っていったんだ。顔も何もかもを黒い布で覆った奴が。怪しいよね。ぼくが町で襲われてたときに、そいつは森の前で佇んだ。黒い異形が無差別に町の人たちを襲っている中で、そいつの目の前だけは素通りするだけだ

った。

「そいつが元凶だったんだ」

……ああ、ツバサが森に居た理由が分かってしまった。ツバサはこの少女は、復讐に身を焦がしている。俺が倒れていた森が、そいつが居た森だったんだ。

「ぼくはね、レフ、そいつを殺したい」

ツバサの横顔が人のものとは思えないほどに歪んだ。俺にだけそう見えるだけかもしれないけれど、これが復讐に燃える人の顔なんだとすんなりと納得できてしまった。

すごく醜い。痛々しくて見ていられない。

ツバサのこんな顔なんて、見たくなかった。

どこからか聞こえる鳥のさえずりに混じって、いまだ町からは誰かが叫ぶ声が微かにだが聞こえてくる。意図したわけではないが、町のほうへ視線を彷徨させた隙をつかれて、ツバサが瓦礫の山から下りていってしまった。慌てて立ち上がった俺を手で制して、ツバサは言う。

「あっちにある道は隣町に続いてるから。歩いても夕方になる前には着くと思うよ」

指先は町の反対側を指している。

「ごめんね。きみの面倒を見れるほどの余裕なんて、ないんだ。勝手に名前をつけちゃったことも謝るよ」

そのまま教会から出て行くこととするツバサに、俺は苛立ちを感じていた。全てを背負い込もうとしているように感じて、お前には関係

ないだろとでも言われたような気がした。

「なあ、手伝ってもいいか」

ひどくどすの利いた声だった。訝しげに振り返り口を開きかけたツバサを無理やりさえぎって、俺の口は止まらない。

「ここはどこ？ 私はだれ？ な、状態の俺を助けてくれたのはお前だ。名前を付けてくれたのもお前だ。町まで案内してくれたのも、何があつたのか教えてくれたのも、お前だろ。その間、痛む心で無理してたのもわかった。

そこまでしておいて、俺には何もさせてくれないってのはひどいんじゃないか？ そもそも俺は、お前に何から何まで面倒見てもらわなくちゃ生きていけないわけじゃないんだ。馬鹿にすんな」

俺が瓦礫の山から下りている間、ツバサは一言も喋らなかった。どこか驚いているようだった。立ち止まったツバサの横を通り過ぎ、背中越しにもう一言駄目押しをする。

「後もう一つ。俺が倒れてた森にそいつは居たんだろ？ なら過去の俺はそいつに関係してる可能性大だよな。そんな重要人物そんな俺を捨ててくなんてのはもったくないだろうが。」

……ツバサ、お前は一人で突っ走りすぎだよ」

今の俺はレフだ。決めた。俺は背後で涙を堪こえている少女を一人にはさせない。記憶のほうはぼちぼちと。ツバサと一緒に黒尽くめの奴を追いかけてれば、きつと思いついていくだろう。

いつの間にか聞こえなくなっていた嗚咽に俺が振り返るより先に、背後から頭だけを突き出した状態でツバサが話しかけてきた。

「それじゃあ、きみには荷物持ちを頼むよ」

その声は、どこかあっけらかんとしたものだっただけけれど、少しだけ明るい感情が混じっているように感じた。よかった。

「おう、頼め頼め。さっき気付いたんだけど、俺意外と力持ちみたいだ」

屋根をどかさうとした時に、痛みこそすれあまり力をこめずとも持ち上がっていた。と、屋根の下にあった母親の亡骸を思い出しました。

不意に足を止めた俺よりも数歩先のところでツバサが振り返る。

「ところで、その黒い奴……めんどくさいから『黒』でいいや。を、追いかけるのは町が落ち着いてからでいいよな」

「え？ 何当たり前のこと言ってるの？」

心底意味が解らないって顔をして、そのまま町のほうへと歩いていくツバサ。そのことにほっとした自分が居る。

できることならば、俺はこの少女にもうあんな顔をしてもらいたくなかった。それはきつと叶わないことだけど、せめて復讐に顔を歪ますのは後一回だけ。『黒』と対面したときだけになるように、それまでは俺が支えよう。

二人は教会を後にする。残されたのは二つの十字架。その下に亡き教会と亡き父が眠る。人の気配がなくなった教会に、新たに小鳥たちが集まり、さえずりを奏ではじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1363m/>

Librarian

2011年10月7日06時36分発行